

空言を構へたる奇特不思議を實とせず、物祝をし給はず、さりとして物を破り給はず、一つとして謗る所なき仁君なり。」
といへり。

幽齋が歌學に關する書は、その門弟の聞書によりて傳はれり。その主なるものは、佐方宗佐の編せし、

細川幽齋聞書 二卷

鳥丸光廣の著し、

耳底記 三卷 慶長三年より同七年にいたる聞書

及び、戴恩記の一部分等とす。耳底記は、和歌に關する雜話にして、歌書、故實、釋義等につきし幽齋の説の斷片にして、中に師實條の説として述べしもの少なからず。聞書は、四十項にわたりて、作歌に關する説を述べしものなるが、その説、詠歌大概、八雲御抄、恩問賢註等の抜抄、もしくは祖述なり。左に彼が古今以來の歌風について論せし一節を擧げむ。
「古今は、花實相對の集なり。後撰は、實過分すとかや。拾遺は、花實相兼ねたり。」

耳底記

細川幽齋聞書

古今以來の歌風評

り。是までは歌の餘風ありと雖も、次第に陵夷するなり。後拾遺は、八雲御抄に、經信公、俳諧の歌を入るゝにて、他事のわるさもこれを知らると侍り。是より、此道たしろぐやうにて、金葉詞花にて、はたと其風損じけるを、西行が詠み直せるよし、世稱之。然るになほ俊成卿千載集を撰し給ひしより、金葉詞花の風をすて、歌道中興せり。新古今は、正しく定家卿撰者の人たりと雖も、五人の撰者まち／＼にて、定家卿の本意あらはれず。然る間、勅をうけて新勅撰を撰まる。新古今は、花が過ぎたりとて、新勅撰には、實を以て根本とせり。其後、爲家卿、また續後撰を撰び進せらる。此風、正風體、花實相應、初心之學尤も肝要たるよし、先達稱之。此後また歌の道陵夷するを、後普光園攝政、頼阿と志を同じくして、風體を様々申し改められて、再び和歌の道おこれりとぞ。これ頼阿が力なり。よく一集／＼の建立を心にもちて、見習ふべし。……行住坐臥口にあるべきは、詠歌大概、百人一首なり。」

といへり。其他題詠、本歌取やう、風體、歌病等、凡て中世歌學の祖述なり。たゞ彼の說中注意すべきは、「歌の程拍子の事」として説けるものなり。其

歌の程拍子

説に曰く、

「歌の程拍子といふ事は、歌は音律にかけて披講するものなり。然らばな
どか程拍子なからむ。世の常人の言語も、理りのありと雖も、程拍子わろけ
れば、理り聞えず。假初の文章なども斯くの如し。まづ歌に三十一字を用ゆ
る事も、程拍子によりての事なるが、旋頭歌、混本歌などいふことも、本は三
十一字に一句を除し、或は一句不足ある歌なり。これを今の世には、やりも
てあそばぬ事も、三十一字の歌には、程拍子劣る故なり。字餘りの歌も、程拍
子をよく受けむが爲なり。古今、大江千里歌に、月見れば千々に物こそ云々、
此歌の下句、秋ならねどもと有るべきを、秋にはあらねどと一字餘せると
ころに、歌の程拍子あるべき歟。一字千金と、かやうの事なるべし。」

對語

また「對語の事」といへる一條あり。曰く、

「これは歌の上下懸合の事、たとへば、歌は問答の如し。たとへば、上句にていひ
出だしたる事をば、下句にて其心をあらはし、下句にいふべき事をば、上句
に其つまどりをして、歌は詠む事なり。詩の起承轉合などいふが如し。下句

にて櫻といはゞ、上句に咲き散る、句ふ、盛などやうの詞にておこして、下に
梅、櫻などの景趣をあらはすべきなり。大方は、其體を下句に置きて、用を上
句にあらはすべし。上句に體をあらはしぬれば、未練の歌は必ず末よわに
なるなり。たとひ歌の理はきこゆるといふとも、懸合あしき歌は、無詮事な
り。」

細詞のふとみ

又「詞のふとみ、細みといふ事」の條に、

「歌を詠する事、たとへを以ていはゞ、詞は糸なり。紋をなすは心なり。歌は
綾羅錦繡なり。作者、織手の如し。細く美しくしき糸の細き中へ、ふとくあらあ
らしき糸の一ふしもまじりたらむは、綾羅おり出だしても、何の詮か侍る
べき。又精撰の糸なりとも、織手のあしきはいかゞ。唯歌をよまんは、詞の穿
鑿肝要たるべし。かへすく、是を思へと、幽齋、行住坐臥の金言なり。」

といへり。

なほ彼が、八條智仁親王に奉りし歌口傳心持と題せる消息あり。彼の
思想を一層明らかにするものあれば、その主要を抜抄せむ。

歌口傳心持

「萬葉集を始め、いづれをも可被引見候事勿論候。まづ常に可被懸御心は、古今第一候。さ候は、尙、後撰拾遺、可被懸御心候。此外には、千載、新勅撰、續後撰、御覽有るべく候。此外は、新古今をはじめ、いづれをも面白き歌をば可被成御覽候。定家の歌は、撰集に入りたるを、常に可被懸御心、拾遺愚草などは、聞き得がたき所多く御座候間、其御分別有るべく候哉。家隆の歌をば、常に被懸御心可然候。逍遙院殿など、其分御座候つると承り及び候。近き代の歌は、後柏原院御製、逍遙院殿御歌など、被成御覽候て、上古中古當世の風情を能く御覽じ分られ、御作意をのべられ候はば、殊勝の御詠可出来候。」

要するに幽齋は、もとより殊に推奨すべき學説を有する學者にあらず。たゞ當時に於いては、教養完たき一有職家として、まさに絶えなむとせし二條家歌學の傳統を傳へたる唯一の學者なりしなり。

木下勝俊

幽齋につゞきて、世に推重せられし歌人を、木下勝俊一〇〇〇、慶安三年一〇〇〇とす。剃髮して長嘯子といへり。彼は東山の麓靈山に幽居して、漢書一千五百

山本春正

卷撰集歌合類二百六十部を藏し、かの下冷泉家より出でて儒學を興し、藤原惺窩七九、元和五年九二二、またその門なる林道春一七、明暦三年一七〇五、等と親しかりき。彼は正徹の歌風を慕ひしが、その家集、白集にあらはれたる歌文の才は、むしろ幽齋に勝りたれど、歌學の著は無し。慶安二年、舉白集を梓行せし山本春正四二、天和二年一六八二、三は號を舟木軒といふ。彼は古今類句六三、十を寛文六年に編纂せり。そは二十一代集、新葉集、六家集、源氏物語等の和歌を、下句の頭字によりて分類せるもの。類纂の書として、後世の學者を益すること、尠少ならず。また春正は、徳川光圀の命をうけて、清水宗川一主堂と、萬葉集を訂し、宗川の撰びし歌集、正木のかづらの序詞を考るせり。

第十三章 幽齋門下及びその系統

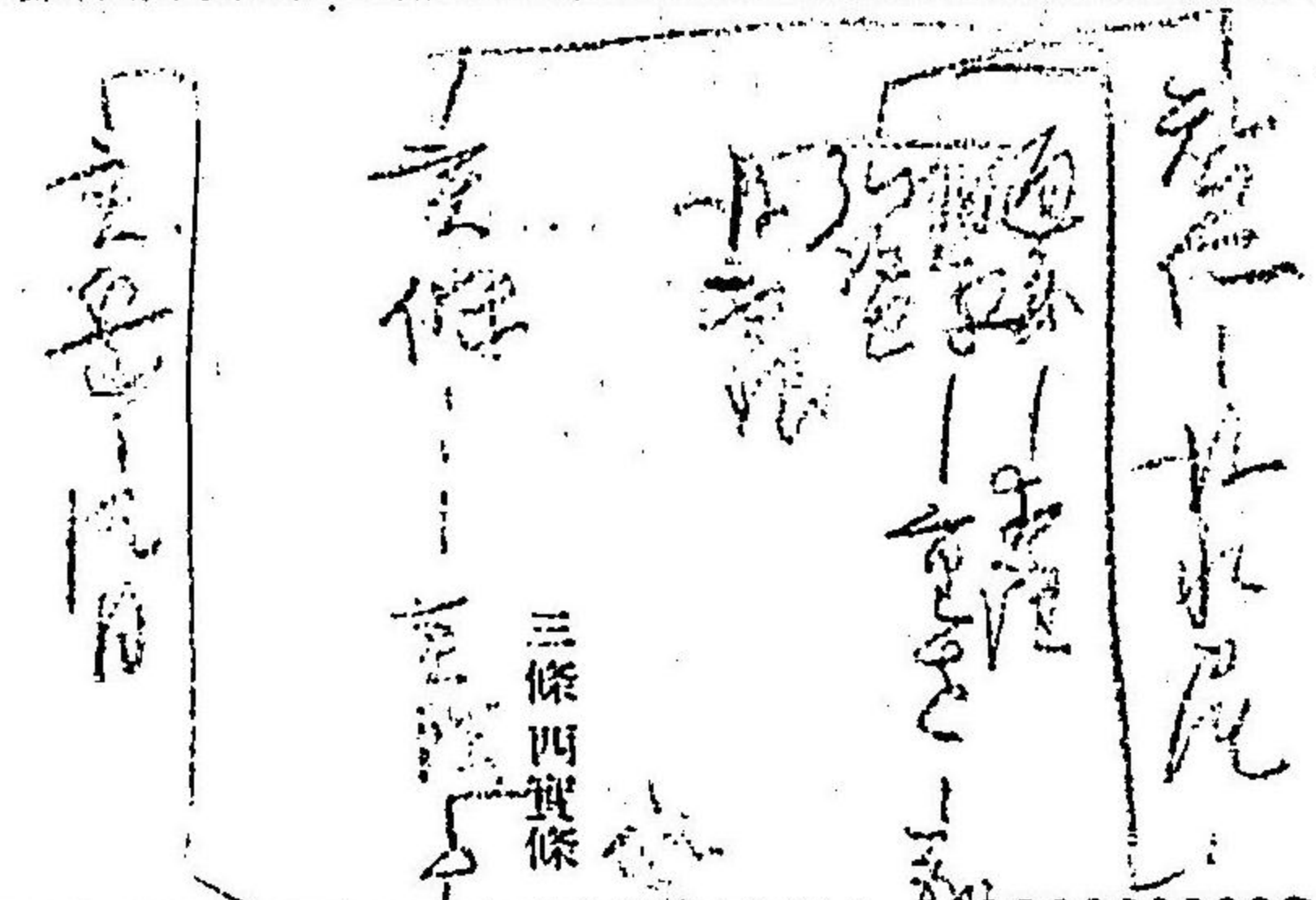
幽齋晩年京都に門弟を教へてより、一度衰へし和歌の學再び興り、上下其門に入りし人々少なからず。その古今傳授を受けしは、堂上に於いては、智仁親王、中院通勝、三條西實條、烏丸光廣等あり。武家には、島津義久長慶七十六年卒、七九七九地下には、松永貞徳あり。まかしてこれらの諸家の流派相交渉しつゝ、歌道の普及につとめ、以て徳川時代の中葉に及べり。先づ堂上派より述べむ。

堂上派
中院通勝

中院通勝 ○慶長十五年二二七は、也足軒と號す。天正十六年幽齋に就いて、古今傳授を受く。その著に、岷江入楚あり。其子通村、曾孫通茂、其子通躬、相嗣いで和歌の家となれり。

八條智仁親王

八條智仁親王 寛永六年二二は、桂光院と號す。後陽成帝の皇弟にして、慶長五年、幽齋より古今の奥義を承け、古今集聞書三卷の著あり。又、佐方



烏丸光廣

宗佐につきて、疑を質されたりき。後、萬葉に志して、彼の山阿籠政の傳へし萬葉の官府にありしをもて、校勘せられたり。親王、寛永二年、古今集の奥儀を後水尾院に講ず。而して、後水尾院は、中院通茂、飛鳥井雅章、日野弘資、後西院帝等に傳ふ。通茂の門に、松井幸隆いで、雅章の門に、本多重世、重世の門に、山名義豊いづ。後西院の傳統に、靈元院あり。

三條西實條 寛永十七年二二は、實枝の孫なり。早く父を失ひしをもて、幽齋に學びたり。彼には、その門弟が、慶長十六年以來彼の説を筆記せし詠歌聞書二卷あれど、語釋もしくは歌會の作法を述べて、記すに足るものなし。その裔、武者小路實陰、名聲を擧げたり。實陰の門に、似雲、實陰の孫實岳の門に、澄月あり。

烏丸光廣 寛永十五年二二は、當時漢學には宏才あれど、歌道に人なきを歎じ、幽齋の門に入り、慶長八年に秘訣口傳をうけ、また幽齋が、佛心に通せずんば、歌道に達する事難しといへるにより、一糸和尚に參して禪理を搜りたりき。黄葉和歌集跋、彼、歌人として一世に重きをなし、家集黄葉和歌集五卷あり。

れど、歌論の書は傳はらず。光廣の系統を引ききては、資慶、光雄、光榮、日野資枝等出でたり。

次に以上の諸系統のうち、多少の歌學説の遺れるものに就いて概説せむ。

親王及智仁
中院通勝
の系統
後水尾院

まづ第一に、智仁、親王、及び、中院、通勝の系統を述べて、各派に及ばむ。

智仁親王の系統に於いて、後水尾院延寶八年二三四〇あり。院は和歌に崩八五法名四押堪能にして、御集、鷗巢集には、秀逸の作おほく、題詠の好参考書ともいふべき一、字、御抄八卷の著あり。また當時撰集の夙望おはせしかど、故障ありしをもて、延寶年中、諸臣に勅して、二十一代集以下諸家集より、類題の歌一萬二千餘首を集めたる類題和歌集三十一卷を編輯せしめ給へりといふ。類題の書、これより前に無きにあらざれど、丁俊の二八明題の如き、これ勅撰の舉絶えし、後に、新たに、途を開かれたる事業にして、こをはじめに、新類題和歌集、續類題和歌集など、爾後相つぎて類題の書多く出で、近代にいた

おれり

れりき。

中院通茂

中院通勝の曾孫にして、後水尾院より古今を相傳せしものに、中院通茂寶永七年二二三あり。七〇號八〇あり。

通勝の子通村承應二年二二三傳奏となりて、關東へ下向せし際、將軍家光より古今傳授を所望せられしかど、此義、公家の秘事なればと言ひて、その爲に怒をかひたりきといふ。通村の子通純承應二年二二三又歌に秀で、磯の波に、通純は、莊子を見て歌をあげられたりといへり。通茂は其子なり。彼は徳川光圀と友としよく、互に和歌を贈答したり。彼に未來記鈔一卷元禄十五年成新耳底記一卷、溪雲問答等の著あり。その主なるものを、

溪雲問答

溪雲問答 一卷

とす。こは門人松井幸隆の筆記せるものなるが、煩鎖無意義なる規則を説きて、何らの創見なし。巻頭まづ、

「初學抄に、歌を詠まむには、まづ題をよく思ひとき心得べし、と有り。詠歌一體にも、題をよくよく心得とくべき事、と載せられたり。又、愚問賢註に、歌

の題の心を得て詠むべし、と云々。是らをもて思ふに、題に向ひて歌を詠まむに、其題を我が心に能く得ずしては、詠み出だす歌の道理も、そむけ侍るべし。然らば、題を誤らざるやうに辨まへ知るべき事なり。辨まへ知らずば、三書に云へる如く、題を心に得る事も難かるべし。且又、結題などは、題の文字の詠みやうにも心得あらんか。たとへば、霞隔殘花といふ題を、霞花を隔て殘すとよみ、月多秋友とあるを、月に秋の友多しと心得侍らむは、大なる相違なるべし。」

とて、題詠の慣習より用語の規則を説きしに過ぎず。

當時の堂上歌人の歌論を集めたる書に、詠歌金玉論一卷（爲範の輯めしを、予なる則榮が、安永六年に寫せるもの）あり。この書に、通茂の説をも載せたるが、其中に記すべきものあり。それによりて見るに、彼が當時一般の思想を代表して、實法にして自然淡泊なる歌を理想として、技巧華麗を斥けたること明らかし。彼曰く、

「心すぐに、安らかに、句作のびやかに、奇麗にすゞしくよみ候事に候。」

詠歌金玉論
なる通茂の説

とまた、

「或は優美すぎ、理屈すぎ、たくみ過ぎなど候ふ事は、大體の穿鑿にて候。優美過ぎたるは、詞を飾り理を忘れたるにて候。まことの優美を不知故にて候。理屈過ぎたるは、道理まかせにて、情に出でざる歌にて候。巧みたるは、優なる體を不存故にて候。歌巧みならずして、細かに理屈くさからず、道理深切に、詞を飾らずして、優なるが能く候。詠歌大概歌皆此通りに候。能々可有、一覽候。省察工夫尤稽古に候。省察工夫も、我が非を知るに有之候。古今の歌の美を見るも、其歌の美に心をつけ候事に候。たゞ我が非を知られ候事に候。知られ候と申せども、其まゝは又改り申さず候。知る事の熟し候へば、改り來り申すものにて候。我が非を省察し改むる様の工夫、肝要に候。省察とて、さのみ、ほかを求むる事にて有るまじく候。古歌の能き歌も、秀歌之大略とて、被成候詠歌大概の歌、百人一首にて候。風體あしきは、本録記、雨中吟にて候。此三部にて、善惡相分り候。觀念は心を以て見る事にて候。古歌の意味風景、詞のつゞき、心に味はひ候にて候。始めは、秀歌面白くも無く候へども

省察工夫

とまた、

耳馴れ候へば、いづともなく、悪ろき歌の體のいやに成り申し候。それを猶猶心に味ひ候へば、いづともなく面白く成り申し候。秀歌の味ひは淡くして、水の味ひのやうにて候。故に、さつと味はひたる分にては、其味ひ知りがたく候。數年心にかけて吟味候へば、又えも言はぬ味ひども有之候。」

また、名賢和歌秘説に、彼の常にいひし詞として、歌學者と歌よみとの別を説き、歌學者はともすれば歌つくりとなるも、歌學なき歌よみの歌は法にそむけり。「歌學ありて、歌よみならむこそ、あらまほしき」といへり。

通茂の三男にして、久世家をつぎし、通夏延享四年二四〇七歿七八あり。その片言詠歌金玉論に残れど、記すべきものなし。

通茂の門下にて、溪雲問答の記者なる松井幸隆延享七年二三〇九歿六九に、愚問賢註の註六窓鈔正徳元年刊あり。彼は、その學邃かりしかど、歌論に於いては、二條當流の説以外、創見なし。この著又實に、頼阿が志を發揮して、一意二條家の歌道を興隆せむとするにありとす。

久世通夏

松井幸隆

飛鳥井雅章

次に、通茂と同門に飛鳥井雅章延寶七年二三三九歿六九あり。飛鳥井家は、前に述べし如く、雅經以來歴代和歌の家にして、雅章は雅親以後の名匠なるが、彼の歌論は、詠歌金玉論にその片言を載せたり。中に、「心を第一に、ありのままに詠みいだすが秀逸といふものなり。」歌は、才覺たすこと一の病なり。唯常の詞にて面白く續くるがよきなり。」などいへり。

雅章の門本、多重世の弟子に、山名義豊元祿七年二三五四歿七二法名玉山あり。戸田茂睡の從兄、かつ先輩として、詠歌に於いては時流をぬきしかど、歌論の著なし。

山名義豊

稻葉正倚

雅章及び通茂に歌の添削を乞ひしことある稻葉正倚正徳四年二三七四歿六八に、席話鈔三卷寶永五年成の著あり。自ら記す所によれば、彼もと詩文に心を潜めしが、後轉じて和歌にうつり、獨學自ら成し、なりといふ。その説は、舊派一様の考ながら、よく諸書を涉獵して、雜駁なりといへども廣し。中に、歌學の必要を説き、耳底記に、歌合の判辭は、古人の批判をまのあたり聽くが如きものなれば、尊重すべし、といへるを繼承して、歌合を重んぜし條、又、

歌學をつとめずしてたゞ公家の門弟たらしむ事を願ふは誤なり、といへるなど、やゝ注意すべしとす。

日野弘資

通茂、雅章と同じく、後水尾院の門なる日野弘資貞享四年二三四七は、詠歌金玉論中に、其説見え、又、毛利氏綱の間に答へし詞林問答一卷、田村宗永の間に答へし一書あれど、紹介するに足るものなし。

後四院

靈元院

同じく、後西院貞享二年二三四九は、後水尾院の皇子にして、東福門院徳川秀の爲に集外歌仙を選ばる。仙外歌院は歌道を皇弟靈元院に傳ふ。靈元院享保十七年二二九は、作例初學考二卷享保十の著あり。翁草に、法皇御所靈帝は、敷島の道にたけ給ふ事、代々の帝にたぐふべくもあらず。上にかゝる君ませば、おのづから時を得て、此御代には名にしおふ武者小路實陰卿、中院通躬卿、西三條公禰卿、鳥丸光榮卿、冷泉爲久卿、其餘の歌匠數多おはして、和歌の風體古へに恥ぢず、偏にもろこし盛唐の代に似たり。といへり。

職仁親王

靈元院の皇子に、有栖川一品宮職仁親王明和六年二四二九あり。親王の説に、

「情は性の動なり。寂然不動是性也、感而通是情也、といへり。又、先賢歌を習ふは、こゝろを習ふといひて侍るにや。その心性を正しくして、情の感ずる所をよみ出だし侍らば、自然によき事出来たるなるべし。かやうに申し侍らば、初學の心にて、古人の歌にも其情たがはじ、夏あつく冬さむしといひて侍らんは、赤子の情も同じ事にて、二つあるまじ、いかゞせむと思ひまどふべし。その暑さ寒さをとかくいひ侍るうへには、様々の意味の侍るなり。たとへば、人の面體同じ事なるは無きが如し。よくよく工夫して、先賢の教を仰ぎ、ひたすら心をすなほにして、詞をやはらかに、よくきこゆるやうにと詠むべし。秀歌はもとより、すなほなる中に面白き事にて侍るなり。」とあり。古今同情にして、然も同じからざる由を説けるは、後に出づべき近世歌學の小澤芦庵によりて、更に明瞭に精説せられし所の思想なり。

谷川士清

かの日本紀通證、和訓栞等の著者なる谷川士清安永五年二四三六は、古學

正親町公明

に於いては、本居宣長の先輩たる人なるが、和歌に於いては、舊派にして、家集惠露草のはじめに、寶曆二年職仁親王の門に入れる由を云ふ。

職仁親王の傳統典仁親王寛政六年二四に學びし正親町公明文化十三年

○七に、その有職に關する類纂の書、藤陰拾葉卷九十あり。中に和歌部二卷あり。

上卷は會式の典故を輯録し、下卷は古今傳授の傳統等に就いて云ふ。歌史の資料たるべき書なり。

第二に、三條西實條の系統に及ばむ。

二條西實條の系統
三條西實條

實條の長子公勝寛永三年二二の子實教元祿十四年二二に、その門弟が師説を云ふ。和歌聞書二卷あり。作歌法を説きて懇切なり。

實條の二男に、武者小路公種元祿五年二二あり。其後を嗣ぎし實陰は

靈元院の勅點をうけ、當時堂上に於いて、最も重んぜられし歌人にて、翁草

に、中にも實陰卿は、和歌の徳によりて、家にもあらぬ儀同三司の推任を蒙

り給ふ。君靈元の仰にも、實陰は、逍遙院このかたの歌よみなりと贊させ給

武者小路
實陰
初學考鑑

ひ、彼卿は又、君を其世の聖と崇とみ給ふ。といへり。
武者小路實陰元文三年二二は、超嶽院と號す。彼に、
初學考鑑 一卷

の著あり。卷末に、童蒙のたよりと、諸抄物に載せざる事どもを、思ひよ
りしまゝ、書きとめ侍るものなり。と云ふ。卷頭に、二條家當流の見地
よりして、萬葉古今以來の歌風を、簡明によく消化して論じたり。此點の
みにても、彼が當時の堂上歌人の中にて、學識の勝れたるものありしは明
らかなり。殊に、其説の中には、

「稽古に入らざる事ながら、片腹痛きまゝ、序に書き記し侍るぞかし。よみ
歌を人に見するに、私に評して、此歌は地下風、或は冷泉流、此歌は當流など
とて批判する輩あり。これは何事ぞや。歌は天地自然の道にして、秀歌は其
人の得る所なり。冷泉家は、正しく定家卿よりの血脈にて、今に此道を存せ
り。當流も、傳のみながら、正しく傳はりても、と一流にて侍るを、爲兼卿の頃
その枝葉わかち、て、此道に偏執起りしより、流々に黨をたつるやうに

なりもて行きし故に、其流かたの如きの僻言いひ侍るものなり。當流、冷泉家並に地下などにもせよ、よき歌はよきなり。あしき歌はあしきなり。歌にて評のありたき事どもなり。」

の如き、進歩せる意見あり。また、

「歌人の常の心得、春秋の感は勿論、朝夕の鐘の音までも、曉と夜とかはるものなり。まして四季の移りかはる事、心をつくれば、面白き事ぞかし。その味をよくく合點して、歌をよまば、感情深き歌も出で來べし。」

といへるが如きは、遠人の言、さすがに歌道の心得を説きて當れりといふべし。

「古へは、代々集並に打開とてあり。おのく申立も有りながら、今の世の如く、類題とて手まはしよき書は無し。其うへ、諸抄物は、版に彫りて見やすく、昔は版なければ、一抄く書き寫して見侍りし。併し、書き寫して見侍りしは、執心ふかき故なるべし。今は書店に尋ぬれば、版にて、いかにも大事の書ある事なり。人々それを版に有るものとして不見して、近代の人のいひし

似雲

詞林拾葉

源趣味

詞などを秘藏する事、以ての外、の事なり。此心をよくく工夫して學び侍らば、諸抄物、諸家集、何に缺く事なければ、見習沈吟して、稽古せば、などか先達堪能にも到らざらむ。先達堪能とて別に有るにあらず。數奇と稽古とに、よるべし。稽古は古へよりも仕やすき時節なり。」といひ、又、「古人先達の書き置かせ給へる書ども、繰返し、とりかへ熟覽すべし。今世の人、古書版本ものなどは、心もとめず見すて、今世の事を執し用ゐる心よりして、古人の深き旨をさとする事なし。委しく尋ね、廣く見侍るを、此道の習練と申すべし。」

といへるも、時流の言に、卓出せるを見るべきなり。

なほ、實際の門弟にして、自ら西行に私淑し、世又呼んで今西行となし、風流の似雲寶曆三年二四一三寂八六が、實際の教を受けて、正徳三年八月より享保六年三月にいたる聞書を、後年、石山寺にて記し、

詞林拾葉 一卷 元文四年成

あり。なほそを抜抄して、享和元年に刊行せる磯の浪、二卷あり。

その所説中、特色とすべきは、源趣味を説けるにあり。卷頭まづ説いて

曰く、「随分眞實に、歌心がけ詠むべし。眞實に心がけ修行致し候へば禪宗に頓悟有之やうに、一時にあかりへ出たる様に心ひらくることあるべし」と。これを始めに、歌の妙味を説きて、「あまりいろく」と味ひをつけたるはあしきなり。無味の味ひを知るべし。」無味かろき所に、えもいはれぬ面白き味ひあり。」といひ、淡泊にして餘情あるを貴とび、探幽などの畫は、事少なにして餘情かぎりなし。歌も又かくの如く、歌新らしく詠むとて、一首ごとく、詞を飾り巧にして仕立てたるを、新らしと世人思へども、それは却つて古くなるなり。二條家の流は、一首は何の珍らしき事もなく、ただわづか一字二字にて新らしくよみなすなり。」といひ、或は、其方の歌なども、力味ありて、それ故に歌心よからず。随分力味入らざる様に、只何ともなく詠まるべし。……俊惠も、歌は只幼なかれといはれたり。その幼なきといふは、三歳の緑子も詠み、そなる様に、何ともなく見ゆる歌を詠むべしといへる、或は、歌の詠み心は、天地同體に心をおしひらき、何事もうけ入れて、障らず、ゆたかに、平らかに持つべし。天地の間、何にても詠むものなれば、かたよりて

物數奇私意が有りて、いならぬものなどいへる、いづれも尋常一般の説と趣を異にして、おもしろし。又「毎度いふ事なれども、歌は、只、實情を、さきとし、常に、實景を、心にかくべし」とある、實情實景の語を常に云へるを見るべし。

但し、「抑も西行頼阿は手がらなる人なり。金葉詞花の風を西行詠み直し、玉葉風雅の風を頼阿よみ直されたり。」頼阿の歌を常に感得すべし」など言ひて、頼阿を推重したるは、二條家一流の考なり。

「東照權現十七ヶ條に、和歌は綺語たりといへども、これを捨つべからず、とあり。是より外に、和歌を綺語と書きしこと一つあり。それより外に無し。佛道を説きし經も、禪宗より綺語といへることあり。さにはあらず。和歌の本意は誠意のみ。大學に、誠意の終は治國平天下にあらずや。意を誠にするに、和歌に過ぎたるは無し。とくと考ふれば、儒釋神道も、歌道に、こもれり。然れども歌よむ人も、慰み藝の様に思へり。氣の毒なる事なり。」

とあり。また、

「能見所見の事」として、「能見とは、山賤のことを詠むに、此方より能く見候たる所を詠むなり。所見とは、その山賤に直になりたる心にて見らるるなり。」の一節あり。自他主客の別を説けるものといふべし。（實際が、元祿六年靈元院の勅點を請ひし詠草によるに、この能見所見の説は、後水尾院の説にして、なほ院は、一首中に兩者のまざるは悪しと仰ありしなり、と記せり。）

以上の所説を以ても、實際が實に當時の二條派歌人中にありて、達識の人にして、その思想のうちには、後章論すべき近世歌學の傾向また現はれたるを見るべし。

似雲述懷百首

なほ似雲には、寄歌述懷百首一卷あり。歌に對する彼の考を述べたるもの。その思想は、歌を以て人心の自然なる發表にして、技巧に囚はるべからざることを主張するにあり。其おもなるもの、二三を引用すれば、
 咲句ふ言葉の花もあだなれや心をたねの誠ならずば

一ふしと思ふ心の中々に色香もきゆるひとの言の葉

言の葉のたゞ幼くておのづから深き色香をいかでするまし

等あり。當時漸う鬱勃として起り來りし歌壇の自然主義の聲を傳へたるものにして、これ後に論すべき小澤芦庵が歌論の主張を述べたる歌の端をなし、ことは、松尾崇順がその刊せし似雲述懷百首の序に文化七年いへる如く、注意すべきこととす。

栢植知清

實際の門に栢植知清延享元年二あり。濱ゆふ一卷享保七かたいと一卷を編せり。前者は二十一代集中に同じ歌を二度載せたるを列記し、後者は二十一代集中類想の歌を、上句等しき歌、上句似通へる歌、下句等しき歌、下句似通へる歌の四つに分ちて、列記せり。當時實際の内奏によりて靈元院の叡覽に供せりと云ふ。上述の古今類句、及び野田忠肅のものせし類礎と共に、學者の便を爲す書なり。

武者小路實岳

實際の孫に、實岳寶曆十年二四あり。實岳の門に澄月あり。

澄月

日本歌學史

二二六

澄月寛政十年二四
五八寂八二は、似雲が實陰の教を受けし正徳のころ、備中玉島に生れ、上洛して、叡山に上りしが、その衰敗に慨嘆し、志を變じ、つひに實岳の門に入りて歌道を究め、洛東岡崎に隠れて、芦菴、蔦慈延等と相並んで、當時の四天王の一人と呼ばれぬ。世を去る前、弟子桃澤夢宅文化七年二四
七〇寂七三を呼びて、わが家、垂雲軒の跡を續がしめたり。彼の門には、夢宅の外、木下幸文の如き歌人あり。夢宅幸文共、後に
景樹の門に入れり。

澄月に、

和歌爲隣抄

和歌爲隣抄

二卷

寛政五年成
同九年刊

の著あり。この書によるに、彼は、

「抑も本朝には、神儒佛の學あり。此三道の大旨を得て、あらゆる事實道理の詠せざることなきを歌道とす。和歌すなはち三學を出でざれば、詠歌の外に學問を立てず、詠作文學打混じて勤むべきなり。」といへる一種の見解よりして、

「和歌は神州第一の大道なれども、唯その人なきを歎とす。國風を思はむ

歌道

人は、他の學術をも捨て、もはら詠道を樂しむべし。」

といへり。その和歌に關する説に至りては、

「學才あらば歌よからむとは、努々思ふべからず。詠作をとめて學問せんは更なり、作歌の暇を闕きて歌書見る事も、必ずすべからず。」やまと人のやまと歌生れ出でたる腹にあり。えさらぬ衣魚の巢を尋ねて、光陰を捨つべからず。」といひて、煩鎖なる歌學を、斥けたれど、猶また全くそを打破するにいたらず。

「但し、纔に古書の短篇なるを見るは、何ほどの時日をか費さむ。京極黃門の如き、詠格の微細なるは無し。五百餘年、詠道の軌範として、王侯より下の方、この格式を出でず。彼抄の旨をもて、師授四十餘年、老愚が思ひ得たる本意を記し侍らむ。」

といへり。かくの如くにして、彼が記せるところの意見は、二條家常流を出でざる、固よりその所なり。草菴集の和歌を、花實兼備の理想とし、拔抄して、評して曰く、「抑も草菴一部は、和歌中道の龜鏡なり。中道とは、過不及な

草菴集を重んず

歌風の變遷

きの謂なり。……三學を一致に學ぶ歌道、猶以て中道を要す。」と。
而して又、遠く紀記以來の歌風の變遷を、詩のそれに對して説き、奈良の古風は平安に一變したりと述べ、「温古知新といふこと、和歌の肝要なり。」といひ、

「時勢の變化に玄たがひて、歌の詞も、よしと思ふがあしきになり、あしきがよく聞ゆるも、續けがらなり。」

萬葉の耳どほき語調は、決して優美なるべき和歌の理想に協へらずとし、萬葉家を難じたり。その餘勢は、ひいて契沖の攻撃となり、或はその餘材抄を季吟の拾穂抄に比しておとしめ、「此道の魔障、餘材に過ぎたるは無し」といひ、更に契沖が和字正濫鈔を論じ、定家假字遣の正しくして墨守すべきを説きて、契沖の説を排斥し、「萬葉の古假字は永く捨つべし」とまで極言せり。

彼の説中には、實際と同じく、已に時代の氣運に觸れて、漸う新意も見えられど、その師承を墨守せしことに於いて、舊派の系統を脱せず。玄かも

契沖を攻撃す

傳授

その傳授といふことを論じて、
「德行忠直とは、只忠實のこゝろなり。技藝の類といへども、此心もて貫くものは、國家の至寶となる。此心なき藝術は、市廊の賣物に異ならず。然るに、歌道の忠實をいはば、詠作のみ生涯の望として、脇目せざる心なるべし。歌人の中にも、歌學なく、相傳なくては、所詮ゆかぬ道なりと思ふあり。又和歌傳授などいふ事は、凡て牽強附會の説なりとて、王侯の秘し給へるを、輕蔑し、制詞禁忌を厭はず、一風骨を詠じて、己が異風に人を引き入れむとするもあるべし。二つながら、僻見なり。道に忠實の心ありて、執心深く、歌數つものものは、歌學なけれどもよき歌を詠み、相傳なけれども、自然と正統中庸にかなふなり。又相傳を破り、一見をもて推謀るは、螢火の海波を照らさむとするに似て、己が小智に迷へるなり。」
と折衷の見をなしぬ。

三鳥丸光廣の系統

次に、吾人は轉じて、第三の鳥丸光廣の系統に及ばむとす。

鳥丸資慶
資慶卿口授

光廣の孫資慶寛文九年二二三は、秀葉和歌集二卷の著者なり。彼に、
資慶卿口授 一卷 寛文六年

あり。中に曰く、

「歌はもとより、心のなす所なれば、安らかに聞ゆると、聞えぬ所の境を常に考へて、聞ゆるやうによみなし候が、第一の心得にて候。」

「歌はわづかに三十一字のうちに、ことわりをたつるものなれば、無用の字を一つも置かぬが、作者の粉骨なり。昔の人の詠めるに、無用の詞のやうなるもあれども、その無用の如きの詞にて、又用の事にきこえてよきなり。」

「歌に相應といふものあり。たとへば、烟草の烟に富士の烟を引きかくるやうなること、理りたちながら、軽く小さきものと、餘り莫大なるものと相應し難し。此心得にて、一首の取合のよろしきやうに寄すべし。」

また、詠歌金玉論中に見えたるものに、

「當時其許歌一の病候。一同に古今の秀逸などの風情詞を飾り詠みたるを大方とりて、詠める歌ども多く候。唯まづ心のよく聞ゆるを詮にして稽

古候へば、委細の面白き事は、自然の所作に候。聞えぬは一首の詠にあらず。」

などあり。

なほかの聞書の始めに、問者に對して、

「歌の道、尤も卑下すべけれども、武士の弓馬の家に生れ、公家の歌の家に生れし、一様のわけなれば、卑下せぬなり。思ふ事あらば問ふべし。」

の文字あり。歌學説にはあらざれど、武士の弓馬の道に擬らへし一句は、以て當時の歌道てふものに對する觀念を、代表的に言ひ表はせりといふべし。

又彼に、今泉某に與へて、和歌の徳を説ける書一卷あり。

資慶の子光雄元禄三年二三四には、

光雄卿口授 一卷 天和三年

あり。其中に、

「歌はもと心を清淨にして、無一物にて詠むべし。我々も題にて歌よむに、ひとへに歌書など色々見て、後に、何もかも取すてて居所をも清くして、念

鳥丸光雄
光雄卿口授

頭を涼しくなして、時雨の題なれば時雨にぬれ、霞の題なれば霞にまじりてよむなり。」

また、詠歌金玉論中に、「歌は第一、心の無事に基づくべし。心の妄相へだたれば歌宜しからず。其時無理に詠めば、眞の所へいたらず。是非ともに行かむとすれば、いばらからたちにかゝりて、身を損なふが如し。勞して功なきものなり。後水尾院仙洞の勅諭にも、禪法を知らずば、歌は詠まれまじきと、仰ありけるとぞ。是心のへだてものをのぞかむ爲なり。」

などあり。彼も亦和歌に對して、禪學的立場ともいふべき一種の見解を有し居たるは、これにて明らかなり。

光雄の孫鳥丸光榮寛延元年二四は、歌學に、作歌に、當時の堂上中、最も傑出せりし人といひ得べし。彼は靈元帝よりは、「いみじき歌よみなり」成章打聞と稱せられ、鳥丸内府は、近き世に稀なりし堪能におはしければ、俗には今人麿と稱せしほどの事なり風のまななど言はれたり。彼の説は、享保元文年間に成りし

禪趣味

鳥丸光榮

聽玉集

聽玉集 一卷 一名晴露玉話 門人加藤信成筆記

をはじめ、詠歌金玉論所出のもの及び、

内裏進上之一卷

に就いて見るべし。まづ、前二著につきて、その大體を伺ふべし。

その、

「歌に花實相應といふを、等分と心得るは、甚違なり。花三分實七分なるを相應といふなり。」

「新勅撰を、專要として、平生熟讀すべし。」

といへるなど、一般の思想を脱せざれど、さすがに當時物興せし新學問の影響を受けてか、

「古歌を見るに、抄を見、又は人に尋ねなどしては、早く心得らるれども、夫にていつまでも我が物にならず、時々、工夫して自得するがよきなり。」

「和歌の心得は、とかく心染古風と云ふが肝心なり。是は三代集、或は新勅撰を、平常誦讀玩味すべし。されど必ず其體をうつし詠まむとするは悪し。

自得

平生の口上
が歌なり

歌を詠むには、何もかも皆離れて、たゞ無心にして詠むなり。
「元來平生口上にあらはしていふことを、跡からみれば皆歌の筈なり。歌
というて別にこしらへする事にあらず。」

病 誠

「歌は心に誠さへあれば、其心の誠が外へ現はれて、歌は出来るなり。」
「歌の病の事、古くは式などにあれど、當世さりあふ病といふ事なし。平頭
苦しからず。よろしからぬ歌は皆病なり。」

など言ひて、師傳を重んじつゝも、其うちに自己を無視せざる思想を抱
きたり。こは次の言に殊に明らかに見ゆ。

「とかく、三代集新勅撰を、座右離たず玩ぶべきなり。さて自己心上より、詠
み出だし、師傳を受けて是を正す、車の兩輪、鳥の兩翼の如くにて、かた〜
はなせばいかぬ事なり。これ極意なり。みだりに他門の徒に語るべからず。」

古今の二字

「これ極意なり」以下、なほその師傳に囚はれたるを見るべし。又、
「歌に限らず、凡ての事、古今の二字に洩るゝ事なし。古へばかりを思ひて
は行なはれず。今ばかりを言ひては、古への規矩を廢す。古今を斟酌せねば、

定家隆又
一人なり

何事も行なはれぬなり。」

「孫思邈云ふ、膽欲大、心欲小、その事異なれども、金言あまねく通じて、感せ
ずば有るべからず。敷島の道猶かくの如し。定家隆又一人なり。何ぞ及ば
ざらむと、志を高くはげむべきなり。舜何人ぞや、といへる如し。又心を小に
して、詠み出だす歌の、つゆばかりも過なきやうにと、一首も大切に思ふべ
きなり。」

和歌と論語

「論語を會得するが、歌は第一よきなり。聖人の教にたがふ事なければな
り。爰を以て、歌は教誡の端ともいふなるべし。」

崇敬

と。又、彼は、

「和歌は、好むばかりにては上達せぬなり。崇敬するが第一なり。神代より
今に至りて存するものは、和歌なり。そこを思ひて、崇敬すべし。」

和歌と精神
修養

といひ、更に進んで、和歌に於ける精神上の修養を説き及びて、
「我が心を、常にねんごろに持てば、おのづから作意もねんごろなり。され
ばとて、主命、父命、朋友の約等、凡ての事に、大小輕重あり。四季の時運、山海の

景氣等、又一様ならず。歌も同じ。時に随ひ事によること、正しき道の肝心なり。唯一轍に心得るは、愚かなる事なり。又、心詞相具してと、のふ事は、已達の上にも心を勞する事なり。心ばかりを沙汰したる分にては、歌あがる事なし。歌をよくと、のふやうにと、幾度も詠まざれば、あがる道なし。尤も參禪工夫開悟の人は、心明らかなる故に、歌の道もおのづから明らかなり。さればとて、歌の習練あらざれば、秀歌を詠む事あたはず。開悟の人歌宜しくば、禪僧にのみ上手あるべし。事理ともに宜しからざれば、何の道も上手には至りがたきなり。歌は、神代の道なれば、神道を崇敬せずしては、不叶なり。是歌の根本なり。孔孟の教、又、歌道習練の上、一々に叶ふなり。随分孔孟の道を心にかくべし。心を明らかにして、疑惑をやぶるは、佛心家の開悟に過ぎたるは無し。疑惑なくして明らかなる時は、明らかなるといふ事も無し。誠の禪に禪は無きなり。されども自己の工夫をつみてさとらざれば、書併の飢をやめざるが如し。歌も禪も精を出だして、勵むべし。此方にてかの道を爲さむと、早道に心かくるは、大なるまどひなり。」

内裏進上
之一卷

前に掲げし第三の、内裏進上之一卷一名不味眞院殿奥秘之書は、元文二年十二月、叙覽にそなへしもの。特に未練の人の爲めに、修行の見地よりして、彼が歌論の大要を説けるなるが、叙述簡明、以てその頭腦の、當時の堂上家中卓出せるものあるを示せり。その一節に、

「凡、よみ方の教たゞ一なり。一は心の眞實なり。思ふところのまことをいひのぶるより外のこと無し。意をいひのぶるは實意、景をいひのぶるは實景にして、毫末も實にそむけば歌と、のはず。古來の秀歌たゞこの實のみなり。」

「古歌を心にそめて、何とぞまことなる心を、よく聞ゆるやうに、優なるにとむかへば、自然にまことの歌出で來るなり。これ、和歌無師匠といへる所の妙なり。」

とあり。以て、その筆致を察すべし。

光榮には、外に和歌教訓十五箇條あり。二條家歌學を掟書にせるものなり。(これに就いて、その意を布衍して説ける、幻交庵寂翁の著一卷あり。附す

るに、和歌大意一篇を以てせり。

日野資枝

歌合目錄

光榮の末子にて、日野家を嗣ぎし、日野資枝享和元年二四が、天明二年に序言を記せる歌合目錄四卷あり。こはもと、和歌に堪能なりし櫻町上皇一〇崩三一が、光榮の子なる烏丸光胤安永九年二四に命じ給ひしを、上皇晏駕の後、光胤の請託によりて、資枝の編せしなり。目錄と名づけたれど、六百番歌合、千五百番歌合を、其批判の詞によりて分類輯録せるもの、便よき書といふべし。

準二條家

以上をはじめ、その他の公卿中の諸歌人も、當時は殆ど凡て二條家の歌學をうけて、準二條家といふべきものたりしなり。左に一括して述べむ。

姉小路實

紀

風竹亭和歌讀方

姉小路實紀風竹亭白嘯に、

風竹亭和歌讀方 一卷 享保二十年成

あり。こは、和歌の要領を記して、門弟に傳へし書なり。風體之事、知題之事、その他、制之詞、小點之詞、病之事等以下、會式、書式にいたる十六項につ

句切

いて、二條家歌道の傳來の説を述べたるものに過ぎずといへど、中に注意すべきは、歌に切れ所ある事の一項とす。一句切、二句切、三句切、四句切、二所切等に就いて説けり。素より未だかゝる句切の存在をいへるのみにて、後の歌格論に於ける、歴史上の變遷を説ける如き進歩せる説なきも、此點を注意せるは、又さる歌格論の萌芽と見るべきか。又、重詞、隔詞等に就いてもいへり。

元來、姉小路家は、姉小路家手似葉傳(一名歌道秘藏錄)を傳へて、文法の研究の嚆矢を遺せり。かゝる句切の説の出で來しも、かゝる所に基づけるなるべし。

宗阿

なほ嘯翁が、難波の宗阿より傳へしといふ詞心傳授一卷元文三年の奥書ありあり。句切に就いていひ、他に詞續、義理續、義と詞と相續、縁續等の連續、曲節發語、對句、懸合等に就いて、證歌を擧げたり。

良恕法親王

又、詠歌金玉論中に、その説の斷片をとらむるものに、後陽成帝の皇弟にして、智仁親王の皇兄なる曼殊院宮良恕法親王寛永二十年二武者小路實

高松重季

清水谷實業

香川宣阿

陰の子なる高松重季○延享二年二四等あれど、特に記すべきものなし。
清水谷家、芝山家等また、當流に屬して、一家をなせり。清水谷に、實業永寶
六年二二六あり。

實業に學びし梅月堂、香川宣阿享保廿年二二は、景樹の養父たりし景柄
の曾祖父なるが、その家に傳へし書に、梅月堂和歌傳書三卷あり。その上
卷に、五義として、縁續、詞續、義理續、親疎を説く。いづれも短歌五句の連續
を説けるものにて、縁語もて續けしを縁續といひ、詞もて續けしを詞續と
いひ、意味にて續けしを義理續といふたぐひなり。其他、上記の姉小路家
の説に見えし句切の事をも記せり。

芝山重豐天明三年二四に仕へし、多田義俊寛延三年二四は、別名を桂秀
樹、秋齋、南嶺子などいへり。彼に、

桂花抄 三卷 不二庵醉月筆記

あり。和歌正風體之傳以下、二十四條にわたりて、所謂歌道の秘傳を記
せるものなり。其うち、見様の傳として、古歌を見るに五つの見様ありと

たしなま
下
多田義俊

桂花抄

見様の傳

土金傳

和歌と神道

跡部良顯

玉木正英

名賢和歌秘
説

し、序歌一般に云次第歌初句よりすらく、發歌初句よりみ出して切り、三
發歌二句にて切り、三句よ及び間句歌二三句より轉じたると分けたり。又
土金の傳を説きて、つゝかなのてにをは、土金の轉なりとして、一種の神
道説に及べり。(和歌を神道に附會して説くことは、佛教に附會すると同
じく、當時の一傾向なりき。義俊よりさきに、吉田流の神道を傳へし吉川
惟足元禄七年二三の門、山崎垂加天和二年二三に學びし跡部良顯享保十
三八九に、神道和歌之秘訣一卷寶永八同門玉木正英元文元年二三
一號光海翁に、和歌三神八雲神詠等を吉田家の神道説
に附會して説き、古今傳授の傍系ともいふべきものにて、定家も、卜部兼直
より、八雲神詠口訣をうけたりなどなせるが、義俊の土金傳、また、これらの
著とその傾向を同じうせるものなり。)

義俊に、また、名賢和歌秘説一卷あり。一に、和歌物語、桂樹歌話ともいへ
り。重豐、實陰、光榮をはじめ、堂上家の説の聞書なり。中に、

「歌はもとふしをつけて、諷ふもの故、其爲にてにをはといふもの有之て

にはたがへば諷はれざるのみにあらず、一字のてにはにて、歌の心もたがふなり。てには、大切^ニに心得てよむべし。」
といへり。

芝山持豊

重豊の子に持豊文化十二年二
四七五歿七四あり。堂上家中學才すぐれたる一人なり。本居宣長、晩年に親交ありき。彼は磯の浪、和歌爲隣抄等の序などをこせる外、歌學に關する著には、門下深田正韶の間に答へし「歌道御答書」一巻あり。所説は記すに足るものなけれど、中に「近來本居宣長が歌を論じ候書ども御座候。右は一覽仕候ても不苦候哉。」の間に答へて、「無遠慮見らるべく候。右講席へ出られ候事も不苦候」とあるは、當時已に、堂上歌學が、地下の新學問に對して、如何なる態度をとれりしかを示すに足る言といふべし。

深田正韶

なほこの問者たりし深田正韶が、七十五歳にて著し、

詠歌聲調極秘之傳 一卷 弘化四年成

あり。ほのくと明石の浦の歌に就きて、「聲音の升降開合の餘韻、」耳

のひゞき、舌の活らき、などの語を用ゐて、その聲調の美をたへ、ひいて、和歌の妙所こゝにあり、となせり。其説、和歌の聲調について、何ものか説明をなさむとするものの如くなれど、未だ明瞭を欠けり。たゞ彼が特に此點に注意せし事は、之を逸すべからず。

松永貞徳

幽齋門下の他の一人として傑出せるものを松永貞徳承應二年二三
一三歿八三とす。長頭丸道遊軒、明心居士などの號あり。彼は足利時代の終に生れ、織田豊臣を経て、家康天下を統一し、家光が代、泰平漸う續き、文華おこりし時運に遭ひたり。而してこの時運に乗じて、文學上彼がなし、所は、實に貞門風の連歌の近體を開きしにあり。まかも、和歌に於いては、師承以外一步も出でざりき。只彼が、當時の歌人中すぐれたる學殖あり、多くの門弟を有し、以て和歌を一般に普及せしめし功は、没すべからず。

貞徳が和歌に關する著の重なるものに、

歌林雜話

歌林雜話集 四卷 元祿十五年刊

あり。この書一名戴恩記といひて、彼が幼年より師事せし師、九條植通文祿三年二二、三條西實條、細川幽齋、中院通勝既出、里村紹巴慶長七年二二、等五十四歳九〇の日常起居、逸話等について記すこと委しく、吾人をして、髣髴として當時を想見せしむ。而して全編を貫く精神は、師承戴恩の一事にあり。その點において、此書は、當時の思潮を最も明瞭に吾人に語れり。一二の例を挙げむに、まづ巻頭に、

「一、和歌無師匠とあれば、師傅といふ事有るまじきと思ふ人あり。それは愚かなる事なり。是にまづ兩説あり。一には、和歌は舞諷などのやうに、古ことを口真似する事にあらず。新らしく詠み出だすによりていふといへり。一には、上古の歌仙を尋ぬるに、師匠は見えざるによりいふといへり。此兩説いづれも言ふに足らず。萬葉集を見るに、あさもよひきと續くる事をば、人庶すでに石川の某より傳へ給ひたると見えたり。……又或説に、和歌に師匠なしとは、和歌の本文なり。あもなるやおと柵機のうながせると、下照媛の詠み給ひし已前には、歌といふ事もなしと言へり。是又不審なり。左様

師承戴恩

に申さば、一切の事皆太極より出でたり。わが一道を師匠なしと言ふべき謂なし。かやうに色々に了見すれども、相傳せざれば知る事あたはず。」
 「丸が若き時までは、いかなる初心の輩までも、師説を受けずして、歌書をのぞく事は、恥ぢ思ふ心あり。今の若き衆は、人に物習ふ事を却りて恥かしく思へり。下聞に不恥とは、孔子の金言にあらずや。」

「父母者如天地、師君者如日月」とは、弘法大師の御詞なりと云へり。……かくの如くにして、彼の誇りとする所は、上記の諸名家を始め、その他諸道に於いて、多くの師匠を有せしことにあり。彼曰く、「いま魂祭に數ふれば、師の數五十餘人に及べり」と。

彼が和歌に關する説は、この戴恩記の下卷に見えたり。花實相對を説きて、花に過ぎたる歌風を斥け、新古今を抑へて古今を揚げ、定家を尊崇し、また和歌を中和教誠の道とするなど、二條家の思想以外に創見なし。殊に、

「一、世間の人、誰は上手、誰は下手などと、歌のほめそしりをする事こそ、更

に承けられぬ事なれ。皆最負く、口に任せて申す事なるべし。かやうに申すとて、歌のよしあし無きにしもあらず。其知りやう委しく師傳には侍れども、いたりもてよきと、いたりてあしきとは、知らるゝ物なれど、中分の歌を知り分くる事は、成るまじき事なり。まして師傳なき人は、聊かも知るべからず。

と言へる如き、自らその眼識なきを、表明せるもの、以て當時の學界の大勢を窺ふべし。

歌林樸楸

外に貞徳翁筆記一卷あり。慶長十年の頃、即ち若きほどの筆とおぼしく、注意すべき説なし。また歌林樸楸二十八卷あり。紀記萬葉以來の歌詞の難解なるを擧げ、古人の説を引きて註釋せり。

加藤盤齋

貞徳が歌林樸楸の學風は、その後繼者を生みて、二大註釋家を出だしぬ。その一人は、加藤盤齋延寶二年二二三とす。新古今増抄、三部抄増註をはじめ、百人一首、伊勢物語、枕草子等、諸書の註釋世に行はれしが、彼は京都に住

北村季吟

みしかば、その學問専ら京都を風靡せり。

いま一人を北村季吟寶永二年二二三とす。彼は八代集抄、萬葉拾穂抄をはじめ、湖月抄、春曙抄等の有名なる註釋をものして、國文界に功勞あり。

元祿二年、徳川綱吉に徴されて歌學方となり、子湖春元祿十年二二三孫湖元寛延二年二四相繼ぎて職を世にせり。泰平年表彼は貞徳の正系を承けしかど、その歿後、遺命によりて、飛鳥井雅章、清水谷實業に點削を受けたり。彼には、特に歌學に關する著なし。諸註釋の全然古説を集成して、其以外に出でざりし學風より見るも、創見なき事、疑なし。

望月長孝

貞徳門に出でて、専ら歌學を傳へしものを、望月長孝延寶九年二二三とす。彼、廣澤の池のほとりに住みて、又、廣澤長好と稱す。其家集を廣澤輯藻四といへり。彼は京都の民間に二條家の歌學を傳へたり。彼が歌學に關する著には、

詠歌大本秘

詠歌大本秘 五卷

あり。そは、三義之大事一卷、詠歌大概註二卷、制詞二卷、の五冊より成る。この書、幽齋より相承のものと稱す。三義之大事、やゝ注意すべし。歌の主旨を、風躰、詞、心の三義に分ち、頓阿、幽齋等の説を引ききて、二條家歌學の要旨を述べたるを始め、素より創見なしといへども、その用語の釋義、解釋に、漢籍佛典の説をひきて、やゝ精しきものあり。

平間長雅

長好の門に、平間長雅寶永七年二二三あり。風觀齋、六喻居士といふ。彼が師より傳へしといへる、和歌血脉道統譜一卷あり。卷頭に神代よりの系譜を載せし如きは、荒唐笑ふべきものなれど、中世以後の系譜は、參考に資すべし。

有賀長伯

長雅の門に、有賀長伯元文二年二二三あり。彼は以敬齋と號し、一家をなして、和歌の普及につとめたり。彼には、歌に關する著數種あれど、いづれも通俗的のものに過ぎず。中に、

和歌八重垣

和歌八重垣 七卷 元祿十三年刊

は、作歌の用意より、文法、語釋にわたりて、從來の説をあつめたり。創見

加藤景範

なけれど、集成の功勞は認めざるべからず。

長伯の流を汲めるものに、加藤景範寛政八年二二四あり。竹里と號す。

和歌に關する雜著數種あり。中に、國雅管窺一卷享和二年は、古今の序を祖述して、初學の便とせり。

赤井一貞

また平間長雅に親交ありて、その奥旨口訣を承けし赤井短山の孫に赤井一貞あり。その著管見問答二卷延享元年は、詠歌大概を祖述して、比較的明瞭なるものなるが、その終に、當時の萬葉家の歌風を難じて、萬葉集の歌の風躰に、今の歌をも詠むべしといふものは、たとへば、千年も已前の衣裳を着て、其時の風儀になるべしといふものなり。當時の政道に背くといふものなり。今の衣服を着て、今の風儀にて、仁義忠孝の志厚くば、何の害なからむや。』といへり。

冷泉家

以上を以て、幽齋門下の二條家の系統、及びそれに準すべきものを叙し畢りぬ。次に、これらの外に、その説に於いては實際等しく二條家に屬す

れども、別に一家を爲せる冷泉家あり。

冷泉家は、爲相爲秀以來連綿と血脈を傳へ來れるが、かつて了俊正徹等がこの派より出でて一派をなし、以後また一人の學者いづるなく、勢力到底二條家に及ばず。わづかに下冷泉政爲の家集碧玉集もてはやされ、後柏原院の柏玉集、逍遙院實隆の雪玉集と共に、三玉集と並べ稱せられしあるのみ。歌學に於いては、或は二條家にては歌とかくに對して、詞とかくとか、詠草の折方を違ふるとか、彼は古今の貞應本を傳へ、これは嘉祿本を相傳すとかやうの、枝葉の末に差をたて、その存在を保ち來しが、元文の頃、上冷泉家に爲久、その子爲村いでて、やゝ光を放てり。

爲久、元文六年二四の言は、詠歌金玉論に残れるが、その説中、當時の歌の向上心なきを慨して、

「歌は詠み易きものと、皆心得られ候て、土臺のこしらへ無く、詠みかゝられ候故、いつ迄も假屋に住居候やうなる歌どもにて候。小屋にても、身を入られ候へば、雨露にもおかされぬは、玉殿にも同じ事よと思ふ故にて候。假屋

冷泉政爲

冷泉爲久

等類多し

を破却して、とくと造作を構へ候志は無之やうに見え候。」

といひ、又、等類歌類の多きにつきて曰く、

「等類の事、新造の趣向を案出されず、題に向ひて、まづ心をさしおき、類題其外古歌部類を見て、其中にて心も詞も拾ひ出だして、三十一字をこしらへて出ださるゝに、其こしらへやう不調法なる所を、相談の先達、あそここを引直されざまに、又初めの古意になるなり。貴賤の人情、世上の盛衰、天地草木禽獸の上まで、常に風情を思ひ置かでは、俄に何として新意をたくみ出だすべき。常にうか／＼として、題に向うて、是は何としたるものぞと初めて驚きせん方なさに、古歌にて取出だしたるものなり。俄に襲ひ來る敵を見て、弦なき弓に根のうせたる矢をつがふ擬勢なるべし。近來の歌、とくと吟味せば、此等類の咎なきは有るまじく候。凡千餘年以來の歌の道にて候へば、其中に同じ歌いくらも有るべし。殊に當時の歌、皆古人の歌を悪しく盗みたるものなり。かやうの事は、殊の外の謗言なれども、僞ならぬ事なり。せめて詠み出だす事は未練なりとも、道を執する心あらまほしく候

へども、歌は假字三十一字、何時にても成るものと皆々思はるゝ、そうに見え侍るなり。」

仁木充長

などいへる、さすがに氣慨の盛なるものあり。

爲久の門弟仁木充長が、享保六七年の交上洛して、屢々冷泉家を訪ひし折の聞書に、在京隨筆一卷あり。歌論として引き出づべきものなけれど、歌史の資料とすべきものあり。

冷泉爲村

爲久の子爲村

安永三年二四三四 薨六三法名澄覺

は、當時歌界の先達凋落せし時代に出

でて、歌壇の首權を占めたりき。

爲村に、

樵夫問答

樵夫問答 一卷

の著あり。樵夫と老翁との問答によそへて、歌を説けるものなるが、其終に、

「心は道にして、道は心なり。心のもと、誠にして、誠の本は心なり。萬の道誠を洩れたるは無し。中にも此道は、神代のすぐなるをつぎて、誠ある代々

の教かしこし。今いふは愚かなり。戀の道もまた、此道の外ならず。……題に向ひて歌よむもかくぞ有るべき。其ものを深く思ふまこといたらずば、いかで其風情を求めむ。たゞ常に思ふべきは誠なり。……これ(戀)も、思ひわくれば道なり。道はたゞ正しきに心をすゝめ、遠きをうますして、近きを忘れず、深きをかしくみて、淺きを知り、心長く學ぶべし。心の教は道にして、道を教ふるは心と知るべし。」

と記して、道誠戀歌の關係を説けるは、一種の考として見るべきものなるが、彼が一般の歌學説に至りては、彼の門弟宮部義正の記せる

義正問書

義正問書 一卷 一名宗匠家訓教訓

によりて見るに、二條家一流の平凡の説の羅列にとゞまりて、何ら創見なし。たゞその理想の歌風たる正風體につきて説明して、

正風體

「己が心より觀念し出だして、實意實景より風情を得て、言葉つゞき優美に、心新らしくたけもある歌の直に聞ゆるを、正風と申すにて候。」

といひ、又歌をよむ心は如何すべきかとの間に答へて、

「心正しくて詠み出づる歌は、正風に候。事に物に、歌に心をよせぬれば、自然に歌三昧になりて、餘念なく候。心たゞしければ身の禍も無く候。歌よむ時ばかり正しくする事にては無く候。」

さすがに宗匠の言、至言と言ふべく、或はかの小澤蘆庵が説の先縦たらずやと思はる。なほ此書は、歌史の資料とすべき點少なからず。

爲村には門弟多く、自ら「子が代になりて、いづれの國にも弟子なき所は候はぬ程に大勢になり候。」といへるほどなりき。上記の、近世歌學の先達蘆庵の如きも、一度其門に入れりきと云ふ。かの塙保己一の師にして一葉抄の著者なる萩原宗固天明四年二四も、初め光榮實岳に學び、後爲村の教を受けたり。

爲村の門下にて、和歌に關する著書多きは、中原廣通大澤隨筆なり。中にも、大澤隨筆八卷は、凡て和歌に關するものにして、以て彼の博學と精力とを知るに足れり。殊に、茂睡、契沖、眞淵等、當時の古學派に反對して記せるうちに、未だ世に傳はらざる逸事もありて、和歌史の好資料たり。歌論として

萩原宗固
大澤隨筆

萩原宗固

中原廣通
大澤隨筆

坂昌周
連歌辨義

慈延
鄰女晤言

は、一般舊派の説を出でずといへども、その古今以來撰集の變遷を説ける一節は、簡明要を得たり。又詩家の錯綜倒裝の法の、和歌の句法にも存在する由いへる津金胤臣の説も、味はふべし。(廣通の友にて、大澤隨筆に屢々其説を載せたる坂昌周に連歌辨義一卷、明和六年成あり。連歌の起原より歴史に就いて、古書を参照し、問答二十三則にわたりて記せり。かの建部綾足の片歌に就いての著と共に、この方面に關する著としては、注意すべきものなり。)

同じく爲村に學びて、上記の澄月とともに、平安四天王の一人に數へられ、その和歌爲隣抄出既の序を書きし僧慈延また、その隨筆鄰女晤言中に、澄月と同じく契沖の歌學に就いて難せり。そは、即ち「河社を評す」の一節に於いて、契沖が河社の所説を攻撃せるものなるが、その末に、

「すべて歌よまむ人は、おのが心をすなほに、まことにやはらかにたもち、いつくしみありて、人の短かきを好みいふべからず。まいて古への先達の上をや。子は父の爲に隠すこそ、直しともいふべけれ。契沖は、羊をぬすめるもの、子の心もちゐにしあれば……契沖といふもの、出でて、世の歌よみ

の風いやしくあしざまになりしが、嘆かほしさにいふなり。」

といへり。彼の説また、當時の舊派歌人が、新學風に對する意見を代表せるものといふべし。玄かも彼は、なほ、

「玄かはあれども、契沖よりこのかた、世に歌學の開けたるは、殊に賞すべきことなりかし。」と爲せり。

同じく爲村の門なる阿闍梨法印惠日寂明に、歌道根源問答二卷天明二年成の著あり。徹頭徹尾、眞言の教理に附會して、歌の語源、歌道の意義を解きたるものなり。歌の語源を解ける一節に、

「歌のうゝ、うむの義なり。むの字を下畧して、うとし、たの玉の義、靈の義なり。まの字を下畧してたとし、二字よせてうたといひたるものなり。うゝ喉音にして、土なり。土は地大にして、萬物をうむなり。たの舌音にして、火なり。此たの字の火、うの字の地大を火生土と相生じて、萬物發生する同理なり。火は即ち心大にして、意識はよく思慮して、無量の詞花言葉を生むなり。」とあり。以て一般を察すべし。その他、二神の意裁の歌を、「阿字本不生」

寂明
歌道根源問
答

佛理附會説

の理に索強して説けるをはじめ、全然佛理に附會せるものにして、歌論としては何らの價值なけれども、當時の佛理附會説の面目は、最も極端に代表せられたり。

最後にこの章を終るにのぞみて一言すべきは、貝原益軒 正徳四年二三月四歿八五なり。彼は篤行家として、また諸種の有益なる教育的著書の著者として、當時の文教史にその名を傳ふる人なるが、彼が、

文訓 一卷 享保元年刊

の中に、和歌に對する見解見えたり。その要領は、彼が學問の根本なる修養論より論せしものにて、要するに、「歌は心ふを養ふ道なり」との考よりして、和歌を見しものに外ならず。而して彼に注意すべきは、彼が儒者たるにもかへはらず、漢詩を斥けて、和歌を尙び、和歌は我が國本來の道なれば、詩を學ばむよりは、寧ろ歌を學ぶべし。これわが國人の性情にかなひて、其功多かるべしと云たり。玄かも、素より歌は、彼に於いては、修養の方便に

歌は心ふを養
ふ道

貝原益軒

文訓

過ぎざれば、決してこれ獨立の道にあらず。必ずしも學ぶべき要なし。なまじひに學ばむよりは、古人の名歌を誦して、性情の雅を養ふに如かず。と。彼が和歌に對して、消極的の考を持したるは、もとよりその所なり。而して更に進んで、和歌そのものに對して彼が抱けりし考は如何といふに、全然舊派的の考なり。堂上歌學至上主義なり。(彼の和歌記聞抄の著また之を示せり。)元祿新興文運の氣運は、未だ、温厚篤學、むしろ保守的思想の傾向に屬せし彼に及ばざりしなり。その言に曰く、

「和歌を詠むに、歌學なく、久しく心を用ゐず、又官家の傳を得ずして、みだりに詠めば、詞のつゞきも古への言葉にあらず、てにをばも法に違ひ、一首の心聞えざれば、和歌とは言ひがたし。」と。

以上、吾人は、幽齋門下の歌學の系統、及びその傍系等について述べ、終に、近世歌學時代にふみ入りたり。(幽齋を去る三代の門下の時代は、已に近世歌學のおこりし時代なり。)その間、各派各家、その所説に於いて、多少の差なしとせざれども、たゞ其いづれも、二條家傳統の歌學說の中に局踏して、師承の枷に囚はれ居し點にいたりては一なり。勿論、その中に、或は近世歌學勃興後の説にして、幾分その影響をうけ、新意の動けるものありて、自ら近世新學問と相交渉せるもの、又或は、近世歌學に先立てるものにして、自らその萌芽となりしが如き説を含めるもの無きにはあらざれど、未だ一人の敢てその傳承の枷を取らむとせし者なし。これその近世歌學と異なるところにして、近世歌學が發生の意義は、實にこゝにあるなり。以下編を改めて、近世歌學を述べむとす。

第二編 近世歌學

序論

近世歌學
自由研究

近世の歌學は、文運復興の氣運に乘じ、中世歌學の師承傳統の餘弊に反抗して興り、文運復興の精神たる自由研究を、その精神とせり。而して、自由研究といふ精神の底には、皮相的なる師承萬能主義を打破して、根本的に研究せむとの要求あり。近世の歌學亦、この要求を動機として起れるものにして、その中世歌學に對する反抗も、これに基づく。その中世歌學の、修辭論技巧論を旨とせるに異なりて、一步根本的に踏み入りて、和歌の理論を説き、和歌の性質を明らかにせむとする傾向あるも、これその由來するところの一層自覺的にして、一層學問的なる研究的精神にあればなり。随つて、吾人が歌學に近き思想は、之を近世に求め得べきこと勿論なりとす。斯くの如くにして、近世歌學は、先その初めより、中世師承の歌學

に對する反抗に起りて、さて各個の學派、各個の學者の各自の特色ある研究の發表となれり。

近世歌學は、その年代よりいへば、わづかに元祿以降二百年、之を中世歌學に比すれば、その幾分の一にも過ぎざれども、その學說の多種多様なる、その所論の比較的精細にして生氣ある、たしかに面目一新の觀あり。歌學史研究の興味と價值との、近世に於いて始めて之を求むべきこと、また言を俟たざるなり。以下吾人は全編を十三に分ちて論述すべきが、その論述の次第はまづ近世歌學の勃興に筆をおこし、戸田茂睡を始めとして、下河邊長流、圓珠庵契沖等の古學復興者に及び、次に、當時の歌壇を騒がしめし、荷田在滿が國歌八論を論じ、その辨難批評の論を述べ、第三に近世古學の翹楚たる賀茂真淵の真情説を述べ、第四に本居宣長の物のあはれの説を叙し、第五に江戸派の加藤枝直、同千蔭村田春海の雅情説を述べ、第六に翻つて、たゞこと歌の説を主張せし小澤蘆庵の説、第七に香川景樹が調の説を述べ、第八に鈴屋桂園兩門下の學説を説き、第九にこれらの學派以外

論述の順序

に一派を樹てし富士谷父子の歌學を述べ、第十に以上に漏れたる諸學者の説の注意すべきものを記し、終りに、小國重年、内山真龍に始まり、橘守部、鹿持雅澄、六人部是香等に大成せし歌格論を説く。而して、註釋類纂等の著は、之を其間に點綴して、當時の和歌の研究の大勢を明らかにすること、中世歌學の際と同じ。

第一章 古學勃興時代

國文學上の
自由研究

三段の發展

學者各自が師承傳統より離れ、又權勢家より脱して、自己の知識の眞の要求より學問に赴きしを、近世の自由研究の精神とす。この精神は、夙く徳川幕府が文教獎勵のはじめに端を發して、(かの戴恩記に見えたる、林道春が人麿を神秘とするを破したるが如き)元祿時代にいたりて、盛になれり。而して元祿時代以後に於ける自由研究は、國文學發展の經過より見て、凡そ三段に現はれたり。即ち第一は、定家以來傳承の僻説の破壊なり。而して破壊の一方には、準據あり。理想あり。建設あり。まづ後世の僻説を破り、眞の眼を以て、中古より上古へ溯りて、古典を研究し、而してその古典の語學を明らかにし、それを準據とし、理想として、久しく亂れたりし歌文の語法を正し、もの、これ第二段にて、即ち語學的復古なり。而して語學上の研究は、自ら上代文明の研究となり、語學上の復古は、自ら上代文明の憧憬となれり。これ第三段にて、即ち古道主義なり。而して、この第三

段の古道主義の大成は、こゝに稱して勃興時代といふ時代（即ち元祿より享保の初め頃まで）には、未だ成されず、次の時代に入りて成されしなるが、その傾向は、この時代に明らかに現はれ居しなり。

歌學の三段
秘傳説打破

その氣運の
先驅者
下河邊長流

去かして、この時代の歌學も、やがてこの三段の經過に伴なひて發達せり。即ち第一は、堂上歌學の秘傳説の打破なり。而して、その前に、その秘傳説を傳へて、歌道の主權を握れりし堂上の掌中より和歌を脱せしめし氣運に就いて述べざるべからず。その氣運の先驅者たるものは、即ち下河邊長流貞享三年二三月六日の

林葉累塵集 十卷

なりとす。その自序中に「世に司位ある人は、我がともがらにあらざれば、其人々の歌に於いては、稀にもこれを載する事なし。たゞ位なき武士の八十氏人を始め、或は市に荷ふ商人、或は山田に作る農夫、或は樹の下、石の上、ありか定めぬ桑門の言葉に、さるべき一ふしこもれるをば、これを尋ね求む。」と言へり。これ蓋し、その初めに喝破せる「大和歌は、大凡わが國民

秘傳打破の
代表者

戸田茂睡

の思を述ぶる言の葉なれば、上は宮柱高き雲井の庭より、下は芦ぶきの小屋のすみかにいたるまで、人をわかす、所を撰ばず、見るものに寄せ、聞くものにつけて、皆その志をいふこととなむ。」との主張に基づくものなり。去かして斯くの如き氣運は、當然一方に、堂上歌學の攻撃となれるなり。こゝは、長流その人も、契沖が古今餘材抄の序の部の終に附記せる文中に、明らかに「口傳秘授など言へるは、愚かなることなり。」と言ひをれるが、この點を更に力強く主張して、前に數へし第一段の歌學上の代表者たるものは、誰なりやといふに、即ち戸田茂睡その人なり。近世學問の精神を以て、秘傳師承の堂上歌學に手きびしき打撃を與へしものは、實に茂睡なりとす。

戸田茂睡寶永三年二月八日は、長流に後るゝ六年、契沖に先だつ十一年に生れ、長流よりも二十年、契沖よりも五年の後に世を去れり。荷田在滿、賀茂真淵に先だつこと正に一代。近世歌學の先覺者たり。而して、彼の一生は、之を當時の舊派の系統について見れば、恰も註釋家なる北村季吟と時

代を同じうせり。

彼の傳記に就いては、吾人の研究は、さきに著し、歌學論叢中のそれに譲りて細叙せざるが、たゞ殊に注意すべきは、その學統なり。彼は飛鳥井家の都通傳を、その從兄山名義豐出既より晩年元祿五年に受けし事あれど、その歌學革新の精神にいたりては、全然獨創的なりといふことなり。これ長流契沖の學風と全く相同じ。

彼の歌學説は、寛文五年正月、彼が三十七歳の時に記し、宣言書によりて、既に喝破せられたり。其文に曰く、

「歌は大和言の葉なれば、人のいふ詞を、歌に詠ますといふ事なし。さるを、いづれの頃よりか、歌の詞に制といふことを書き出だして、小點の詞、主ある詞、よむまじき詞、遠慮すべき詞、定家卿の不庶幾と宣ひし詞に、くしいふ詞、いとしからずといふ詞と、詞に多く關を据ゑて、人の赴きがたきやうに、道を狭くする事は、歌の零廢すべきはしなるべし。武藏野の廣きおほむ恵は、延喜天曆の御世にもいかでか劣るべき。心のまづかなるまゝに、蒼生

寛文五年正月の宣言書

に至るまで、歌の道に心を寄する時なれば、僻言を削り捨て、迷はせ疑はせずして、正道に引入れ、歌の道廣く世に行はれむは此時と思ふに、日にまし月にそひて、ひがこと多く、遠慮多くなりゆかば、果は詠むべき詞も絶えぬべし。萬葉集三代集によみたる詞は、遠慮なく詠むべきことなり。

あがりたる御代の古道あれにけりひろき昔のまのばるゝかな」

之によりて見れば、此時既に、彼が堂上歌學に反抗して、歌詞自由の意見を懷抱せしことは明瞭なりとす。これ實に、彼が歌學説の中心思想にして、後、元祿十一年、七十歳のとき成りし

梨本集 五卷

は、この宣言を布衍し、實例に就いて論證せしものなり。而して、その論たる、根據確實例證豊富、彼が上古以來の和歌に關する學殖の如何に精しかりしかを示せり。その文辭は、た放膽にして、峻銳なる、そが自信の如何に強きものありしかも伺ひ知らる。

彼には、紫の一本鳥のあとをはじめ、著書多きも、歌學に關するものには、

百人一首雜談

百人一首雜談 二卷 元祿五年成

歌風論

他に、
の著あり。この中にも、制詞難の思想散見せり。かつその註釋に於いても、さすがに當時の舊派學者の古説を羅列せし蕪雜なる解釋とは面目を異にして、よく一首一首の歌としての精神を捕へて、解説批評せり。次に制詞難の思想とともに、彼に注意すべきはその歌風論なりとす。彼もまた、當流歌學の歌人と同じく、新古今の歌風に就いては、寧ろその華麗を喜ばず。玄かも舊派歌學の如く、新勅撰の後世風を重んずることなくして、古今萬葉の古へに遡り居る傾向あることなり。

要するに茂睡はその制詞説を非難して、歌學在來の妄見を打破せし點に於いて、近世歌學の魁をなせり。未だ積極的にはその歌學説を建設するに至らざりきと雖も、この點に於いて、近世歌學の幕開きに當りて、彼があげし功績は、偉なりといはざるべからず。
歌學論叢書
田茂睡參照

語學上の復古説
圓珠庵契沖

茂睡が堂上歌學説の攻撃は、一方にその反證として、中古上古の和歌を用ゐをれり。これ即ち準據を古歌に求めしものなるが、この傾向を一層あきらかにして、前述第二段の語學上復古の説を主張し、おのづから和歌詠作の上にも影響ありしその代表者を圓珠庵契沖元祿十四年二と爲三六一年六二と爲す。

萬葉代匠記の著者として、近世古學家の祖たる契沖の功蹟は、今更述ぶるまでもあらじ。彼には和歌に關して、他に古今集を註せし餘材抄、紀記の歌を釋せし厚顔抄、その他隨筆の著あれども、まともたりたる歌學説とはあらず。蓋し彼は、茂睡の如く歌學者にあらで、その本領は語學者たるにあり。隨つて彼の歌學上に於ける功は、よく古語を説きて、古歌の語法を明らかにし、それとともに、古歌の意を明らかにし、點にあり。純粹の歌論としては、河社に二三散見せり。たとへば、歌は感情を主んずべしといひて。

「宋儒の詩の、唐よりも遙かに劣れりといふも、心を議論における故なる

べし。」

と説き、また古今の歌の精神を比較して、

「古への歌は、たとへば畫師ならぬ人の堪能なるが、用あるとき、物にまかせてかけるが如し。後の歌は畫師のかけるが如し。よけれども心よりおこれるは稀なり。人のやとふにまかせて、草もゆるがず、照る日に汗もまといにて冬の繪かけるに、見る人を寒からしめ、うづみ火のもとに衣を八重に重ね着て夏の畫かゝむに、見る人涼しくおぼえむをば、上手といふべきがごとく、歌もその魂をこめたらむをば、古への人につげりといふべし。」

といひ、以て後世の歌の技術的なるに對して、古歌のまごころを生命とせるを説けるが如きあるのみ。

彼の門下

而して彼の門下は、彼の感化を受けて、古歌に關する研究を益々盛ならしめたり。即ち今井似閑享保八年二三は萬葉緯二十卷を、海北若沖は萬葉類林十五卷、萬葉集人物履歷九卷を、野田忠肅享保四年二は萬葉五句類

徳川光圀

句十二卷、萬葉類礎三卷を著はし、又安藤爲章享保元年二三は、その隨筆年山紀開中に、和歌に關する方面の多くの研究を遺せり。之らの人々の名はた、當時の歌學界の爲に逸すべからず。而して、殊に契沖の爲に保護者たりし徳川光圀元祿十三年二の功績は、忘るべからざるものたり。光圀には、釋萬葉集五十三卷の著あり。古萬葉集の序言はた、其見識を伺ふべし。

荷田春滿

代匠記、惣釋の一節に、契沖は、和歌は三教の崇ぶ柔和を崇びて、その名を負へるものにて、蓋し「胸中の俗塵を拂ふ玉筥なり」とやうに、一種の修養的見解を以てのぞみ、それとともに、上代の淳朴なる思想を傳へたる萬葉の歌を崇び、自らその自然の情趣を、和歌の理想とせる思想を洩らしをるが、これ前述第三段の思想の端にして、古歌の情趣精神を、理想とし來れるものなり。而してこの傾向を、更に明瞭に代表せるものを、荷田春滿元文二三元六八文とす。

春滿は、山城稻荷神社の祠官にして、契沖にや、おかれて出で、大に國學を唱へし學者なり。その著書には、萬葉童蒙抄、同僻案抄等あれど、彼の歌學說を伺ひ得べきは、

國學校創造啓文

國學校創造啓文 一篇

及び、荷田信美の著るし、春葉集序なり。

彼は、古學の研究に於いて、單に語學上古典を明らむるに止まらず、一歩すすんで、古代の文明を明らかにし、國家本來の國體をこゝに求めむとせり。而して、彼はこれを稱して、國家の學、もしくは國學と稱したり。則ち契沖の古學は、彼に於いて國學となれりしなり。彼が歌學說、又彼のこの學風に伴ひて、崇古主義の主張となれり。彼曰く、「萬葉集者、國風純粹、學焉、則無面牆之譏」と。

國家の學

更に、之を信美の記せるところによりて見るに、

「學の道は、天の下の大路なれば、おのれ一人たてらむが如、ほこるべからず。學ぶ人も、師の教なりとて、あながちになづむべからず。皇御國の書見む

人は、まづ唐書を讀みて事を辨まへ、時雨ふる奈良の林に、分け入り、神代の宮木ひき、千世の古道跡をとめつゝ、ますらを心をおふしたてて、高き代を慕は、などか昔の手振に至らざるべき。歌も然りと、常に翁の言へりしとぞ。又曰く、古へは、真心もて思をのみ述べれば、おのづから直かりしに、題をとりて詠めるより、詞を飾り、心をさへ巧に作れば、くるしげなるもかつがつ見ゆるぞかし。……男女の中らひ、何くれの物によせ、心にもあらぬあだし言をいひ出だせるは、まことを述ぶる歌の本意ならずとて、戀の題をふつに詠まず。」

と。即ち古歌の真情を尊び、古への手振を理想とせしこと、明瞭なり。この思想が、古學勃興時代の歌學說の究極にして、賀茂真淵によりて繼承せられ、大成せられしものたり。

漢學者の歌學說 荻生徂徠

この章を終るにのぞみ、當時の漢學者の說を附記しておかむ。

第一は、荻生徂徠、享保十三年二月三十一日（西暦一七三〇年三月三十一日）に生れ、

南留別志

春滿に先立つ八年に世を去れり。その隨筆南留別志の中に左の二節あり。

「一、伊勢物語は歌の心を説きたるものなり。事のあるなしは論ずべからず。抄物のやうなる事して歌のこゝろを説かむは、歌を知らぬ人のする事なり。」

「一、題詠といふこと出で来て、和歌は衰へたり。」

中世風の抄物を斥け、題詠の弊を喝破せしは、卓見とすべし。

なほ彼に、和歌世話一卷あり。「我がせこが來べきよひなり」以下三十首の古歌を擧げて評せるもの、語簡なるうちに意深きものあり。

太宰春臺

彼の門下に出でて、更に注意すべき學説を遺し、ものを、太宰春臺延享四年

二四〇七とす。春臺は、徂徠より十四年後れて生れ、眞淵に比ぶれば十七

年早く生れ、二十二年早く世を去れり。勃興時代より次の時代に跨れるなるが、便宜上、學統によりて徂徠の後にこゝに叙すべし。

春臺の歌論は、その隨筆なる

獨語

獨語

の中に載せたり。それによりて見れば、専門家の説ならずと雖も、卓見寧ろ専門家の思ひ至らざる點に及べり。

彼は、自己の熟達せる漢詩の道より推して、和歌を論じをれり。蓋し、凡そ唐土と我が國と、風俗同じからずと雖も、詩と歌との道ばかりは、その道理全く同じ。その子細は、異國も我が國も、古へも今も、人情は異ならざるに、詩も歌も心の聲にて、性情を吟詠することなれば、唐と大和と詞の變るのみにて、性情を吟詠することは、少しも變ることなき故なり。但し、この説又既に徂徠の説きしものと、彼自ら記せり。

詩歌同規

歌風の變遷

之かして、彼の歌論を見るに、漢詩の風體の變遷に比較して、和歌の風體の變遷を論せり。その歴史的眼孔は、學殖ある彼の説とて、卓見あり。その説の根本は、萬葉古今の風を、盛唐までの風體に比し、和歌の理想こゝにありとして、復古を唱へしなり。彼によれば、その萬葉古今の風は、三代集以後に、一度白樂天の拙悪なる詩風の影響の結果によりて衰へ、第二に俊

成が天台の佛法を學び、一心三觀の理を歌道の極意とし、その結果より生じたる理屈にて、くゞしき歌風の影響をうけて衰へ、而して定家以後、爲家の凡才いで、二條家堂上歌學となりて、益々衰へしなり。彼曰く、「新勅撰より下つ方は、言ふに足らず」と。彼は、堂上公家の歌學を尊信し、盲従すること、を以て歌道の一大厄とし、和歌の決して堂上の專有すべきものならぬよしを言へり。彼慨嘆して曰く、「今公家の人々、和歌の道を古へにかへすべき事を思はずして、五百年來定家卿の教を守りて、道の衰へゆくことを知らず、至りて歎かばしき事なり」と。而して、彼が斯くの如き復古主義を唱へし故は如何といふに、これ後世の歌の技巧を斥け、古歌の實情實感を重んぜし故なり。彼曰く、「古人の詩は、必ず實境に對し、事實ありて、實興より出づる故に、その意皆實なり。後世の詩は、題を設けて作る故に、其意多く虚偽なり。是を無病呻吟と云ふ。呻吟は、をめぐなり。和歌も、古への人は、皆實意にて詠めり。後世は題を設けて詠む故に、多くは虚偽の詞なり」と。要するに彼の説は、儒學における復古學の見地より、和歌の復古を述べ

復古説

しものなるが、その三代集後の風が白樂天の詩の影響によりて平弱となりしこと、俊成が天台宗的趣味の所謂幽玄體の由來となりしことを説ける、卓見稱すべし。

室鳩巢

なほ、徂徠春臺と時代を同じうして、室鳩巢享保十九年二三月四日歿七十七あり。鳩巢は、

陸菴雜話

儒學の系統は朱子學派にして、徂徠春臺の古學派とは反對の學派に屬せるが、彼又和歌を嗜み、大學の意を歌へる、大學詠歌一卷の著あり。その歌論の斷片、陸菴雜話にあり。即ち、倭歌に感興の益あり、「六義の沙汰」の二節とす。前節にては、和歌は到底、詩の詞理ともに具足して、曲に人情を盡すには及ばざれども、人情のまことを傳へて、人心を感興せしむる益あることは、詩と同じきよしを説き、後節にては、古今序の六義を論じて、その「詩の六義を深く考へずして、たい歌の様を六種にわけて、詩の六義と數を合せ」たるものなることを論せり。

六義論

篠崎東海

和學辨

また、徂徠春臺とも交はり、伊藤東涯に學びし篠崎東海元文五年二四月〇歿五十四は、その著和學辨に、和歌といふ稱呼の正しからぬことを述べ、當時の歌學者

の漢詩漢文の素養少きことを慨嘆したり。

第二章 國歌八論

自由研究の精神に基づきて發生せし近世の歌學は、必ずしも同一の傾向に向はざりき。近世古學復興の氣運の、近世歌學の一般の傾向を復古的ならしめしことは、前章に述べし如くなるが、同じく秘傳打破、自由研究の精神より出でて、この一般の傾向と異なりし歌學を主張せしものあり。こゝに述べむとする荷田在滿の如き、それなり。

荷田在滿

在滿寶曆元年二四は春滿の姪にて、其嗣子となり、最も律令有職に長せし古學者なり。寶永三年、京都に生れ、長じて江戸に出で、世を去るまで江戸に住みたりき。その學問を以て、田安宗武に仕へしが、元文五年、大嘗會便蒙を刊行せしをもて幕府より譴責せられ、後、賀茂眞淵を推薦して、己は仕を辭しぬ。在滿の歌學の書に、

國歌八論

國歌八論 一卷

あり。こは寛保二年、即ち在滿が三十七歳の時、茂睡が梨本集を著し、

後四十五年に著せるもの、田安侯の間に答へて上りしものなり。

八論とは、歌源論、歌論、擇詞論、遊詞論、正過論、官家論、古學論、準則論の八つなり。彼が説を見るに、その歌を以て堂上の專有物となす從來の僻見の理由なきを喝破し官家「歌を詠むに、古歌を解せずしては詠まれざるにはあらざれど、一切に古歌を解せざれば、面に墮して立てるが如く、實にも便なし。その古歌を解することを學ぶを歌學といふ」とて、古歌を學ぶの必要を説き、「それ歌書の中には、萬葉集より古きは無し。之を學びずば、歌學といふべからず」とて、萬葉の研究を説き、假字遣の復古を述べ、定家以來の歌學の臆見僻説に反抗したり。制詞説、古今傳授等、もとよりその攻撃せし所なり。古學論

以上の點に於いては、古學勃興時代の精神を精神として、その時代の各先輩の意見と全く同じ。こゝに更に進んで、彼が特殊の歌學説に入る。

彼はまづ、その歌源論に於いて、「歌は言葉を永うして、心を遣るものなり。然るを心に思ふ事を見る物聞く物につけていひ出だせるなりとのみ言

彼が特殊の歌論

歌の本來の性質

詞花言葉

ひては、未だ盡くさず。」と説き出だして、單に宣ふと記されたる二尊の唱和は未だ歌となすに足らずとして、歌の本來の性質は、聲をあげて歌ふにありとせり。然るに、後世に至りては、此うたふといふこと、已みたり。歌ふ時代に於いては、單に思ふまゝ、自然に述ぶるに止まりしが、この歌ふことのやむに至りて、歌は詞花言葉を、歌ふ技となれり。歌ひし時代の質朴なるは、文華になれり。和歌の歴史に就いていへば、天智帝頃までは、全然質朴なる本來の歌の時代にして、萬葉にいたりて、一步華に近づき來れり。而して古今を経て、新古今にいたりて、その文華の極に達せり。

凡そ和歌は、國語の純粹を傳へるといふ點に於いて、學者の嗜むべきものなり。随つてこの點よりして、古語の純粹を以て歌を詠まば、長く古語も傳はりて廢絶せざるべしといひて、古歌の風をならひ詠む人もあれど、元來古歌本來の歌ふといふ性質は既に和歌より失はれ居り、殊に和歌てふものは、六藝の類にあらざれば、素より天下の政務に益なく、又日用常行にも助くる所なし。古今の序に、天地を動かし鬼神を感せしむと言へる

歌は治道の具教誠の助けならず

擇詞論

和歌の理想は新古今風なり

ば、妄説を信せるなるべし。勇士の心を慰むる事は聊あるべけれど、如何でか樂に及ぶべき。男女の中を和らぐるべき事なれど、却つて姪奔の媒とやなるべからむものにて、治道の具教誠の助けなどいひて、貴ぶべきものならず。「たゞその風姿幽艶にして、意味深長に、連續機巧にして、風景見ることが如くなる歌を見ては、我も及ばむことを欲し、一首も心に叶ふばかり詠み出でぬれば、樂しからざるにあらず。要するに、文字の翫びなり。去かず、古歌の質朴なるを捨て、後世の和歌の華美をとり、詞花言葉の美をなさむには。而して、この爲には、まづ詞を擇ばざるべからず。古語は質朴なるを以て、その中には、迂遠なる詞、急迫なる詞、細碎なる詞あれば、古語なりとて擇びて用ゐ、迂遠、急迫、細碎なる詞は之を避けざるべからず。而してこの詞の撰擇取捨は、一に和歌の風姿より考へ、當然の理によつて爲すべきにて、世俗の歌學者の所謂制詞の説などは、素より取るに足らず。さて斯くの如き見地に立つ彼の和歌の歴史、上理想とする體は、質朴なる萬葉集にあらず、また花なれどもなほ質の伴なへる古今集にもあらずして、詞

在滿の歌學說の主要

花優麗にして風姿幽艶なる新古今の歌風なり。新古今に於いても、彼は後京極攝政の和歌を、每首皆錦繡、句句悉く金玉、意情を述べれば、たゞちに感慨を生じ、景色を言へばまのあたり見るが如し」と激賞せり。但し定家に對しては、その歌學の弊に反抗する餘りに、殊更に貶しめしもの如し。在滿が斯くの如き學說に、主要を爲すものは何ぞと云ふに、そは即ち和歌は詞花言葉の翫びなりと説きて、新古今の歌風を主張せし點にあり。斯くの如きは、古學勃興時代の歌學の大勢より見れば、新奇の觀あり。さらば在滿が説の由來は如何にといふに、吾人がこの章の始にも一言せし如く、彼在滿が自得の見解なり。その次第は、眞淵がこの八論の成りし由來を記せる言に、「金吾君、秋の初めの頃、在滿に歌の道の事を書きて參らせよと侍りしに、在滿曰く、いと若かりし時、春滿に養はれて侍れども、有職の事をもはらとし侍れば、歌の事はよくもあげつろはず、かつく聞きつるも、はたいかゝなど思ふも侍ればなど答へ參らするに、尙その春滿が旨をばおきて、如何にもみづから思はむ所をと宣ふに、呑みがたくや有りけむ、

三日ばかりのほどに、國歌八論を書きて參らせけるを「國歌臆」とあるに
りて知らる。(今の國歌八論の終に、應友人需註胸臆事云々の奥書あれど、こは
田安侯を懼かりて、わざとまか書けるものとおぼし。而して、彼がこの詞花言
葉の説は、わが國の歌學説が、自然説の極端に走らむとせし一般の缺點を
補ひて、和歌の藝術としての性質を明瞭にせし點に於いて、歌學史上最も
注意すべきものなり。

彼の説の
缺點

されど彼の説には、看過すべからざる、一缺點あり。そは何ぞといふに、
即ち歌ふべき和歌本來の性質の失はれ來し後代に於いては、如かず、詞花
言葉を翫ばむには、といふ一種の消極的思想なり。この思想の根柢には、
正々堂々と、歌は藝術なりとの主張にあらで、一種の諦め主義の思想伴な
へり。これ未だ彼の説が、一の學説として完全ならざる點なり。この點
に於いて言ひ及べるものは、後に擧ぐる大菅圭なり。

八論と當
時の學界

在滿が國歌八論の著は、學界の注意を引きて、當時の學者は、相次いで之

を論じたり。その次第は、清水滋臣の泊酒筆話に詳なり。曰く、

「そのかみ、やむごとなき御あたり、此書を論じ給へる國歌八論餘言出
で來たりてより、それにつきて、在滿またおのれの思へると、御論のかはれ
るとを論辨せし一帖あり。また、縣居翁の國歌八論餘言拾遺あり。後に寶曆
十一年に、大菅中養父といふ人の國歌八論斥非といふあり。在滿の新古今
を好めるを難じて、われは古今集に香火し、貫之に尸祝せむと言へり。明和
五年、本居氏、その八論と斥非との得失を評して、くはしく言はれたるあり。
また、荒木田久老神主の評言もあり。本居氏とすこし違へることもまじれ
り。又、後、閑田子蒿蹊の評あり。かく諸俊傑の論やまざるは、畢竟八論の餘光
といふべく、又八論の面目と言ふべし。」

と。なほこの文に記せる外に、一二の評論の書出でたり。いま便宜の
爲、一括して表示せむ。

國歌八論餘言 (寛保二年)

田安宗武

國歌八論餘言拾遺 (同上)

賀茂真淵

- 國歌臆說 (寛保二年) 賀茂真淵
- 國歌八論斥非 (寶曆十一年) 大菅圭
- 國歌八論評及び八論斥非評 (明和五年) 本居宣長
- 同評 荒木田久老
- 國歌八論評 伴蒿蹊
- 國歌八論斥非通駁 平安逸人糟粕子
- 國歌八論斥非再評 藤原維濟
- 國事八論 (寛政五年) 荷田松圃

在滿が、八論餘言に對して、再び田安侯に上りし論辨の書(八論餘言に附記せる加藤枝直の文に出でて、上述の泊瀬筆話に其名を引用せるもの)は傳はらさず。眞淵、宣長等は、後章に細叙すべきも、以下八論の評論として注意すべきものを述べむ。

田安宗武

田安宗武、明和八年二四は、悠然公といふ。徳川吉宗の二子にて、松平定信の父なり。名君にして、また學問に志深く、殊に有職聲律に精しく、服飾

國歌八論餘言

管見、樂曲考等の著あり。初め在滿を召し、在滿致仕してより、眞淵を聘し、それより眞淵の感化を受けて、萬葉風の和歌に堪能なるに至れり。天降照國歌八論は、もと彼が在滿をして書かしめしものなり。言參

國歌八論餘言 一卷

は、八論を讀みて直ちに書きしものとおぼしく、未だ眞淵を聘せざりしほどの著なり。

その説を見るに、歌は聲をあげてうたふものとして、八雲立つを歌の源とせること、制詞のいはれなきを難せる論、當然の理を以て過を正すべしとの論、官家歌學の論等は、在滿の説に同意し、その他は意見を異にせり。即ち、近世歌學の精神に於いては一致すれど、その歌論の根本に於いては異なれり。さらば彼が歌學説の根本は如何と云ふに、彼は歌を以て、在滿の如く、詞花言葉の技とはせずして、人の心を和らぐべき道なりとせり。而して歌には、理りとわざとあり。理りとは人道政道といふことにて、政正しく人治まれる世は、即ち歌の理り盛なる世なり。わざとは、詠み出だ

理りとわざ

瑣碎とすべ
き歌風

したる所謂歌なり。正しき人は自ら理りに叶へれど、若かもわざには拙きあり。わざに得て理りには得ざるあり。この二つ全からざれば、歌道とは言ひ難し。されば實の歌學とは、まづ歌の理りを學ぶをもととして、次に其わざを學ぶをいふ。然らばその理りに於いて、其わざに於いて、吾人の準據とし、模範とすべき歌風は何ぞと言ふに、即ち上古の和歌なり。上古の詞を以て、或は瑣碎、或は急迫、或は迂遠などなすは、後世の眼を以て見しものにて、實際は、古き詞はめでたく、世降れる後の詞は、多くは拙し。この點よりして、古歌を學びて古語を知ることとを必要とす。これ彼の説の大體なり。彼は餘言中、「新しき物の名を歌によむ論」、「歌をたしなむの論」の二つを附記して、堂上歌學の歌題を制限するの愚なるを説き、歌を嗜む餘り、或は之に耽り、或は人に競ひ、或は去ひて上手ならむとするなどのよからぬを言ひ、「されば歌よむ事は、素よりおのが心を述ぶるなれば、あながちによくせむと求むべき業にあらず。ただ心にのみよからむ事を思ひて、其わざをばたやすく爲すべき事にや。」と言へり。

歌體約言

彼が學説はその後の著なる

歌體約言 一卷

彼の崇古思想

に更に明瞭に見ゆ。そは眞淵が出任の年、(延享三年)に成れるものなり。これによれば、彼が、それ歌は人の心を種として、詠み出づるものなれば、我が心につくろひたる事なく、すらく」と詠み出だすべし。」といひて、自然説を説き、後の世の歌人は、耳に遠き古き詞を、いやしげなりと嫌ひて詠まず。それ人の詞世くだち行くに従ひて、賤しくなりぬる事は、日本、唐、土、同じ、理りなるに、却りて古への詞をいやしとする事、大きにたがひたる事なり。」といひ、古今集を経て、寛弘以降の和歌より衰へ、そめ、俊成、定家に至りて、いよいよ衰へ、時世衰亂の風を傳へたる亡國の風となれり、といひて、その崇古思想を述べたり。彼が斯くの如き崇古思想の由來は、勿論眞淵の影響もありしならむが、(彼は眞淵を聘する以前より、眞淵を知れり、寧ろ、儒學上の崇古思想に基つきしものとおぼし。かの歌體約言に曰く、「臣、幼きより此道を好むといへども、そのかみ未だ後の風を好みて、亡國の風を免かれず、た

まさか古への風を見ることあれど、むつかしげに恐ろしき様に覺えて、嘲り侍りき。漸く壯年に及びて、古への風の實あるを知りて、亡國の風を捨てて、これに志しつゝ、今に至りて、歌に治まり亂るゝ勢あることを審にして、益々古への風を尊み侍る。」と。而して彼がこの崇古思想は、眞淵を聘し、その影響を受くることによりて、益々明瞭になれりしなり。(彼は八論餘言を書きし時、それを眞淵に示して、その意見を徴しつ。眞淵たゞちにこれに答へしもの、國歌臆説にて、八論餘言拾遺は、臆説の原稿なり。)

摘要冠辭考

因に云ふ。彼に摘要冠辭考二卷の著あり。未完の書なれども、眞淵の冠辭考を評せしものにて、眞淵の考には、冠辭ならぬものをまひて冠辭として説けるありとなせり。而してその冠辭の意義を説ける一節に、「すべて古への冠辭、むつかしきは少く、安らかなるが多ければ、いづれにも取らるゝは、安らかなるによるべし。」となし、眞淵が解の理をうがちて過ぎたるものあるを難じたり。確かに一見識として注意すべし。

眞淵の國歌臆説

眞淵の學説は、次章に細叙すべきも、こゝには八論にそへて、その國歌臆説 一卷

の説の大體を述べおかむ。

臆説は、田安侯の餘言に關する批評とも云ふべくして、八論そのものに就いては、餘り多く論じをらず。その餘言に對する批評は、大體に於いて賛成せり。制詞論、正過論、堂上歌學論は、餘言とともに八論の原説に賛成し、而して餘言とともに、萬葉古今を主張して、餘言が歌合の行はれし後和歌の廢れたりと喝破せるを卓見とたへ、擇詞論に於いても、古詞の正雅なることを一層精しく説けり。菀歌論に於いては、餘言とともに和歌の治道に功あるべきを説き、餘言がその點について漢詩に劣れることを言へるに對して、和歌はもと漢詩の如くあらはに教化の意を詠まねども、人間自然の情を述べて、自らに人を風化する功あることを主張せり。而して歌源論に於いては、在滿宗武の説によらずして、二神の唱和を以て歌の

端なりとして、それを古事記には、單に先言、後言と記せるを、日本紀には、唱和と記せるは、それが歌の端なる故なりとせり。又眞淵には、これに關係して宗武に上りし

再奉答金吾君書

再奉答金吾君書 一卷 延享元年成

あり。これによれば、宗武には、眞淵の臆説を讀みて更に物せし國歌剩言といふ書ありしにて、この再奉答は、更にその剩言に對する答なり。こは要するに、臆説の説を補ひ、精しくせしものなるが、殊に歌の設けて教にとて、詠みしのかつがなれど、おのづから教化に功あることを言ひ、支那日本の國風を比較して、詩と和歌とに及び、詩も元來人情を歌ふをもととしたるが、宋儒以後、専ら理をもて之を説き、偏へに勸善懲惡の爲とせしなり。凡そ理は天下の通理なるが、理のみにて天下は治まらず。更に人情といふ大切のものあり。詩はその人の眞情を述べ出だすものにて、必ずしも理を主とせず。詩歌に重んずべきは人情なり。漢詩の理りに傾くは、詩歌の元來の旨にたがへり、として、宗武の説に反對せり。その所論、引

用諸經諸子にわたりて、彼が漢學の濫蓄淺からざりしこと伺はるゝは、注意すべき一事とす。

大菅圭

國歌八論斥非

次に大菅圭安永七年二四の

國歌八論斥非 一卷

に就いて述べむ。圭公圭また白圭といへり字は瓊美、近江中菰村に住めるをもて、中養父ともいふ。彼、髻齡和歌を好み、弱冠にして、撰集家集を涉獵せしが、中年、野村東阜天明四年二四四四に従ひ、篋社に遊びたりき。著書に、古今集序考、古今集畧解、小倉百首批釋等あり。(序考、略解は未だ見ざるを得ず)

彼が斥非の著は、寶曆十一年に成れり。八論を始め、餘言、餘言拾遺、臆説等の成りし寛保二年を去る十九年、在滿既に歿して十年、眞淵の死に先だつ八年といふ時なりき。

その書は、餘言以下の例と同じく、八論の各論に就いて、逐條批評せしも

在滿を離す

拙を去りて
巧につくは
作詩の常

和歌の功

のなるが、其うち、官家論、選詞論中の制詞論、古學論の大體に於いては在滿の說に同意せれど、その他に於いては反對せり。その論の大意に曰く、凡そ我が國の和歌も、その本質に於いて漢詩と同じ。よろしく國詩と稱すべきなり。其うちに、言をあげて歌ふものと、必ずしも歌はざるものあり。その歌ふものを取り出でてこそ、歌とはいふべきなれ。在滿が、歌ふの一義によりて、上代の和歌の凡てを律し、それを後代の和歌と區別して、上古の歌の質なるは歌ふが爲に作ればなり、中古已來の歌の文なるは、詞花を翫ぶのみにて、歌ふが爲にせざればなりと言ひしは、誤れり。質より文に赴くは、萬物自然の理にて、必ずしも、歌ふものが歌はぬものとなりし故にあらず。否、寧ろたゞ言に發せむよりも、歌はむ料に、作らむには、いよいよ花になるべきなり。元來拙を去りて、巧に就くは、作詩の常にて、上古八雲立つの歌も、天なるやの歌も、素尊の心のかぎり拙を去り、高姫の心のかぎり巧につきたるなるべし、と言ひ、さて翫歌論に入り、在滿が說を、その漢詩の說より駁せり。元來和歌は詩の一體なるが故に、又王道の一端なり。

基づく所は
衆人の好惡

大にして天下の治道に益をなし、小にして人心を安慰する功あり。或は教化を美にし、或は風俗を移すの具なり。(云かも彼は、和歌を去りて、勸善懲惡の旨と解し、その風雅の道たるを忘る、いことを歌の本旨に合はずとして非難し、歌の根本は、君より制作して臣下に由らしむる法令道德のたぐひにあらずして、萬民の人情に基づけるものとし、此點に於いて自ら教誡の本づくところとせり。これ彼が小倉百首批釋に、幽齋季吟等の附會の說を評しつゝ、述べたる所によりて知らる。)在滿の如きは、詩歌の本義を知らざるものなり。次に在滿は、當然の理をおして、言語風體の文質をさだめ、その質を捨て、文によるべしとせれど、所謂當然の理も、亦人の考へのまゝにして、何等の定準なし。基づく所は、衆人の好惡にあり。その好惡、又時世によりて異なれり。在滿が古風古言を質朴、急促、迂遠と云ひて排し、新古今風を優美、幽艶とせしも、後世に拘みて、上世を見、後世を見しものにて、定論といせられず。元來和歌に於ける題詠技巧等は、素より必要のことなれども、そは人をして感せしむるやうなる名歌を作らむ爲の道なり。在滿がいふ如き玩の爲に

古今集を準
則とすべし

する遊戯にわらず。而してかゝる立場よりして著者は曰く、元來在滿の稱譽せし新古今の風は、意を構ふること巧みなれども、古今の高古に及ばず。辭を撰ぶこと華なれども、古今の温雅に如かず。凡そ假字の誤は、萬葉を法として復古すべきなり。風躰の過は、古今を準則として正すべきなりと。

大體に於いて、圭の論は、儒學の立場より和歌を論せしものなるが、質より文に赴くは自然の理なりといひて、在滿の既に歌はぬものとなりし後世の和歌に於いては、よろしく詞花言葉の翫を主とすべしといふ消極的技巧説のうちひそめる矛盾を破したる點は、當れり。

小倉百首批
釋

なほ彼が小倉百首批釋に就いて一言せむに、彼は「此百首に由りて、和歌の道古へに復するの一助たらむことを庶幾し、宗祇、幽齋、季吟等が古註の妄見を難じ、契沖の説をも批評して、往々創見を示したり。前に掲げし一節の外に、千載新古今の歌風を評して、當時亂世の弊とし、俊成定家を貶して、大に實朝をあげたる、また、季吟が註釋の學風を、當時盛に行はれし、四書

宣長の八論
及び斥非評

朱註の法を和歌に摸せしものとせるなど、注意すべきものあり。

次に、本居宣長の八論及び斥非の評に就いて一言添へおくべし。宣長の歌論は、別に詳述するをもて、こゝにはたゞ簡單にその評に就いて述べらるに止めむ。宣長がこの評は明和五年(三十九歳の時)二書を寫しとるとともに書きそへしものにて、素より彼が歌論の著としては主要のものにあらずといへども、彼は新古今風を和歌の極致とする點に於いては、在滿と意見を同じうして、古學者にして、新古今を隆盛の極といへる、卓見なり。只古へに偏なる輩の及ばざる處なり。」と稱譽せり。されど在滿が、後世の歌に拘みて、歌をたゞ翫ぶべきもの、詞花言葉の遊戯とせしには反對して、和歌が人心を感せしむる徳を説けり。さりとして斥非が、儒道思想を以て和歌を解せむとする傾向には、全然反對して、和歌は治道の具にもあらず、道德の教にもあらず、人情のあはれに基つきしものなりといふ彼の思想を述べたり。

伴蒿蹊

國歌八論評

次に伴蒿蹊の

國歌八論評 一卷

あり。それを補ひ改めしものと見べき。

國歌或問 一卷

あり。この兩書によりて見れば、彼の説は明らかなり。彼は官家論はもとより、擇詞論、避詞論、正過論、古學論等に於いては、在滿に賛成して、眞淵及びその一派が、萬葉風の歌風の崇古の弊を攻撃せり。されどその翫歌論、準則論に於ける在滿が主張に對しては、反對して曰く、在滿が歌は翫ぶべきものと言へるは、出れるをためて直きに過ぎたる言なり。歌といへば、天地を包羅し、儒佛神道これにこもれりといふは、舊來の歌學者の僻説なるが、さりとて和歌は、全然詞花言葉の遊戯にはあらで、よく人心を感せしむるまごころの聲なり。凡そ此まごころ、若しくのまごころこそ、歌の主なれ。古歌の質實がよく人を動かすは、此まごころのある故なり。この

古今風を準據とすべし

點よりいへば、決して古歌を斥くべきにあらで、古歌の精神を學ばざるべからず。新古今の花に過ぎたる風は、まごころに遠き點に於いて、準則とするに足らず。こゝに於いてか、古歌のまごころを傳へて、古歌の如く質朴ならず、優雅にして、まごころも花に過ぎざる、古今風の歌風、これこそ準據とすべきものなれと。これ彼の説なり。彼がまごころの思想は、眞淵が熱心に主張せしところ、而してまた、彼の僭輩たる小澤蘆庵が唱へしところに、それらに就いては、次々に論すべきが、彼の説は、後章にいたりて自ら明らかなるが如く、在滿の技巧説、眞淵の眞情説の後に出でて、それらを折衷し、をれる觀あり。

松岡の國事八論

なほ在滿の從弟松岡が、寛政五年の秋、國歌八論に倣ひて著し、國事八論一卷あり。國體、皇統、祭政、禮樂、文武、儒釋、歌詠、伎藝に就いて説けるなるが、歌詠篇の中に、その歌論を述べたり。その説、在滿及び反對家の間にたちて、折衷的態度をとれるものにして、元より性情を諷詠するものなれば、

質素を貴ぶべしといへども、詞花言葉の佳なるをも撰取せずんばあるべからず。古語を辨明して、古歌の意思を知り、時風を考へて、當今の性情に適すべき體を學ぶべし。奇僻に度らず、鄙俗に落ちず、中正の規矩を守りて、疎放なるべからず。といひて、所謂中正の見を取れり。

また荒木田久老の八論及び斥非の評ありといへど、いま傳はれるは斷片に過ぎず。同じく斥非通駁、斥非再評の二書も、煩を厭うて省略す。

結語

國歌八論が當代の歌壇に影響せしことは、以上の論辨の書をもて明らかなり。近世歌學に於いて、始めて、他の學者によりては看却せられたる和歌の藝術的性質を明らかにしたる學說を發表し、諸種の問題を提供し、幾多の學說勃興の機會を作りし荷田在滿の功績は、歌學史上特筆すべきものたり。

賀茂眞淵

第三章 賀茂眞淵

古學勃興時代の歌學は、荷田春滿の門に出でて、古學の泰斗たりし賀茂眞淵に至りて、その之くべき所に達せし觀あり。

眞淵は元祿十年、遠江に生れ、享保十八年三十七歳にして上京し、春滿の門に入り、春滿の世を去るまで四年間彼に學び、元文三年四十二歳にして江戸に出でてより、一個の學者として立つに至れり。彼の著書の大半は、その以後、殊に延享三年五十歳にして田安家に仕へてより、明和六年二九七十三歳にして歿するまで、二十餘年間に成されたり。

彼の著書は、數十種に及べるが、その大部分を占むるものは、上代歌謠の研究に關するものなり。そは萬葉考、冠辭考以下の萬葉に關する研究を始めとして、古今集、降つては百人一首に至り、更に祝詞、神樂、催馬樂等の註釋にも及べり。

彼が古歌の研究は、單に語學的に古歌の意義を詮議するに止まらず、そ

の以上に出でて、古歌の純粹自然の歌風を闡明し、主張するにあり。而して、彼の斯くの如き主張は、上代文明を理想とし、憧憬する、その古學の精神に基づきしなり。

彼の著書中、彼の歌論の主張を伺ふべき主なるものは、十餘種あり。國歌八論に關する上記の三種、八論餘言拾遺、國歌賦、說、再奉答金吾君書の著も、そのうちに屬せしむべきなるが、それらは、彼の歌論の著の初期に屬するものにして、彼が圓熟せる思想は、その後の著述にあらはる。今その著の重なるものを擧げむ。

彼の歌學書

- 古風小言 一卷 寛延年中
- 萬葉解通釋 一卷 寛延二年(五十三歲)成
- 龍の公美賀茂の眞淵 とひこたへ 一卷 寶曆十年(六十四歲)成
- 萬葉考序 一編 寶曆十年(六十四歲)成
- 歌意考 一卷 明和元年(六十八歲)成
- にひまなび 一卷 明和二年(六十九歲)成

萬葉新採百首解序附記 一編

その外、彼の説は、賀茂翁家集雜文、賀茂翁遺草、縣居遺説、縣居書簡等の諸雜筆中、及び諸註釋中にも散見せり。こゝには、専ら上記の主著によりて、彼の説を叙述すべし。

古文獻の研究が、上代文明の思慕となり、それとともに、古歌の研究が、古歌風の主張となりし自然の傾向に就いては、已に述べし如くなるが、斯くの如き徑路は、彼に於いては、(彼は若くして、狹生徂徠の學統をうけし濱松の儒醫渡邊蒙菴に學び、後、同學統の服部南郭と友としよかりき)當時の古文辭學復興の氣運に影響せられしこと多かりしは、疑ふべくもあらず。殊にその初めに於いては然り。こゝは新採百首解の附記等に明らかに見ゆ。されど彼は、あくまで純粹の固有文明を主張せしにて、彼が上古の歌風を唱道せしも、その漢意をはなれし純粹自然の風を喜びし故なりき。

斯くの如く、復古思想に基づき、上代の歌風を唱道せし彼の歌學思想の根柢は何處にありやと云ふに、そは、歌は人の真情を自然にさながらに聲

彼の歌學思想の根柢

自然と眞情

にあげて歌ひいでしものなり、といふ思想に基づけり。即ち、その主なる思想は、眞情といふことと、自然といふこととの二つなり。眞情といふことよりして、作爲といふことに反對し、詞花言葉の遊戯なりとなす、在滿が翫歌論の思想などには全然反對せり。随つてまた、技巧を斥け、あくまでありのまゝの自然を貴べり。而して、斯くの如き眞情自然は、實に上代の歌の生命なり。彼は上代の歌の生命をこゝに見て、この歌學説をいただき又この歌學説をいただき、上代の歌風を喜べり。而して彼が上代の歌風の思慕は、更に上代の和歌の他の特質に向へり。そは何ぞといふに、即ち上代の歌の所謂丈夫ぶりなる點なり。彼のこの思想は、彼の著書の晩年のものに至りて、明らかに現はれ來れり。彼が歌意考に於いて、上古の歌風の特長として、自然のうちに貫くに高く直き心を以てせるを説き、更に進んで、雄偉なる大和の國ぶりには、ぐくまれたる、而して又我が大和民族本來の尙武の精神を傳へたる、雄健なる意調を唱道して、古今集以後の歌風を以て、一には優美なる山背の國ぶりに影響せられ、一には巧緻なる唐

丈夫ぶり

詠歌の目的

古道の方便

ぶりに影響せられて、所謂手弱女ぶりになり來りしものとして、斥けし思想に於いて、峻然としてあらはれたり。繊細なる作爲技巧を去りて、高古雄健なる自然の情趣を詠み出づること、これやがて彼が和歌の理想なり。彼が源實朝を以て、後世第一人として激賞せしも、その高古雄健の歌風を喜びし故なり。

彼の歌學説の根本は、斯くの如くなるが、他に彼の説中注意すべきもの二三あるをもて、その主なるものに就いて述べおくべし。

第一は、彼が詠歌の目的、てふことに就いての考なり。彼は古歌を讀み味ひ、古歌の心を心とし、其うちにありて、自ら古歌の心をよみ出づることを以て、古への文明を理解し、自然順直なる古文明の心を心とする上、最良の方法とせり。これ彼の歌學説に於いて、極めて主要なるものにして、彼は作歌の目的を實にこゝにありとなせるにて、彼が上古の歌風を唱道せし原因の大なるものも、亦こゝにありとす。この思想よりして、國歌八論の論争に於いて、餘言の駁論に替して、和歌の人心教化に功あることを

人情

説きしなり。まかも亦、これとともに、彼はかゝる實際上の目的とは離れて、歌そのものの職分を認め居たりき。この思想は、前章に述べし再奉答金吾君書の中にも、歌は人情を言ひ出だすものなれば、凡の理にわたがふもあれど、其一人の上にて見れば、却りてまことにさりけりと思ひやられてなつかしきも侍り。又「凡そ理は天下の通理ながら、はた理のみにて天下の治まるにあらず。詩人のまことを述べ出だすに、その思ふことごとの實情みな理にあらむや。たゞ理は理にして、それが上に堪へがたき思をいふを、和の語にわりなきといふ。……其わりなき心をも、たゞにいは誰かあはれとせむ。詞優しく、聲あはれに、歌はむこと、理の外にて、人情の感するものなり。」と言へるが、新學に至りて、更に「歌を業の如く思へるは、後の世のひが心得なり。歌は、たとひたはれがましき男女の相聞を聞きても、聞く人の心に深くあはれとは思はれて、自らのたはれ心は起らず。是ぞ唐國の面をよくして内きたなきとは異にして、うらうへなき皇朝の古への習はしなればなり」と言へり。これ後に、宣長に於いて、更に明瞭に徹底して論せら

歌風論

上代歌風の變遷

れし思想なり。宣長の人情主義に於いては、それは獨創の考なるが、眞淵も已に言ひ及びをること、注意せざるべからず。

第二は、彼が古歌を論じて、よくその歌風の時代的變遷と個人的特質とを明らかにせしことなり。こは彼の見識の卓抜なることを示すものに、歌論家としての彼を叙するにのぞみて、吾人の決して看過すること能はざる點なり。萬葉歌人の個人的歌風に就いては、古風小言、萬葉解通釋に已にあらはれ、萬葉考の序にいたりて、精しくなれり。上代歌風の大勢の變遷に至りては、考の序に、歌人の評論とともに載せたり。

彼は、上代の歌を以て、舒明頃に一進歩し、藤原朝に隆盛になり、奈良朝の初めに隆盛の氣運轉じて、やゝ平凡にむかひ、奈良朝中頃に荒らび、奈良朝末より平安初期にかけて優美に趣き、かくて前後五變せりと説けり。而して藤原朝より奈良朝にかけての變遷に就いては、更にこれを祝詞文の變遷と交渉せしめて論じ、「此文(祝詞)……飛鳥藤原に盛にして、奈良に漸く弱く、今の京の始つかたに至りては、淺近なり。是を以て、時世の移り行く

諸作家の
歌風

を知るに、萬葉にも藤原朝に人麿いで、古今に獨歩せり。赤人は奈良に屬せる人にて、人麿よりは弱なり。祝詞に合せて明らかなるべし。」と言へり。

個人、の歌風に就いては、人麿、憶良、赤人、旅人、家持をはじめ、古くは大津皇子、志貴皇子、厚見王、高市黑人、後には、三方沙彌、久米禪師、長意、吉麿、春日老田邊、福麿、笠金村、高橋虫麿、また婦人には、額田王、大伯皇女、石川郎女、譽謝女王、大伴坂上郎女等を取り出でて、それ／＼短評を施せり。素より短評なれど、いたく適切なり。考の文は、文飾あり、かつ長きをもて、古風小言、及び通釋に出でし評詞を舉げむ（但し、通釋の方や、委しければ、それによる。）

「一、長歌の體、上古は思ふ心のまゝに直ちに言ひ續けたるを、淨御原宮の頃より、諸體は出來たりとおぼしきなり。さて藤原宮なる人、麿ぬしに至りて、長歌一首の始終の巧み、短歌一首の始終を爲すが如し。但其句々多ければ、伏案、反覆、轉合、頓挫、始終の句法、古今に比類なし。其後、金村、憶良、虫麿のぬしたちの作は、質朴素雅なる多くして、却て人麿ぬしよりは古き體あり。古きにはあるべからねども、巧の少なければなるべし。家持、卿に至りては、や

や下りて、巧もなし。但、長歌に事を記するは、此卿の得たる所なり。赤人ぬしは、長歌をば得られぬと見えたれども、短歌におきては又並びなきなり。但、人麿の短歌は、悲壯にして古へにより、赤人の、飄逸にして後に屬せり。其才伯仲せりと雖も、時世の移る事、暫時に知るべきなり。其外、無名なるに秀歌多し。此外、旅人、卿の短歌は、諸兄公よりも秀歌多く、憶良、大夫などは、長歌は赤人よりも勝れたれども、させる高名も聞えず。然れば、此集をよく見て、自ら信すべし。名によりて物を貴とむは、學者のにくむ事なり。且、後世ひが耳に覺えそこなへるを忘れかねて、新意に正論あるをも用ゐざる人あり。先入のもの主となる習なり。よく克己てふ理に伏すべしと、春満もいへり。要するに、斯くの如き眞淵の思想は、古學、勃興時代の歌學思想の大成せしものなるが、その自然真情を重んじて、萬葉風を主張し、排技巧説を極端に唱へし點に於いて、在滿が祝歌説を説きて、新古今風を主張せしと、全然反對の立場に立てり。而して彼がその真情自然の説は、彼の後に續き出でし凡ての學者の説に、多かれ少なかれ影響せり。そは順次に説くとこ

ろによりて明らかならむ。

縣門諸家

眞淵の門下には、多くの學者輩出せり。彼等はいづれも師の學風の感化を受けて、古文献を研究せしが、各自その長せしところに志して、多趣多様なりき。随つて、師の説を承けて、専ら萬葉の自然を主張して、實際又その風を詠みしものあると共に、また師説以外に自己の學説を抱きしものありき。前者に屬するものには、荒木田久老、楫取魚彦、河津宇万伎、栗田土滿等あり。後者に屬するものには、本居宣長、加藤千蔭、村田春海等あり。師説の繼承にといまらずして、自己の説を有せしものは、後の三人なり。殊に宣長の説にいたりては、彼が獨創の見解として稱すべきものとす。

荒木田久老

宣長及び千蔭、春海の説に入りて述ぶるに先だち、荒木田久老文化元年及び眞淵の學統をひける二三子について一言せむとす。二四六年

久老は、萬葉考、槻落葉、日本紀歌解等の著者にして、又師の著書及び風土

一首の風致

記の出版に功あり。歌論としては、まとまれる著なしといへども、その隨筆信濃漫録の中に、「歌の風致の論」詞に近古なき論として記せる文によれば、歌に重んずべきは、一首の風致、詞の調べにして、一語一語の理にあらぬこと、故にまた、古體といひ、近世風といふも、調風致にありて、個々の語にあらず、古語を用ゐるも、一首の風致古からざれば、歌古風とならず、後世の語を古風の歌に用ゐる場合も同じく、要するに、歌に重んずべきは全體の風致にあることを説けり。彼はこの説より、宣長が新古今集の一二の歌に對する批評を駁せり。

海量

眞淵に歌を學び、諸國を行脚歴遊すること二回、旅中の作ひとよ花一卷を著はし、富士山、琵琶湖、那智瀧を日本三絶と稱へし、近江の奇僧海量文中叙が、長崎にてゑるし、

徳種

徳種 一種 一卷 寛政六年成

あり。こは、詠歌に古學の必要なるよし、歌の學ぶべきものなるよしを

いひ、ついで古今集序に及び、人麿を赤人とならべたることの失當なるよしより、六歌仙の評詞の當らぬことをいひ、貫之が各歌人に加へし難に對して、多く反證をあげ、又物名長歌の部等を心ゆかずといへり。

中臣由伎
麻呂
六義考

次に、河津宇万伎の門なる中臣由伎麻呂に、

むつのことわりのかうがへ六義考 一卷 天明二年成

あり。こは六義の名目のもとに、自己の見解よりして、和歌を分類せるもの。その分類は、歌のまなの三つのふり、三つのすがた、即ち大別して風と體とす。

- 一、風——風雅頌
- 二、體——比賦興

而してその一つづつにつきて説明して曰く、

風は、さいばら、國ふり、ひなぶりの意にて、古事記の夷振志津歌、志良宜歌、日本紀の夷曲、萬葉の國風、東歌、古今のそへ歌、また東歌等これに屬す。「こ

雅

頌

賦

比

はすぐなるふりにて、言葉も國々の方言を用ゐて、世のよしあし、官のよしあし、身にとりては思ふことを、國民ののべ歌ふふりなり。」

雅、みやぶり、うたげ歌、豊のあかり、久米歌などの意。古事記の天語歌、又宇伎歌、日本紀の舉歌、神語歌、萬葉の宮風、又、都風、古今のかぞへ歌、等をふくむ。「心詞清らによめるふりにて、王侯官人のよめる歌なり。民を教へ、下を靡かす歌ぶりなり。饗宴に専らうたふなり。神樂にも備ふるなり。王侯士大夫のみならず、民が詠める歌なりとも、皆其風雅びたるは、雅の歌なり。」

頌、古事記の本伎歌、日本紀の壽歌、古今のいはひ歌等、これなり。即ち、神を祝ふ歌にて、國史には傳はるもの少し。

賦、萬葉に正述心緒といひ、古今にたゞこと歌といふ、これなり。直言歌(すぐうた、又、ひらうた)これにして、「人情を現はしていふ」にて、「思ふこと、見るもの、聞くもの、すぐに言ひ出だせるすがたなり。」

比、萬葉に、寄物喩思、又、譬喩といひ、古今にたとへ歌といふ、これなり。曲言歌(かくし歌、又、たくらべ歌)と稱すべし。こは、「人情をかくしていふ」にて、

興

「兩様にきこゆる歌」なり。
興、萬葉に、寄物陳思、又、寄何といひ、古今になすらへ歌といふ、これなり。
工言歌(よせうた、又、たくみうた)の意にて、「人情を寄せていふ、賦比相半したる」もの、「序歌の體」もこれなり。

これ實に、彼が獨創の説なるが、よく古來の分類をとりいれて、新解釋を興へたる點、巧みと稱すべきなり。彼にまた、國史、古歌集、一卷天明二年の編あり。その序に、紀記の歌につきて、その作者歌詞等、すべて所傳のまゝに信すべからず、ただおほらかに、萬葉以前の頃の歌とすべきよしを述べたり。凡そ、紀記の歌の個々に就きて疑ひしは、度會常彰が、延享五年に著し、日本國風、深澤薫が、安永六年に著し、二紀國詩集註を始めて、諸書に見え、眞淵も、答龍公美書の中に疑を存したれど、この書にいたりて、紀記の歌全體について疑を存したり。

中臣由伎磨は、經歷詳かならず。吾人は、その所説、文體より見て、上田秋成と推定す。(春雨物語に海賊の言に托して、貫之を罵りし戲文中に、「歌に六義

國史古歌集

ありとの説を破して、「三義三體と言は、許すべし」といへるは、上記の説と同じく、また、狂人評の中に、神代歌に關する同様の疑を存せり。秋成文化六年二の痢辯談、膽大小心錄には、當時の歌人に對する罵倒的批評あり。彼の奇抜なる見識、銳利なる筆鋒を以て、歌論を物しなば、見るべきものありたらむを、惜しむべし。なほ萬葉に關する著に、金砂、及び萬葉集會説あり。金砂は、集中の和歌を抄出して、評釋せるもの、語釋に拘まで、専ら歌の妙味を説かむとせしは、さすがに面白し。韻語通の序に、歌集の目あれど、そは未だ、成らざりしものいれど。

眞淵の學統をうけて、新撰字鏡數本をつとへ、そが考異を物せし篤學の士、丘、仰、俊、平、に、

百千鳥 一卷 享和四年成

の著あり。うらゝかなる春の日に、班鳩が歌の事問ひしに、鶯が答へ、うそ鳥の詞くはへたるを、また鶯の答ふるなど、小鳥の囀りかはすに托して、歌論を述べしもの。趣向面白く、筆致雅びかなり。その思想は、自然真情

丘仰俊平
百千鳥

を貴びて、眞淵の流を汲みたり。其うちに、凡て古への歌は、天地のなしのまゝなる心の底ひを言ひ出でつれば、自らなす四つの時あるが如し。……その折に觸れつゝ、我が真心の眞なほなるを、飾らふ隈なく歌ひ出づるぞ、大御國の手ぶりなりける。されば古今集の序に、やまと歌は心を種として云々とは言はれたり。目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせと言へること、はよくせずば思ひまがひぬべし。目に見えぬ鬼神も、歌のまことなるにめでてあはれと思ふにこそあらめ。歌よく詠みて鬼神をもあはれと思はせむと爲さば、早く眞なほの心に、違ひなむ。又、其折の情に思ひ餘りぬるを、正しき詞もて詠み連ぬるをこそ、詞正しく情は新たなりとはいはれぬ。その詠み出づる歌は、たとひ古へにたぐひし歌ありとも、そは同情同感の古へにたぐひしにこそあらめ。千首が萬首にても詠み出づる歌悉くわが歌なるべし。などいへり。以て察すべし。又、和歌が萬葉集に於いて自然の域より修辭的に一步進みしをはじめとして、古今集、新古今集、頓阿時代と、歌風の變遷せることを述べ、又、顯昭の註、宗武の歌體約言は、もいひ及べり。

第四章 本居宣長

本居宣長

本居宣長 享和元年二四 六一 歿七二 の學問の精神は、古道にあり。此點に於いて、彼は、眞淵の學問を繼承して、それを大成せしものなり。まかも彼は、歌學に於いては、獨創なりき。眞淵の歌學が、古道に從屬したりしに異なりて、彼には、獨立せる歌學説ありき。これ歌學者として——よしや實際の作歌に於いては、素より遠く及ばざりしかども——彼の師眞淵に比して偉大なる點なり。

かるが故に、これを宣長が學問の經歷について見るに、彼ははじめ歌學より入りて後、古道に及べるが、彼自らの歌學説は、その眞淵に入門し、師事する以前に於いて、既に大成せられたり。蓋し彼は、寛延元年十九歳にしてはじめて歌を詠じ、寶曆六七年の交、二十七八歳にして契沖の古歌の註釋、玉かつまに、百人一首改觀抄、古今餘材抄、勢語臆斷等の名を擧ぐを詠みて、志を立て、(彼が京都にて儒學を學びし堀景山 寶曆七年二四 一七 歿七〇 は、今非似閑の門

彼の歌學
の由來

人樋口宗武と友とし善く、契沖が元祿二年に校讎せし萬葉集を寫しもたりき。宣長はそを寫しとりて、深く契沖を崇備し、つひに古學の研究に入りしなり。よく古學の新精神を以て、古今集、源氏物語等の中世文學を研究し、その間に自己の學說を作りなし、ものなり。而してその結果として成りしは、寶曆十三年眞淵入門の年、三十四歳にして著し、石上私淑言、紫文要領、古今選等なり。彼の歌學說は、こゝに大成せられつ。その後、彼の研究は古道に集注し、眞淵に指導せられ啓發せられて、その影響を受けたりしが、本來の歌學說に於いては、その後、別に甚しき變化なかりき。

彼の歌學書

宣長が歌に關する著は、註釋類を籠むれば六七種あれど、その歌學に關する說は、

石上私淑言 二卷

寶曆十三年(三十四歳)成

國歌八論同斥非評

明和五年(三十九歳)成

を主として、その隨筆、

うひ山ぶみ 一卷

寛政十年(六十九歳)成

玉勝間 十四卷

寛政六年文化九年刊

に見ゆ。八論に關するものに就いては、已に述べたり。彼の歌學說の本來の主張は、石上私淑言に就いて見るべく、初山踏に論せしところによりて、以て彼が眞淵派を初め、當時の歌人の歌學に對する批評と、その間に於ける彼の立場とを知るを得。而して、その兩者の間に、彼の學說そのものにては無く、彼の態度に多少の差、認めらる。まづ石上私淑言によりて、彼の說を論ずべし。

石上私淑言

石上私淑言に記せるところを見るに、その論、精到該博、或はその所々に、語源字義より考證等にも論じ及べるが、それらは省きて、純粹に歌の理論を説きし點に就いて見るに、凡そ歌とは如何なるものをいふぞ。歌は何時より始まりしか。歌はいかなる理によりて出でくるぞ。詩と歌との比較、歌の特質。歌と戀愛。との五點を論じたり。

歌とは何ぞ

一、歌とは如何なるものを云ふぞ。彼曰く、詞の程よくと、のひ、綾ありて歌はるゝものは、皆歌なり。三十一字の歌のたぐひを始めとして、神樂

歌、催馬樂、連歌、今様、風俗、平家物語、猿樂のうたひ物、今の世の狂歌、俳諧、小歌、淨瑠璃、童へのうたふはやり歌、木挽歌の類まで、凡て以上の條件をみたすものは歌なり。あへて、古今雅俗長短の別は問ふべきにあらず。されどこゝに注意すべきは、歌は自然の音調とは異なることなり。水の響風の音は、いかに調子と、のひ居たりとも、歌にはあらず。歌は必ず人の情に基づかざるべからざることなり。然らば、詞の程よくと、のひて綾あるとは、いかなる事ぞといふに、詞の數程よくと、のひて、滯らず、面白く聞ゆることなり。大むね、五言七言にと、のへるが、古今雅俗にわたりて程よきなり。

二、歌は歴史、上何時頃より始まりしぞ。こは八論以來問題となりし歌源論の問題なり。彼は二尊の唱和の、五言二句にと、のひて、尋常の詞と異なりをを以て、歌の端となし、慥かに起源とすべきは、五七五七七、三十一言の形式をそなへし八雲立つの歌を以て然りとせり。而してその後、この三十一言の形式の有力になり來りしは、その體の美なるが故に、自然

歌の起源

にまかなり來りしなり。而して連歌の起源に就いては、日本武尊と乘燭者との唱和に歸する普通の説を斥けて、神武記の、天皇と大久米命との唱和を擧げたり。

歌の理

物のあはれ

三、歌はいかなる理より出でくるぞ。彼は、歌の人世に生じくる理を説きて、人が物のあはれを解することに基づくとなす。物のあはれを知るとは、如何なることぞといふに、そは、人の情が事物に觸れて動きて、或は悲しとも、喜ばしとも、樂しとも、面白しとも、恐ろしとも、戀しとも、感ずるにいたる、その心の活らきをいふ。まか感じ動くは、やがて物のあはれを知るが故なり。人の心に物のあはれを知る活らきありて、はじめてまか感じ動くなり。嬉しかるべきことにあひて、我々は嬉しと思ふ。そはその嬉しかるべきことの心をわきまへ知る故に、嬉しきなり。この嬉しかるべきことの心をわきまへ知ることが、やがて物のあはれを知ることなり。この物のあはれを知る人情の本質より、歌は生ずるなり。而してこの物のあはれを知ることとは、深淺強弱の差こそあれ、人性の普通なり。而して

物のあはれを知るやがて、それは感ずることにて、そこに心動きて歌となるなり。あはれといへば、一般に悲哀の情にのみ對して言へども、それは末のことにて、吾人の情を動かすところのものは、凡てあはれなるものなり。あはれといふ事を情の中の一つにして言ふは、七情中、悲哀の情が最も人心を動かすこと大なるが故に、自然にまかなり來りしにて、なほ花といひて、櫻をいふが如し。而してこの物のあはれを知る人は、即ち心ある人にて、物のあはれを知らぬ人は心なき人なり。(なほこの點に就きては、同じく寶曆十三年に成りし紫文要領に詳しく論じ、中世物語の根本思想は、この物のあはれを知ること存じ、心あると心なきとは、やがて中世物語に於ける人物の評價の標準なりしことを述べたるが、大意は素より私淑言に逃ぶるところと異ならず。)

さらば進んで、人の心が物のあはれに堪へぬ時には、如何なる故に歌は出でくるぞと云ふに、こはおのづからその感情が言葉にいひ出でらるゝなり。即ち、覺えず自然に歌によみ出でらるるなり。まかもそれは普通の

言葉にてのやまれず、自ら詞にあやをなし、聲を長くして、歌ひ出でらるゝなり。素より吾人が歌を詠む時に、まかく自然に洩れ出づる場合のみにては無く、詠まむと思ひて詠み出づる場合多けれど、そもそも物のあはれに堪へ兼ねて、そを言ひ出でてはるけむとするよりなり。詞にいはず、之を歌にいふは、歌にいひ出でてはじめて思をはるくることを得るよりなり。否、更にあはれの深き時は、自ら詠み出でしのみにて、なほ心ゆかず、あきたらぬより、人に聞かせ、人も同じくあはれと思はせて慰まむとす。その爲に、人をしてあはれと感せしめむ爲に、その言葉をもとゝのへ、又一段綾あらしむるなり。これ歌の本義にて、人性の自然なり。彼のよくも悪しくも思ふまゝを言ふが歌にて、人の聞く所にかゝはるべからずと言ふ如きは、未だ歌の本義を知らざる言なり。

四、詩と歌との比較、歌の特質。詩は支那の歌にて、歌は我が國の詩とも、に物のあはれより生じ出づることにて、於いて、何らの差なければ、詩は詩經の昔は然らず、後世に赴くに從ひて、その本來の面目を失ひ、人情のまこと

詩歌の比較
歌の特質

を矯めし、形式的なる、はた教訓的なる、いかにも理の深きものになれり。これに對すれば、歌はいかにも女々しき、物はかなげなる、婦女子の情を歌ひて、痴なるが如く思はるれど、此女々しげなるところこそ、中々に詩歌のまことの性質なれ。元來、人情とは、女々しげに、痴なるものなり。それを飾らずに、自らに歌ひ出づるこそ歌なれ。さるに、詩のことごとく、しく表面を飾れるは、偽なり。これを思へば、歌の女々しげなるところは、むしろ歌の特質として、擧ぐべきところなり。而して、詩が時世とともに變遷して、詩歌本來の性質を失ひ來れるに反して、歌は神世の昔より今に至るまで、その姿こそかはれ、心は直くまことなる人情をもととして、詩の流行の爲にも影響せられず、その本來の特質を備へたり。

戀愛と歌

五、戀愛と歌。戀愛の歌の歌に多く、また戀愛を詠めるものにすぐれし歌多きも、實にこの歌本來の性質に基づくなり。凡そ人性に、欲と情とあり。欲も情の一種なれど、自ら別あり。欲とは、榮譽を願ひ財寶を求むる心などにて、實際上の欲望なり。之に對して、必ずしも實際上の欲求をと

もなはず、たゞ心に喜怒哀樂を感ずるを情といふ。物のあはれを感ずるとは、情の方にて、歌は、こゝより生ず。欲よりは、生せず。而して人の情の最も大に切なるものは何ぞといふに、戀愛の情なり。戀愛の情は、人情の自然にて、かつ最も物あはれなるものなり。人情に基づき、物のあはれを生命とする歌が、戀愛に就いて多く歌はるゝは自然のことなり。詩にその少きは、これ例の虚飾なり。偽善なり。而してその戀愛の歌のうちにも、道德の教に背けるものゝ多きも事實なるが、元來歌そのものが、さる教の道とは、全然無關係にて、たゞむねとするところは、物のあはれにあり。善惡を辨まへ、心にえり整ふることにはあらず。まかも、自然の情を發露して、吟詠する事は、却りて吾人の心を整ふるすべともなりて、自ら、道德の上、に功あることもあれども、そはもとより歌の本意にはあらず。歌の境地は、道德より獨立して存せるなり。

以上は私淑言に見えし、宣長の歌學說なるが、終りに、上記の紫文要領によりて補ひおくべき點あり。

紫文要領(玉の小櫛の原本)に、歌人此物語源氏を見る心ばへの事の一章あり。そのうちに論ずるところは、歌道の本意を知らむとならば、源氏物語をよく見て、其味ひを悟るべきことを説きて、彼の物のあはれの思想を反覆ときしものなるが、かくて彼は、この物語によりて、最もよく寫されし中古の人情風儀の、最もよく物のあはれの趣にかなへることを言ひ、當時の人情風儀を十分に理解して、當時の大宮人の心となりて、當時の風にならひて歌を詠むべきこと、そは後代の人々が、歌學びの主意とすべき點なりと、切りに説きをり。これその復古といふ點に於いては、眞淵の上世主義と、その傾向を同じうせりといひ得べし。(この説は、後に玉の小櫛の第二卷の末節にも、簡約して論ぜられたり)

宣長の歌學説を考ふるに、その俚歌童謠の類まで凡て歌なりと喝破せる、物のあはれを説きて、歌を道德より獨立せしめて説きし、これらの見識の精到深遠なること、時流を卓絶せり。殊にその物のあはれの思想は、大に注意すべきものなるが、この思想は、前にも言ひ及びし如く、彼の獨創の

點たり。然らば、彼は如何にしてこれを得來りしかといふに、そは古學勃興の自由研究の精神を以て、深く中世文學を研究し、中世文學の眞精神を理解して、以て看取し得しと云ふなりとす。眞淵が上代文献より、眞情自然といふ思想を得來りしと、その徑路は同じ。而して、眞情といひ自然といひ、また物のあはれといふ、所詮は自然の人情といふことなり。上古に目をつけしと、中世に目をつけしとの差こそあれ、根本に於いては相通するところあり。眞淵と宣長と、各自その説を異にしつゝ、また自ら相近づき居る點あり。眞淵が再奉答中に、わりなき願といふ詞を用ゐて、人情主義を説きたるは、おのづから宣長の物のあはれの思想に似通へり。されど素より眞情自然の思想と、物のあはれの思想とは、一は單純に、一は複雑に、少なからぬ差あり。眞淵が自然素朴なる上代の歌を理想とせしに對して、宣長が始めは三代集の優雅より、進んで複雑幽玄なる新古今の歌を理想とせしは、自然の理なり。宣長の理想とする歌風は、實に物のあはれの極に達せし新古今の歌風なりしなり。

眞淵の影響

斯くの如きが、宣長の歌學の主張なるが、その後彼が専ら古學の研究に志して、漸う眞淵の思想の影響感化を受くるにのそんで、彼の歌學説は、なほ本來の主張に立ちつゝも、また一方に眞淵の思想をも取り入れ、又それと同時に、眞淵の説に對して、批評的態度に出づるに至れり。この間の消息は、初山踏に見ゆ。即ちそれを次に述ぶべし。

初山踏

彼は眞淵の説の影響を受けて、古學の爲に和歌を研究すべきを言ひ、古歌を讀むとともに、自ら古風の歌を詠むべしと言へり。而して、この古道の爲に古歌を作ること、却つて學者の主なることと考ふるやうに傾き來れり。まかも道の爲に學ぶとは別に、歌そのものゝ上につきては、眞淵一派の古風家の弊に反對して、あくまで新古今風を理想とする論を主張せり。

彼曰く、古風家は、後世風の歌を實情に出せずして、題を設けて詠み、趣向に詞にたくむところあるものにて、これ實情に出せずして、僞のわざなり、即ち歌の本意にそむけるものとして、非難すれども、これ未だ精到の見と

作りごとと物のあはれ

云ふべからず。作爲といひ、技巧といふことは、あはれと感せしむることを目的とする歌にとりて、必然の性質なり。萬葉時代の歌とても、素より作者が藝術的工夫の結果にして、決して實情そのまゝにはあらず。まして後世になりて、藝術的に發達し行くにつれては、所謂實情を詠める歌は殆ど無く、大方作りごとになれり。作りごとといへども、いづれも人の心にまことに感ずるあはれをもとせざる故に、決して僞にはあらず。この點に於いては、古今を通じて、決して異ならず。かくの如き自然の發達にそむきて、後世にして、まひて萬葉風を詠むこそむしる作りごとなれ。古風の摸倣にして、少しも自己の眞情にはあらず。而して後世風の歌に就いて見るに、その始めをなせるものは古今集にて、そはまた實に後世風の歌の模範たるべきものなり。その後、多少の盛衰はあれど、最も卓絶して後世風の極致を示すものは、新古今風なり。當時は名人輩出して、意に詞に、えもいはず面白く、心深くめでたき風をなして、前後無比の一歌風をなせり。古風家の人々が、此集を殊に悪しくいふは、非常なる僻見にて、風雅

古風近風

の情を解せざるものなり。凡そ古人が風雅の情を知ることとは、人として、殊に學問するもの、深く心がけざるべからざる所なり。その爲には、後世風、殊に新古今風の歌をよみて、よくその趣を解せざるべからずと。斯くの如き意見を有せし彼に於いては、勢ひ詠歌は、二様の目的をもて考へられ、また實際詠せられぬ。即ち一つは、古道の爲につくるものにて、その目的よりしては彼は古風を詠じ、二つには、歌としてつくるにて、その方よりは、彼は新古今風、即ち近風を詠むにいたり、彼の門下に於いても、古體近體として、詠み試みらるゝに至れり。

宣長の學統に出でし諸學者は、歌學に於いても宣長の説を繼承し、その以上に出でしもの、殆ど無かりき。

本居春庭

宣長の子春庭文政十一年二には、道廼佐喜草及び詞の通路の中に、その説見えたれども、別に創見の記すべきなし。道廼佐喜草は、古道を説きて、

唐國の政道風俗を非難せしものなるが、歌に就きては、その人情自然の發露なるをいひ、物のあはれを述べ、戀歌の本義に論じ及べる、石上私淑言の説に同じ。詞の通路は、元來語學書なるが、その下卷に、和歌に關せる一節あれど、初學の爲に記せる作歌の注意にして、特に論すべきものなし。

本居大平

大平天保四年二四には、後章論すべき村田春海の書に答へし書あり。

そは春海の論に對して、かれこれ異見を述べしものにして、別に積極的の説なし。蓋し春海が、眞淵の古へぶりの意を、廣く花山一條頃までに解せると見を異にし、萬葉の古風こそ、眞淵が理想なれとなし、ものなり。まかも自らの詠にいたりては、「大平數ならねど、此まことの古風に心よせ侍りて、偏に此様にこそと思ひよらぬにしもあらねど、吾師の翁の古風は古風と物しながら、又後の世の様なるをも常に廣く物せらるゝも、深く考へ渡されたる上に、あるやうあるべしと、猶きたなく過すになむ。」といへり。之によるも、彼に別に一己の見解の定まりたるものなきを知るべし。

本居内遠

而して、大平また古學派の思想を承けて、和歌を古道の方便と考ふるに傾きしが、大平の家學をうけし内遠一安政二年二五にいたりて、いよくその傾向に進みたり。内遠が古學本教大意に、歌は神世より真情を述ぶるものに候へば、之を知れば、まの當り上古の人の語のまゝに聞くが如く、心の底まで察せらるれば、正史にも勝れる事あり。その意を熟知するには、自らも詠み試みざれば疎し。」といへるは、此思想を明らかに述べしもの。かくの如きは、已に述べし如く、真淵が歌學の根本にして、真淵が學問の正系を承けし此派の歌學の主張として當然なるが、真淵はさすがに歌人なる故に、なほその説よく歌の精神を解せるものあり。また宣長は別に獨創の思想あり。然るにその末に至りては、その説に於いても、また實際に於いても、和歌は全然古道の從屬物となれり。而してこの傾向の最も極端になれるものを、後章述ぶべき平田篤胤が歌學とす。

横井千秋

宣長の門弟にして、古事記傳の出版を助けし横井千秋享和元年二四六一に

齋藤彦麿

詩歌論一卷あり。宣長が私淑言中の詩歌比較論と少しも異ならず。齋藤彦麿一安政六年二五に、詠歌大概辨一卷あり。當時堂上歌學者の僻説に反對して、近世歌學の立場より、定家が説の眞意を明らかにせむとしたるもの、師承秘傳の思想の如きは、全然定家の本意にあらず、萬葉三代集の古歌を師として自由に詠むべしといふが定家の主旨なりとせり。

新古今研究家

宣長が新古今の歌風を重んせし思想は、その學統に、新古今研究家を出ださしめたり。尾張の家づとの著者石原正明一文政四年二四、新古今もろかづらの撰者市岡猛彦一文政十年二四、科野の家づと一名建久の撰者千葉葛野一安政二年二五等、これなり。正明に就いては、次に説くべし。猛彦のは、初學の爲に秀逸の作二百餘首を選出せるもの、緒言に尾張の家づとを未だしき論多しといへり。葛野は、はじめ鈴屋門の植松有信、同茂岳に學び、後、春庭に名簿をおくれり。この百首のはじめに、いさゝか新古今の歌風に就いて論じ、その風致をたへたり。その一節に、「此集の歌は、一つの風

にして、理を先にして論すべからず。一首の意とほりかね、無理なるさまに覺ゆるもあれど、多くは詞の調を第一とせられたれば、まづ一首の風致をもて善悪を論すべし」といひて、久老の説に賛せるあり。又春海の歌論に觸れて、之を難せるふしあり。もろかづらの選びざまをも難じいへり。

石原正明

以上の新古今研究家中、最も大なるものを石原正明とす。彼は、始め宣長の門に入り、後、江戸に出でて、かの群書類従を編輯して、國學上、隨つて歌學の上にもまた不朽の功績を擧げたる堀保己一 文政五年二四に從ひ、その事業にたづさはりたるが、その歌學思想は、根本に於いては宣長より承けたり。

年々隨筆

彼はその年々隨筆第五文化元に、古今集序のやまと歌は人の心を云々の一節につきて言へる所に、近頃の學者に、これを心に浮びくることを其まゝに言ひ出づれば、やがて歌なりと心得誤る人多しとて、蘆庵一派のたいこと、歌の説の缺點を指摘し、歌に修辭的技巧の必要なるを云へり。

尾張の家づ

而して、彼が斯かる説をなし、根本は、即ち同じく年々隨筆第六に論せる、和歌の第一義は、餘情と餘韵とにあり、との思想にあり。而して彼が宣長と同じく、新古今の歌風を推重せしことも、この思想に基づく。彼の尾張の家づとは、宣長の美濃の家づとに對して作れりしものなるが、その序に、新古今の歌風に就きて記せる一節は、よく新古今歌風の意義と特質とを明らかにせり。其うちに曰く、

新古今歌
風論

「新古今集の頃の歌は、一首の口調をめでたく整ふる事を本意として、詞の上に心を残して、餘韵を深くこめ、一首の續けざま幽玄にして、あらはに淺まなる所なく、情を深うし、語勢をいたはり、たけ高くも、まめやかに、強くも、やはらかに、も、百般の姿あり。たゞまほくくたくとするを嫌ひて、詩人の所謂、雄偉、流暢、豪壯、新奇といふ調を、常には思ひためり。かの新奇なる餘りに、こまやかに理を言は、少しいかにぞやと思はるゝふしなきにしもあらねど、それはた瑕ありとも、玉とならむ事を願ひて、全き瓦を思はざりしものなり。」

宣長を評す

と。彼が新古今歌風の技巧に過ぎたりとして、比較的斥けられし當時に於いて、斯くの如き見解をいただきしことの、又師宣長の學問に基づけることは、言ふまでもなしといへども、彼は宣長の新古今説については、素よりこれを推重すると共に、一方にはその缺點を認めて難じたり。彼は、同序中に、まづ新古今集に關する古來の註釋中、宣長の著の拔群なるをいひしが、それとともに、「むねとたてられたる論に、然らずと思はるゝ所ありて、あかぬ事に思ふよしを言ひ、更に進んで、本居先生は古學者にて、萬葉以下の書に熟して、めでたき才覺なれば、拔群の論もあるべきを、彼のかけ合などいふことに拘みて、此集をしも論せられたることなれば、盪の水もて四海の潮を論するが如く、いたく堺を隔て、氣概くだりたり。上下のかけ合縁の詞の配當を規矩にしたるは、爲家卿の創立なれど、なほ爲兼卿に争はむと、爲世卿の執したる事にて、此集の縦横磊落なるに日を同じうしていふべき事にあらず。」と云へり。彼が宣長の歌論そのものゝ根本思想を逸したるものゝ如きは、憾むべきも、新古今集に就いてのこの見識とこの用

彼の學問の精神

意とは、卓見として推重すべきものなり。彼がこの縁の詞の論は、年々隨筆第六のうちにも出でたり。

なほ彼は、その學問全體の精神として、は、時勢の沿革、古今の制度典章等の大局を眼目として、「久方の天、あらがねの地は、暫らく枕詞として、古歌とくにも、今よみ出づるにも、さして事かくことも無ければ、猶ありなむ。萬葉古今のかたき歌ども、知られずば知らずをあらまし。古き歌の十首二十首解き得ざらんからに、何の妨かはあらむ。」など説けるが、彼はこの同じ見地よりして古歌の題によりて詠する場合には、よく當時の風俗世相を考へて詠むべきよしを説けり。また一個の見識とすべし。

第五章 加藤枝直同千蔭及び村田春海

本居宣長及びその一派は、學者にして歌人にはあらざりき。之に反して、同じく縣門の高足として、歌人として門戸を江戸に樹て、相並んでその歌風に一世を風靡せしめしものを、加藤千蔭及び村田春海とす。千蔭春海の二人は、その詠歌に於いて相似たると共に、歌學說に於いても、殆ど同じ。たゞ千蔭は粗にして、春海は精しきの別あるのみ。而してこの兩者の說を述ぶるに先だちて、論せざるべからざるは、千蔭の父にして、眞淵の友人また門下なる加藤枝直なり。

千蔭と春海

加藤枝直

加藤枝直天明五年二四は、伊勢に生れ、若年江戸に出で、後、町奉行大岡越前守に隸して、町與力たりし人なり。七八歳の頃より和歌を嗜み、彼自ら記ししものによるに、彼が父また和歌を好みりき。歌書抄物などを讀みふけりぬ。元文三年、眞淵江戸に出でて、枝直の管せる地所の内に住みし故を

眞淵と彼

以て、交り深く、就いて古學を學びしが、枝直はその年齢に於いても眞淵に長じ、又、幕吏として相應に時めきたりしかば、眞淵に對しては、門弟にして友人、また幾分保護者たる地位にありき。かつ彼は、和歌に於いても既に一家をなしむたるもの、如し。眞淵が龍公美に答ふる書中にいへり。随つて、彼の歌學を記し、著を見るに、そは自ら一家の見ありて、必ずしも眞淵の說の繼承と見がたきものあり。

彼の著書

彼の歌學の著には、

歌の姿古へ今を論らふ詞 一卷

子に與ふる文 一卷

答俊仍松宮書 一卷

の三あり。これらによりて見るに、上古中世の和歌に對する彼が學識の深かりしこと、伺はるゝなるが、彼の說として注意すべきものを擧ぐれば、第一に、時勢と云ふ點に着目して和歌史を概觀せしこと。第二に、その立場よりして古今集の歌風を國風の純粹として特に重んぜしこと、これ

彼の和歌史

彼の和歌史觀は、上古の歌が、天武帝の朝にいたりて、人麿いでて萬葉風となり、萬葉の終なる天平寶字三年より、延喜元年に至る百四十五年間に、變遷して古今集の撰となり、その後三百四十年間にまた變じて、土御門天皇元久元年新古今の撰によりて、他の時代を劃したりとなす。大體の思想に於いては、普通の説なりといへども、更にその個々に就いて、彼の見解あらはる。

人麿以前

神代歌存疑

一つには、彼は、人麿以前に於いて、萬葉集を始め、紀記に載するところに就きて論じ、應神天皇時代の作、一層高古素朴の姿ありて、人麿以後のものとのけちめあるを説き、神武時代のものも、姿に於いて多く異ならずとなし、溯つて神代の作と傳ふるものに至りては、歌體上より寧ろ神武もしくは應神の時代のものに比して、技巧ありて今めかしきことを注意し、暗に神代歌に對して疑を挿みたり。二つには、人麿赤人相ついで出でし藤原奈良の朝を論じて、當時に於ける漢學の流行を述べ、未だ多く注意せられ

萬葉に於ける漢文學の影響

佛教の影響

萬葉古今の修辭上の比較

ざりし萬葉の和歌に於ける漢文學の影響を述べ、人麿以下の歌人も、漢家の字を學び、詩賦のたくみに倣ひて作歌せしものといへり。即ち、彼によれば、藤原奈良朝の和歌は、詩賦の流行に促がされ、詩賦の影響をうけて作られしなり。即ち、萬葉を以て、寧ろ後代技巧の歌の始めと解せしものなり。彼曰く、「藤原の都に人麿大人、平城の都に赤人ぬし出でられし頃より、人々の歌や、たくみになりて、あだし言葉をとりよろひをかしくもてあそびごとのやうにぞ成りにける。こは、古へに勝れりとやいはむ。劣れりとやせむ。」こは、眞淵が萬葉集の解釋を補ふものといふべし。三つには、藤原奈良朝より古今集にいたる歌風の變遷につきて、漢文學流行して、和歌の一度中絶したる間に、佛法興隆し、人心古代の雄健の風うせて、漸う優美のみになりゆきし時勢の變遷に原因すとして論せり。(縣居書簡に收めたる、眞淵が枝直に贈れる書牋をも參照すべし。)而して、之とともに、彼はこの兩時代の和歌を比較して、萬葉には結句四三ととめたるが多く、古今には三四ととめたるが多しなど、二三の修辭上の差別を注意せり。四つには、千

千載新古今

古今集初期
的歌風が理想
的風な

載新古今の歌に及び、源平闘争より鎌倉初期兵亂の時勢に選ばれしそれらの歌集にして、一も慨世憂國の至情を歌へるものなきを難じ、當時の巧綴の歌風を亡國の調なりとして斥けたり。而して五つには、その和歌史上に、よりにて模範とすべき理想的歌風を、古今集殊にその初期の歌風にありとせり。彼曰く、「されば、人麿赤人の出で給ひし藤原奈良の御代には、新らしき國ぶりにひかれて、おのづから唐うたの調べに通へることなきにしもあらず。今にして御代御代の撰集いづれをとらむとならば、古今集に勝れるはあるべからず。歌の姿古今を論らふ詞また、歌作る事の上古にもこえ、末代にも有がたかりしは、弘仁の後、延長のあへなるべし。予に與と。ふる文と。而して彼が斯くの如き論をなし、所以は、一には古今集を以て、宇多醍醐の治平の手ぶりを傳へしものとして、貴びしに基づけるなり。彼曰く、「いかにとならば、今の大御代にもなぞらふべきは、宇多醍醐の御代なるべし。されば其御代の手ぶり、事わざ、自らこの御代に通ひにたればにや、大御代の歌よむほどの人、知るも知らぬも、古今集の歌を上なきものにして、もてかしづかぬ

加藤千陰

眞淵及び枝直の影響

やはある。これ大御代の調にかなへる所ありて、然らしむるなりけり。されば歌作らむと思は、ぬかづきて古今集を見るべきなり。歌の姿古今を論らふ詞彼が説中注意すべきは、これらの點とす。(なほ彼の隨筆、備忘雜記には、和歌に關する説多く、その萬葉古今兩時代に於いて、同語の義を異にしたるものを記せるなど、彼が研究の淺からざるを示せり。)彼は眞淵に學び、また交はりて、萬葉及び冠辭等に就いても研究せしところ少なからざりしかど、備忘雜記、南山雜記なほ歌風に於いては、寧ろ古今風を理想として、彼自ら詠み出でし歌も、古今風なりしこと、これ特に注意すべき點にして、縣門の二高足として以下述べむとする枝直の子千陰、また千陰が親友にして、枝直の家集東歌にも序を記し、春海の歌風は、實に彼に系統をひくものとす。

加藤千陰 文化五年二四 六八 歿七四 は、延享元年十歳にして縣門に入り、眞淵が世を去るに至るまで二十六年間を親しく師事し、又その父の教をも受けて、この兩者の影響を蒙りたり。されば彼が大平に答へし消息に記して、「齡く

だりて、人にもとはれ、月花のすさみ疎からぬは、父と大人とのみたまのふゆぞと、筑波嶺の二並にこそ仰ぎ侍れ」といへり。彼、父の跡を襲ひて、長く町與力の職にありしが、仕を辭して後、いよく詠歌に心を専らにせしをもて、名聲益々揚りぬ。彼はその學に於いては、春海の邃きに及ばざりしかど、その性春海に比して温厚に、かつその身幕吏たりしをもて、世に重んぜられき。彼の萬葉集略解の著は、もとより創見なく、又宣長春海等に負ふ所少なからず、學問上さばかり重んずべきものならねど、彼が簡易なるこの註釋書によりて、萬葉集を世に流布せしめし功は、看過すべからざるものあり。

村田春海

村田春海文化八年二四
七一歿六六は、江戸の人、商家に生る。兄春郷と共に、眞淵の門に入り、又服部仲英、鶴殿士寧、皆川淇園等に儒學を學び、學和漢に達したり。その性磊落にして、洒脱なる江戸兒風のうちに、豪放なる儒生氣質を備へ居しものゝ如し。彼はその流麗なる文辭の妙に於いては、縣門第一に推され、和歌また儕輩を抜きたり。

春海と千蔭

兩者の著書

彼ら二人は、その歌風を同じうし、詠歌にも勝れて、時人よりも、千蔭春海と並べ稱せられしが、兩者に於いても互に相許して、最も親交ありしなり。そは春海が先立ちて世を去りしその老友の死を悼みし詞の、明らかに記す所なり。

千蔭の歌學説には、

答長瀬眞幸書 一篇 (寛政五年)成

答小野勝義書 一篇

答富小路貞直卿書 一篇 (享和元年)

芳宜園歌話

等あり。

春海には、

歌がたり 一卷 文化五年刊

贈稻掛大平書 一篇 寛政十一年三月成

再贈稻掛大平書 一篇 寛政十一年十月成

雅俗辨のこたへ 一篇

の四種あり。大平に贈りし書は、宣長の晩年、寛政十一年春海五十四歳のものなり。歌がたりは、出版せしは十年の後に、かゝれど、作られしは、恐らくは他の三書の以前なるべし。他に、宣長の美濃の家づとを非難せし、さいぐり一卷あるよし、春海が、濱臣に與ふる書及び一柳千古に答ふる書の中に見ゆ。織錦舎隨筆中の一篇は其草案ならむか。同隨筆には家集辨を
はじめ、歌論散見せり。

以下、千蔭春海の學說に就いて述べむに、年齢等よりいは、千蔭を先にすべきなれど、こゝには、學說上よりして、はるかに精しき春海の說より述べむとす。

春海の學說
彼の眞淵觀

彼はまづ、師眞淵について、その學問の根本は、單に古學にあらずして、古歌の神髓を了解して、歌の精神を明らかにし、自ら又よくその古歌の心にかなひたる歌を詠み出でて、いはゆる古へぶりを唱道せりし點にあり。これ彼が契沖春滿以上に出でし點なりとせり。即ち眞淵の學問の根本を以て、歌學にありとし、眞淵の本領を歌人にありと解せしものなり。さ

眞淵學問の精神

眞淵の說に
三期の變遷
あり

らば、眞淵によりて明らめられたる古歌の神髓は何ぞ。歌の精神は何ぞ。彼曰く、そは決して言句の枝葉にあらずして、「まごころ」てふ精神にあり。縣門の人が、ともすれば誤り陥るが如く、徒らに古言を驅使して奇を衒ふ如きことは、眞淵の精神にたがふものなり。眞淵の說の精神は、古歌の眞情を學ぶにあり。さらば、謂ふところ古歌とは、いづれの時代の歌を指すぞ。彼はこの點に於いては、自らよく眞淵の眞意を傳へ得たりとして、一解をたて、曰く、凡そ眞淵が、說には、三期の變遷あり。初めとは、五十歳以前、荷田家の教をうけて、未だ古へぶりを唱道せざりし時代、中は五十以後六十餘歳にいたる間、殊に歌道に心をこめられし時代の說にして、最も從ふべし。末は翁が晩年の說にして、萬葉考の序に見えたる如く、愈々益々古へに走りて、終には人應の歌をさへ巧を用ゐたる所ありとて難じ、その以前に遡らむとせるものなり。而してこの三期のうち、最も眞淵が說の正しく、かつ眞淵自らの本意のある所は、第二期の說とす。こゝに眞淵の本意ありしことは、眞淵に親炙せし春海自らの知るところなり。その自

ら眞淵の説の本意なりとして、彼の説く所によれば、彼の準據とせしは、藤原奈良の時代より花山一條まで、即ち萬葉集及び三代集の時代にあり。これ彼が所謂古へぶりの眞情を傳へたる時代なり。斯くの如く、その古へぶりの時代を擴げ來りて、こゝに「歌は心の眞をのぶるものなれば、必ずおのが物ならむやうにこそあらまほしけれ。」と考へ、「いま歌よまむには、藤原奈良の御時より、花山一條の御時までの歌をとほし見て、凡てよきふしと悪しきふしとを心に辨まへおきて、其世々に上り下りて、心の引く方につきて學ぶべし。歌は心を逃ぶるものなれば、人々同じやうにあるべき事にもあらねば、己がじしの姿あらむものなり。只心のまことを失はざらむ事と、調ののどかならむとは、古への手振を忘るべからず。さては、珍らかに新しき心をこそ詠ま、ほしけれ。さらずばいかでかわが歌ならむ。」淵自ら述べてたり。といひしが、更に一步をすゝめて、「歌の様はいと廣し。これを一方に思ひなづむ人は、皆違へり。古今のけちめをよく思ひ定め置きて、おのが好める方につきて、おのが姿をたて、詠むべきものなり。必ず古へにも

わが歌

古今風を揚

眞淵より入りて眞淵を脱す

雅情説

なづまず、はた後の世にも落ちず、我とわが見たるふしを詠み出でむこそ、まことの歌なれ。」と考へ來りて、終に不知不識の間に、眞淵が崇古説を脱し來り、彼自らが好める方に赴きて、「萬葉の歌は、大方は本の姿はよくて、末の調くだけたる歌多し」といひて、寧ろ萬葉風を斥け、流麗の調ある古今集の歌を揚げたり。こゝに至りて彼の説は、——彼自らは或は意識せざりしならむも——眞淵より入りて眞淵より脱したり。否、彼は、そのみに止まらず、その歌風に於いては、技巧てふ點より、學説上反覆非難し排斥せる新古今の歌風に近よるにいたりぬ。こは彼が、家集琴後集の明示する所なり。蓋し彼が自らその好むところに之きしに外ならず。

而して、彼が眞淵の眞情の説を根本としつゝも、猶かくの如く、古今集後の優美の歌風を唱道せし所以のものは何ぞといふに、これ彼に別に雅情の思想ありつればなり。彼は、情に雅俗の別ありとし、たとひ歌は「人の心を種として」なりいづる自らの聲なりとも、歌たるからには、その情や雅ならざるべからず。その言ひざまや、雅ならざるべからずと考へたり。こ

れ彼が千蔭とともに景樹の歌を評せし筆のさかの後に去るし、又それに對して書ける蘆庵の門小川布淑後出の説に對する雅俗辨のこたへ琴後集所出、阿禪師の許よりおくられし雅俗辨を論じて答ふる書に、更に布衍せし所なり。この點よりして、彼は師眞淵に對しては、上述の如き解釋をなし、小澤蘆庵に對しては、その和歌革新のいさをには欣慕の情を寄せつゝも、琴後集所出、阿禪師によせ、蘆庵の死を悼む文、參照、彼がたゞこと歌の主張に就いては反對したり。

彼が歌論の要領は、以上に盡く。まかもなほ、附記せざるべからざるもの、一二あり。

一には、彼が宣長派が古體、近調とわけて歌を詠ずるを詠歌の本領に違へりとして難せしことなり。これ、心を二つにするものにして、真情を述ぶる道にたがふものなりとして曰く、「さてその様に、善悪はありぬべけれど、人々同じからぬこそ、まことの歌なれ。さるを我がむねとたてたる方はなくて、一歌は古體に、一歌は今躰に詠まむ事は、たはれたる業ならずや」と。二つには、長歌を推奨せし説なり。彼は長歌を以て、今後の歌人が才を試

宣長を難す

長歌を推奨す

長歌の三體

るべき壇場なりとして曰く、「今深く思ふに、短歌は古へより世々に勝れたる歌人も多く出で、珍らかなるたくみ、面白き節も言ひ盡くしたれば、今如何に思ひはかりても、皆古へ人の跡のみ踏までいへあらぬわざにて、新らしく言ひ出でむ節は難かるべし。たゞ長歌は、古今集の頃より此方には、こを宗とよめる人もなくて、世々に歌數も少なければ、古への人の思ひ残せる巧も、言ひ漏らせる節も多かるべし。かく降りたる世にして、珍らかに新なる事を一ふし詠み出でて、古へ人にも恥づまじき業を爲し得てむものは、たゞ長歌なり。今より後の世に、詞の林に遊びて、この道に才賢こからむ人は、こゝに心を深めむ事こそあらまほしけれ」と。而して、古來長歌に、藤原奈良朝の古風なる體、古代後代の詞を交へ用ゐて姿を整へたるもの、また専ら古今集以後の詞を用ゐて姿を古へに習ひたるものありとし、第一を上品の品とよび、第二を中の品、第三を之につぐとし、この三者を學び得て、自己の體を詠み出づべきよしを説けり。斯くの如き抱負をいただきし彼自らは、また長歌にすぐれ、有名なる王照君を詠める歌をはじめ、其家

集には、幾多の名編を載せたり。而して彼自らの體は、全くの古風にもあらずして、實に前述の第二に屬すべきものなりき。

春海の歌がたりに就きては、古言清濁考を著して師宣長にも賞讃せられし玉勝間 鈴屋門下の 石塚龍麿天保六年一は、文化八年に、歌語斥非を著して非難せり。うちに、「古へに似せぬすれども、其中におのが心を寫すなれば、僞言にはあらず」云々といひて、春海が、宣長の古風近風とわかち詠むを非難せるに對し、その古體歌を辯護せるあり。

次に千蔭に就いて見るに、その説春海と殆ど同じ。彼また、師真淵の意を承けて、古へを學ぶべしと言ひつゝ、その自ら詠み出でし歌は、真淵とは大に異なりて、雄渾蒼勁の古體よりは、流麗温雅の近體なり。彼は、小野勝義が、この點に就いて、「その師の教と、自らの歌とは異なるやうに思はるゝは如何に」と問ひしに答へて、「おのが心おきてと、人に教ふるとは異なる事

石塚龍麿
歌語斥非

千蔭の説

あり」と辨解せり。要するに、千蔭は、真淵が古へぶりの真心を詠み出で、わざとならぬ所をめで、歌の本意そこにありとせしその心をば學び、玄かも自己を捨て、古風に拘む當時の萬葉家に反對せしなり。即ち、彼によれば、己れの好む所を捨つるは、心のままといふ事にあらずして、巧みたるもの、即ち真淵の真意にあらず。而して彼が雄渾蒼勁の古體よりは、寧ろ流麗温雅の近體を探りしは、これ即ち彼が好む所にゆきしなり。心のままにゆきしなり。

されば彼は、古風後世風の別に就いては、下の如き言を爲せり。曰く、「古への風を詠むとても、あながちに遠き古言を用ゐむとするは悪し。さらば終に、詞の爲に心をかふるに至るべし。たゞ古への風後の風の別は、みだりに詞に善惡をいひて制禁するものは後の風、古言を尊とみて正しく心をのぶるものを、古への風といふべし。」芳宜 聞と。以てその意見のあるところを見るべし。

古風近體と分ち詠む事について非難せしは、彼また春海に同じ。彼が

富小路貞直に答へし書には、この點について、宣長に反對する自己の立場を簡單に辨明せり。かの萬葉集佳調の撰者長瀬眞幸宣長の門人の間、に答へたるものも、如上の思想の外、別にとり出でて注意すべき説なし。なほそをべし宣長の文あり。

評の春海千蔭の批

春海、千蔭の説は、精粗は異なれども、その要點は同じ。春海の説に就いて見るに、第一、そが眞淵の學問の主眼を歌學にありとせしは、當時本居一派の古道派より、烈しく反對せられし點なるが、平田篤胤の氣、吹舎筆叢參照こは、春海の解釋、我田引水の嫌あり。されど眞淵が、註釋以上に出でて古歌の精神を發揮せし點を賞讃せしは當れり。第二に、古風の時代をおしひろめて解釋し、これ眞淵の眞意なりとせしは、よし春海自らがいふ如く、果して眞淵の第二期の説が然りきといふとも、蓋しまた自己の好む所に解せし誹を免かれじ。眞淵の眞意が、あくまで遡古的なりしことは、吾人が彼の説を述ぶる際に説明せし所にて明らかならむ。第三に、その眞情てふ思想よ

り、歌を己が心を述ぶるものなれば、己が好む風に之くべく、摸擬すべからずといひしは、よく眞情説を活かし、ものなり。この點より、本居派が古風近體と分ち詠むを非難せしも、歌人たる立場よりの至當の言なり。要するに千蔭、春海の兩人は、彼ら自らが言へる如く、眞淵の學説をさながらに承けたるものとは言ひがたく、否、その大體より見れば、寧ろ枝直の旨とせしところ、に近く、又實に次章以下述ぶべき京都派の歌學と、その傾向を同じうして、眞淵の崇古派に反動の氣運を形ちづくれるものなり。而して彼が雅情の説に至りては、もとより無意識的には當時の歌人の凡て知りあたる所なれども、そを明らかにいひ出でて、眞情説たゞこと説の缺點を補ひしは、功とすべし。

千蔭門下

春海門下

千蔭には、すぐれし門人少く、わづかに草野集の編者木村定良弘化三年、及び友人ともいふべき、怜野集の編者清原雄風文化七年二四、あれど、特に歌學説ある人なし。之に反して、春海には、門下に學者多く出でたり。

小山田與清

即ち、小山田與清弘化四年二五〇七歿六五は有名なる考證學者なるが、彼には作歌故

實、松門和歌談の著あれど、一は典故を記し、一は中世歌論の抜抄に過ぎず。

歌學索引、歌集類語は、ともに便多き書なり。彼はこれら大成して、歌學

大成の著をなさむ志ありしもの、如くなれど、果たさざりき。樂章類語

抄、俳諧歌論、ともに未完の書なるは惜しむべし。同門に岸本由豆流弘化

二五〇六あり。彼又考證學者にして、萬葉集考證、後撰集標註等あり。清

水濱臣文政七年二四八四歿四九は、近葉菅根集を撰びて長歌の獎勵につとめ、縣門遺

稿を編して、散逸せむとせし縣門諸歌人の家集を收めしが、他に朝敵辨一

篇あり。堂上派が、古學派を排して、朝敵とまで罵しりしを辨駁せしもの

なり。歌城歌集の作者、小林歌城文久二年二五二歿八五また、春海の門に出づ。彼

は歌を以て全然消閑の遊戯なりと論せしこと、その家集の序文に見ゆ。

彼は好みて他の歌を非難し、難武藏野集等、數種あり。また文政二年に、柿

本猿丸といへる名をもて、倭歌高名競の俗語一篇をものし、諧謔の筆を以

て、當時の歌人學者を罵倒せり。

小林歌城

清水濱臣

岸本由豆流

岡本保孝

なほ濱臣の門に、考證學者岡本保孝明治十一年二五三三歿八二出でたり。彼は和漢
梵三國の學に通じ、萬葉集の音韻を究めて、功ありき。

第六章 小澤蘆庵

眞淵が自然真情を説きし歌學説は、彼の古道主義の思想に立脚せることは、已に述べし如くなるが、その説は、また獨立せる歌學説として、歌壇を風靡し、彼が所謂萬葉ぶりの歌風は、古風として、多くの歌人の間に普及したり。而して又その歌風は、古語に對する學識を要求するところよりして、自然學者の歌風として、重んぜらるゝ傾ありき。

斯くの如き氣運に對して、反動の生ずるは、自然の數なり。而して斯くの如き反動は、主として眞淵が勢力をふるひし江戸の地にあらざりて、京都に起れり。その反動の代表者たるものは、小澤蘆庵、伴蒿蹊、つゞきて香川景樹なり。

京都は元來堂上歌學の故地にして、歌道の師範家は、その家業を傳へて、その門に傳授を乞ひて、始めて歌人と稱するを得る有様なりき。斯くの如きは近世文運復興以後も、なほ改められず、大阪の地に契沖いで、近松西

古學派の
學反動の
氣運京都の舊派
と新氣運

鶴の俗文學おこれりし元祿時代の新潮流をもよそに、又さらに降つて、眞淵が明和の頃に古學を呼號せしその聲をもよそに、京都歌界の一般の有様は、なほ舊來の情勢の中に漂ひ居たりしなり。されば後年、本居宣長をして、その京都に學問を傳ふる際、元來京都の地は古學開けず、と言はしめたりき。されど斯くの如き形勢のうちに、猶近世古文學の氣運は勃興しむたりしなり。中世歌學第十三章參照近世古學の翹楚たる荷田春滿は、京都に近き稻荷山の人なり。宣長が晩年京都に學を講せし時には、日野芝山等の堂上の師範家を始め、諸搢紳諸歌人、親しく教をこの布衣の一學者に受くるに至れり。されば師承傳授の堂上歌學に教育せられし人の、自らそを打破して、自由清新なる新學問の精神をとらへ、それとともに舊來の堂上風の歌學説以外に、自己の見識をたて、實際の詠歌にも新しき風を詠み出だし、歌人の如きも輩出せり。

吾人がこゝに述べむとする小澤蘆庵は、その一人にして、まかもそが中にすぐれたるものなり。蘆庵は享保八年に生れ、享和元年二四に、七十九

小澤蘆庵

その傳記

歳にて世を去れり。その一生は殆ど宣長と時代を同じうせり。(宣長より七年早く生れて、同年に歿す。) 彼は尾州成瀬家の臣にて、京都の留守居役たりしが、仕を辭し、世を終るまで京都にありき。彼始め冷泉爲村の門に和歌を學びしが、既後自己の見識をたてたり。彼がこの舊派歌學より脱せし年月は、さだかに知り難けれど、爲村の世を去りし前數年のこと、推せらる。爲村世を去りしは安永三年にて、蘆庵が五十二歳の時なり。その後、に於いては、彼はその自己の歌風を以て、當時の歌壇に一勢力をなして、はじめ有賀長伯武者小路實岳に學び、後獨立せし伴蒿蹊及び同じく實岳の門に出でし和歌爲隣抄の著者澄月出既、芦菴と同じく爲村の門に出でし慈延出既と共に、當時平安の和歌の四天王と稱せられ、殊にその中にも重んぜられ、寛政五年宣長の上京せし頃には、(蘆庵七十一歳)その歌は圓熟の域に入れりき。蓋し彼は太秦にうつり住みて後、その歌風益々成熟せしかば、頼山陽は、杜詩以夔州爲上乘、蘆庵翁和歌爲當代第一、而其避災寓太秦時、稱最深妙、故太秦者蘆庵之夔州也、と評せり。所謂四天王の中に、澄月

蘆庵と同時の歌人

慈延は、その詠歌に於いても、歌論に於いても、新しきところなけれど、他の二人は堂上歌學を全然脱離して、自己の見解をたてたり。これ前二人の歌學者として中世歌學の系統に屬せるに反し、後二人の近世歌學に屬せる所以なり。

蘆庵の著

蘆庵が歌學の著書は、

塵ひち 一卷 寛政二年(六十八歳)成

蘆かび 一卷 同上

或 問 一卷

古今六義諸説 一卷 寛政六年(七十二歳)成

ふりわけ髪 一卷 寛政八年(七十四歳)成

ふりわけ髪自注 一卷 寛政十二年(七十八歳)成

の六種あり。前三者はふりわけの中道と名づけて、歿する前年、即ち寛政十二年に刊行せらる。其うち、或問は、著作年月記しあらざれど、蘆かび、塵ひちと同時の作なるべし。之らの著書、いづれも彼が全く堂上歌學より脱

して、自己の見解を樹つるに至りしよりの作にかゝる。以て彼の歌學説を伺ふべし。但、振分、髮は、語學説に就いて多く記し、その一部分に歌を論じたり。又、六義諸説は、古今集序の六義を註せるものにて、中世諸家より契沖にいたる諸説を擧げて、自説に及べるもの、歌論として、さまで注意すべきものにあらざれど、彼が古今集を崇びし事の如何に深かりしかば、其跋に、「序は歌の大本、言の初を説ければ、數多たび、これを同志の人に語る」云々の句あるをもて知るべきなり。

近世歌學として、傳授秘傳の舊歌學に、反抗せし點は、特に説くを要せず。彼の説は、前に述べし如く、他に注意すべき由來を持ちて起れり。即ち眞淵一派の歌學に對する反動これなり。さらば彼は、如何なる點よりして眞淵一派の歌學に反對せしかといふに、一言以ていは、眞淵の歌學の、人情の自然眞實を主眼としつゝ、近代の人に耳遠き古人の口眞似をせむとする、その間の矛盾を非難せしなり。これたしかに、眞淵派の古風の和歌の餘弊なりき。されど眞淵に於いては、その古道主義の立場より、眞情自

彼の説の
山來ただこと
歌

然といふことを説き、その理想を古風の歌に認め得、さて古風を唱道せしにて、その本來の趣意は通へるなり。蘆庵らが非難は、古道の範圍をはなれて見しものにて、歌論としては、一層徹底しをれり。

斯くの如くにして、彼が主張せし所は何なるかと云ふに、そは即ち、ただこと「歌」の思想なり。ただこと歌とは、あへて古語に拘まざる平易の言語を以て、自然眞實の情を歌ひしものなり。

彼がその和歌に對する主張を詠み出でし歌に曰く、

安からむ大路は行かで岩根踏みさかしき山にまどふ世の人

言の葉の繁みこちたみ分き兼ねてまどは、歸れもと來つる道

何をかはあせくらかへし求むらむ見きゝにみてる言の葉の種

古へにかへらむことは皆人のものこゝろの道のひと筋

すなほなる心言葉ぞゆくすゑに残らむ道の姿なりける

言の葉は人のこゝろの聲なれば思をのぶる外なかりけり

一ふしと思ふややがてすなほなる心のゆがむ始ならまし

歌とは自
然の聲な

いづれもこの主張を歌ひしものなり。而して彼がただこと歌の思想は、展開して和歌の三義の思想となり、同情新情の思想となりて、彼の學説を成せり。そは以下詳述するところに見るべきなり。

歌とは何ぞといへば、彼は簡單に、人心自然の聲と言ふ。たゞそれ自然の聲なり。要とするところは、真情を些の矯飾なく發表することにある。彼曰く、歌はこの國のおのづからなる道なれば、詠まむするやう、賢こからむとも思はず、けだかゝらむとも思はず、面白からむとも、優しからむとも珍らしからむとも、すべて求めて思はず——自然の道なるが故に、求むれば自然を失ふ——たゞ今思へる事を、我がいはるゝ詞をもて、理りの聞ゆる様に言ひ出づる、これを歌とはいふなり。

根本の思想は、眞淵の主張する所と異ならず。彼に特徴とする所は、我がいはるゝ詞をもて」といふ所にあり。古語をつらね、古風を真似るは、彼の自然といふ思想と反對す。彼はこの點に於いて、眞淵の說に反對せり。「人情は古今通じて一般なりといへども、言語は其時世の移るに従ふ」。萬

彼の説の
特異の點萬葉家を排
す

葉家が、いたづらに古語に拘むは、この自然の理にもとれり。萬葉家に對しては、後世の歌の姿詞一切不用、萬葉日本紀をみとふたとの箱にして、此中を出づる事ならざる歌人あり。これは末代の衰へたることを厭ひて、古代の未だとのほらざるを知らず、理にくらければなり。……宮殿定まれる後に、穴に住み、火食する時に至りて、生物を食ふが如し。」と、攻撃を極めをれり。さて又、その技巧を排する點よりして、後世の歌を斥くる、この點は、眞淵の思想と同じ。心を求め、詞を強ひて飾れる近世巧緻の歌は、彼の言葉によれば、「歌の本原隠れたる」ものなり。

斯くの如き彼の理想を言ひ表はし、言葉、即ちたいこと、歌なり。たゞこととは、即ち心を求めずして、思へる處を、詞を飾らずして詠するを云ふなり。然らば、そのたいことを旨とせば、その弊餘りにたいになりて、何らの面白みも無きものとなり、せすや、一ふし面白かるべき心を、此たゞことにて詠まむは、如何と云ふに、こは蘆庵が本意に違ふところなり。彼が答へし言に曰く、

たゞこと
の意義

「其心大に誤まてり。……歌はわが思へる心を述ぶ。我は聞えたりと思へど、聞えねば人に通せず。通せざれば歌の用を爲さざるが故に、修行してよく聞ゆべく詠み習ふなり。よく聞えて、人もさなんめりと思はゞ、歌の用は足るなり。修行至りて能く調はい面白くなるべし。未練にて面白からずとも、他にわたりてよく聞えて、歌の用を爲さば、不足あるべからず。わが思へることを言ひ出づるは、内心より出づ。ざるを面白かるべき一ふしを言はむと言ふは、人の未だ詠せざる心を求めて詠せよといふ教にたがへる事なし。其心即ち邪曲にて、自然の道に違へり。是は心外に心を求むる也」と。面白き境地には、自ら到るべきにて、求むべきにては無きなり。

以上述べし如き彼の思想の本来よといへば、歌は言語と同じく、人間の自然の聲なれば、もと則とすべき法もなく、就いて學ぶべき師もなし。人に習ひて詠まず、作例によりて詠まず、無法無師、これ即ち歌の本意とする所にて、第一義なり。されど、歌もよからざれば人に通せず。人に通せざれば歌の用を爲さず。こゝに於いて、師につき作例によりて詠み習ふ必

第一義
歌に法則なし師なし

第二義
古歌を學ぶべし

第三義
古今集を師とすべし

要あり。古歌を師とすといふことは、第一義よりいへば、斥くべきなり。彼曰く、「ある説に歌に師なし、古歌を以て師とす、など言へり。もし古歌未だなき世に我生れたらば、何をか師とせむ」。元來かくの如きは、末のことなり。されど、修業といふ第二義よりいへば、古歌を學ばざるべからず。然らば古歌は、いづれの時代の和歌を學ぶべきぞといはむに、日本紀萬葉集八代集までを見明らかむことは、容易ならず。前後の書をのぞきて、古今集一部を熟讀すべし。これ第三義なり。元來彼の「たゞこと歌」の語は、古今序より出でしものにて、萬葉の古風を排し、近世の巧緻を厭ひし彼の理想とせしところは、當然古今集の自然、平明なる歌風なりき。彼曰く、「古今をもて古を照らして、是に似たるをよしとし、似ざるをあしと知り、又後世今迄を照らし、似ざるをもて、よしあしを知るべし」と。

以上述べし所にては、彼の説は眞淵と同じく、真情自然の思想に基づきて、眞淵が祟古思想に反對せしものに止まれど、彼の歌學説は、更に一層深く論じ及びをれり。これ彼が同情の思想及びこれに伴ひて説かれし

新情の思想なり。彼は合せて同情新情と言へり。まづ主たる同情の思想より述べむ。

同情説

抑も、偽らず飾らざる人間自然の情を述ぶることが、歌の理想とするところにて、又さる歌が萬人を感せしむる所以は何處にありやといふに、これ即ち、同情の活きによる故なり。

彼の同情説は、情を以て萬物に根柢し、普遍するものとなす思想に起りて、それよりして、我が情をおして、他人の情に及ぼすといふ「思ひやり」の思想に至りをれり。即ち、彼はまづ萬物同情といひ、天地有情、非情同一と言ひて、宇宙の根本義を、情の一字を以て説明しをれり。

この情、自然にあつては、發して雷聲、地鳴、水聲、金石、紙竹の聲等の音響となり、人にあつては、發して聲となり、はた歌となる。即ち歌はこの情の發表なり。萬物同情なり。況して人間に於いてをや。人情は普遍にして、本來善美なり。この本然の情を以て、他の人間をはじめ、天地萬物に推ひろめて思ひめぐらすことが、やがて歌の心なり。歌が自然の情を述べて

歌人は同情に鋭敏ならざるべからず
歌人的修養

人を感せしむるは、この故なり。されど人間は、ともすればその本來の性を去りて、自然の情を忘れがちなり。さる習癖に犯されざることとは、歌よむ人に最も必要とする所なり。否、歌人は、さる同情に鋭敏ならざるべからず。その爲には、修養を必要なりとす。彼曰く、「世の中の人心さまのよきもあり。あしきもあり。悪しとて、生れながら悪しきにもあらず。習はしの悪しく癖づきたるなり。歌よまむ人は、心素直に、美はしからんずるやうと、常にくせづくべきなり。よしあし共に、心の現はるゝものなればなり。」といひ、さて其くせづくべき方法に及びて、そは如何くせ付むとならば、凡人の悪しさまになるは、身を常なるものと思へばなり。かげろふ稻妻の如く、出づる息の入るをも待たぬ人の世の常なき様をよく辨まふべし。さて我が身に近く常に馴るゝ人、上さまの人、老いたる人に、我が心をなして、苦しからんずる様、思はんずる様を思ひ計り、その心に協はむる様に、明暮仕へまつるべし。又下様の人、又は幼なき人の心にもなりて、彼が思はむやうわびしからむ様をも思ひめぐらすべし。下様の人なればかゝる事は苦し

とも思はじ、など思ふべからず。この世の契拙くて、下様に生れたるにてこそあれ、暑さも寒さも煩はしきも、我が身につゆ違ふことなし。されば苦しと思はむする事、我が心もて事そぐべきほどは、そぎて召仕ふべし。此思ひめぐらすことを推ひろめて、なべて世の上中下の人の心様、目に見えぬ境の海士の漁り、山人の木こりて世渡る様、田夫の苗植ゑ、秋田もる煩はしさなどを、皆我が身になして思ひめぐらし、鳥獸の餌を求め、妻を戀ひ、草木の花咲き實り、凡て天が下にありとある事を思ひつゞくれば、思へる理りに違ふ事なく、自ら心詞すなほにて、此道に進み易し。かく常に世の理を思へる人を、心ある人といひ、優しき人ともいふなり。かゝる人は、理に暗からぬ物ゆゑ、物に驚かず、恐れず、變化やうのものも伺ふこと能はぬなり。たとひ歌は詠まずとも、此心付、誰もあらまほしき事なり。」

と言ひて、一種の道德觀に及べり。

斯くの如く、歌の根本を人間共通の人情といふものに求め來りて、さらば歌は古今東西同一の人情を歌ふものにしあれば、始終同じ情を繰返す

新情説

ものにて、何らの新らしきところなきには、あらずやといふ問題おこるべし。これに答ふるものは、彼の新情の説なり。彼は、これを譬を以て説明しをれり。曰く、「百川流れて海に入り、海うけてあふれざるは、天地わかれてより此方、今に至りて變ることなし。是、古今一般なるが如し。その川源、日夜わき出づる水、暫くも止まらず。天地造化と共に移りゆく所にして、古への水にあらず。即ち今見るが内、時々刻々にわき出づるは、人情の物にふれて、やむことを得ず新らしく發するが如し」と。即ち普遍的の人情として見れば、同一無二なれど、その時々刻々移りゆく點よりいへば、萬人各自にとりて、念々これ新らしきなり。

要するに、蘆庵の説、その自然真情を説く點に於いては、眞淵の思想と同じく、玄かも眞淵が崇古説に反對せし點は、眞淵派に對する反動にて、而してその根本の主張よりいへば、眞淵の思想に比して、一層徹底せり。又彼が同情の説に至つて、その論多少根本的にして、深きものあり。その情を説きしところは、自ら宣長が物のあはれの説と似通へり。もとより學風

蘆庵の説
の批評

よりいひて、宣長の説の周到緻密なるに比すれば、彼の説のやゝ空漠に傾きををる弊あることは、認めざるべからず。

蘆庵門下
小川布淑

雅俗辨

蘆庵の門に小川布淑文政三年二四あり。後に叙すべき筆のさかの争に於いて、千蔭春海が雅情と俗情との辨をなし、歌には俗情を斥けて、雅情を歌ふべしといへるを、歌はまごころより出でたるたゞ言なりとの蘆庵が説よりして、それを非難せる雅俗辨一篇(享和二年成)あり。

昇道
雅俗再辨

その雅俗辨に就きて、春海が更に辨せし書あることは、前にいへる如し。これに對して、蘆庵の門人にして、後、秋成に従ひし桑門昇道備後府中明淨院の弟子。また問齊とは、雅俗再辨を著して、筆のさかの攻撃は「端を景樹にことよせて、心ひそかにわが故翁にあることを知る」となし、之を辨駁せり。その要旨、師のたゞこと歌の思想を相符せるものなるが、中に、

「それたゞこと歌といふは、歌の大本、言語のはじめなり。我が思ふことを

たゞこと
は寫生の如

たゞことにさへいひ出づる事能はずば、色へ飾りては、況していひ得べきやうなし。繪かきの寫生だに得せて、筆格氣韻を論ずるが如し。花卉翎毛、その真にせまりてのち、畫趣の風韻はおのづから其中に生ずるものなり。歌よまむと思はゞ、まづ此たゞことより入りて、中に動く情をさながら言葉にあらはすが歌なることを、學び明らむべきなり。その情とは、雅情なり。此もとさへ忘れずば、見るもの聞くものにつけて、思ふ事をありのまゝにいひ出づる、歌にあらずといふこと無し。」

たゞの意は
雅正なり

となし、寫生にたとへて、たゞこと歌の本義を説き、更に進んでたゞの意は、雅正なりとして、

「清輔朝臣の與義抄に、たゞこと歌を釋して、雅のまさしきなり、たゞしきなり、まさしくたゞしければ、ありのまゝなるなり、といへり。然れば、ただこのたゞは、雅正の義なり。直の字をたゞとよむも、正直の義をもととす。唯、但の字のこゝろ、又無價の義、又一轉しては、庸俗の義にもいへど、たゞことのたゞは、正直の本義につきていふをもととすと知るべし。詩三百篇も、思

無邪の三字に出でず。その無邪は、雅正なり。雅正は、言葉につきていひ、無邪は心につきていふ。中に動く情、無邪なれば、外に發する言語、必ず雅正なり。と解せり。寫生にたとへたるは新らしといふべく、雅正としたるは、ただこと即ち雅情と解したるもの、些か牽強の嫌なしとせざれど、一種の解釋といふべし。その外、所論總じて詩論に據りて、學殖の豊富なるを示せり。

海野遊翁

同じく蘆庵の門なる前波默軒文政元年二四に就きし海野幸典嘉永元六〇八あり。號を遊翁といふ。彼は天言活用圖を著し、語學上に一家言を立てしが、その歌學の著には、

歌のまらへの事 一編

あり。歌の調べの、音樂の調子などとは異なりて、きはやかに定めいふべきものならず、たゞおのづからに知得し得べきものなるよしを説けり。彼は、晩年いたく景樹の歌論に心服し、擬筆調の説によりて、ひいきといふ

ひいきの説

思想を案出し、古今の序に、歌とのみ思ひて、其さま知らぬなるべしとあるは、一うたの調のひいきをいへるなり。さまとは、ひいきなり。入る息出づる息によりて、歌のまらへのひいきあり伊勢の家つといへり。

また門弟前田利保が、彼の教として記せるものによれば、大よそ歌は、古きものぞまず、新らしきも嫌はず、今年、今月、今日の風體こそあらまほしけれ。又、貴賤共に其時の風情にうつらざれば詮なし。歌よみて後、ことわりを説きて示すものにあらず。是により、御家風、古學風などいふこと、歌には無き事なり。唯思ふまゝに、眼の前にいひ出だすをもて極意とす。唯思ふまゝに心詞につくろはず、歌をつくり給へ。てにをは、自ら備はるべし。其時、眞の歌は出來ぬべく、其當時の風體にうつりて、人と物いふが如く、心の思ふ事をとりかへなく、いひ出だせるは、この心おきてにあり」の説をなせるよし見ゆ。京都派の思想を述べて、簡要を得たり。

蘆庵を述ぶると共に逸すべからざるは、同じく京都派の歌人として、蘆

庵と並べ稱せられし伴蒿蹊文化三年二四とす。蒿蹊の歌論は、國歌八論の際に述べし如くなるが、要するに、その歌風に於いて、蘆庵と同じきが如く、その主張に於いても、蘆庵に類似せり。さればその説は、こゝに改めて説明する必要なし。たとへば、閑田耕筆中にある人の、國歌の體裁様々あり（安らかなる、巧みなる面白き、古風、中古の風、たゞこと）とて、その優劣を問ひしに答へて、各いづれも長短得失あることをいひ、「唯真心のまゝを、うるはしき辭もてつゞけむは、天に背かず、人に背かず、といはむか」といへるなどは、根本に於いて蘆庵と異ならざるを見るべし。又蒿蹊に、前述の雅俗辨に對して、やゝ折衷の見を述べたる讀雅俗辨說（享和三年正月成）あり。

第七章 香川景樹

次に吾人は、所謂桂園派の樹立者として、近世歌壇の一大才たる香川景樹その人の歌論に就いて論ずべし。

香川景樹

彼と時勢

彼香川景樹天保十四年二は、明和五年、即ち眞淵が世を去る前年に生れたり。時に宣長三十九歳、石上私淑言を著し、その歌學を成してより、はや六年を経たり。京師にては、蘆庵既に四十六歳。蒿蹊また三十六歳。富士谷成章三十一歳。恰もこれ新學の氣運、漸う京都の學界に萌して、舊派堂上の殘光、正に影をひそめむとする時なりき。景樹は實に、この氣運に乗じて生れ出でしなり。

彼の小傳

彼は壯年にして生地鳥取を去り、京都に出でて、苦學數年、寛政九年三十の頃、宣阿以來の和歌の家なる梅月堂景柄文政四年二四の養子となりて、香川を名のりしが、當時已にその才を認められて、蘆庵、蒿蹊、澄月等の諸先輩に伍して、殆ど一家をなしき。而して、此頃已に蘆庵の「ふるの中道」ふり

わけ髪等の著世に出で、京都歌壇は、蘆庵がたゞこと歌の思想に接したり。享和元年、宣長が上京して古學を布教し、堂上の諸公卿喜んでその講席に列し、京都文壇覺醒の氣運現然たりし時には、正に三十四歳、彼またこの先輩に接しき。

その後文化元年^{七三}に至りて、彼は梅月堂を離縁せり。その頃より、彼の歌風は一家をなして、漸う世を動かし、終にその桂園の流派を樹つるに至りぬ。而して之とともに、彼が歌論は宣べられ、天保十四年、七十六歳にて世を去るに至るまで、數多の門弟を導き、數種の著を公にせり。今その著の主なるものを擧げむ。

彼の著

- 新學異見 一卷 文化八年(四十四歳)成
- 古今集正義總論 一卷 天保三年(六十五歳)成
- 歌學提要 一卷 内山眞弓輯。天保十四年成
- 桂園遺文 二卷 鈴木光尙輯。萬延元年刊
- 隨所師說 二卷

折々草 一卷

これらの諸著によりて、景樹が歌論を研究し來るに、吾人は彼の説の實に眞淵が唱へし眞情説自然説の一潮流に棹さしながら、其うちにして、眞淵が崇古主義に反抗せる一派の、新思想を大成せるものあるを認むるなり。この點に於いては、彼は實に先輩蘆庵を繼承せりしなり。彼が蘆庵を訪ひて、そのたゞこと歌の思想に啓發せられ、もしくは影響せられしは、實に自然の事に屬す。まかもその歌才を負うて、意氣軒昂たりし彼は、まづ眞淵の説に對する反抗に出發して、その説を唱へぬ。これ新學異見に見えたる所にして、即ちその名の示すが如く、眞淵の新學の説を反駁せしものなり。

彼と眞淵
彼と蘆庵

新學異見

この書に於いて、彼は先づ、歌の誠實の情より出でたる自然の聲にして、毫も思慮技巧を交ふべきものならざるよしを云へり。これ、いふ迄もなく、眞淵の眞情自然の思想と同じ。まかも彼に於いては、この立脚地より、眞淵が崇古の極、擬古になるを排斥し、そを歌の根本の義に違ふものとし

て「歌はおのが思ひを盡くすの外なければ、何を摸とし、何を學ばむ」といひ、今の世の歌は、今の世の辭にして、今の世の調にあるべしと説き、眞淵を以て「舊歌を讀みて事變に達すといふ、修爲の道と混するものとなし、自然説眞情説を一層徹底せしめて説きたり。これ、蘆庵が説と全く同じ。彼に於いては、眞淵派の説の缺點を攻むるの急なるあまりに、己れが思想の先驅をなせる眞淵が根本の思想を了解せざるの偏見に陥れり。まかもそれと共に、その主張蘆庵に比して更に明瞭に、更に峻烈なり。例へば、眞淵が

「此れらの心を知らむには、萬葉集を常に見よ。且つ我が歌も、それに似ばや」と思ひて、年月に詠むほどに、其調も心も、心にそみぬべし。」新

「按ずるに、こぼゆしき妄論なり。歌は情のゆくまに、ひとり調べなりて、思慮を加ふべきものならねば、古へに擬似むとするの違あらむや。若これを似せたらむは、やがて飾れる偽のみ。又似せむとして似べきものな

らむや。これを似せて、似たりと思ひをらむは、いと無慙し。……若かの所謂たをやめ風の國ならむには、其歌もたをやめ風ならむこそは、やがて天地の眞實の姿なるべけれ。さらむをも、丈夫の風にならへといひ、又萬葉に似ばやと思へなど云へるは、偽を教へて、誠を亂すものなり。切恐、さるかたさまの歌をのみ、年月によみもて來ば、識らず、虚遠にはせて、眞心を失ひ、竟には狂疾はしくさへ成り行きて、いと缺舌かみまへきくらむ心地ぞすべき。歌はうたひ上ぐる即ちに感ずるものなり。かたぶきて其意を悟り、尋ねて其調を識るものならむや。されば、かりにも人をして聽察きまはすべきものにはあらざるなり。新學
異見

といへる一節の如きに看すべし。

斯くの如く看來れば、彼の歌論を以て、往々にして彼の流派の人々が、尊崇のあまりなすが如く、和歌史、上未聞の見として、推獎し得ること明らかし。彼また先輩を有し、彼が説また前人の影響啓發をうけて起りしなり。さりとして又彼の説を以て、全然摸倣に過ぎずとなさむか、そは謬見な

彼の説には
由來あり
なり
か
獨創的

り。よしやその説の一つ一つをとり出でて、その由來する所を尋ねれば、先人の説を繼承せるものなること、斯くの如しといへども、之を全體として考へむか、そはまた彼に於いて自發獨創せられしものなり。さらば次に吾人は、この點より彼の思想を考へざるべからず。彼が或は其歌論の著書に、或はその平生著るし、門弟の詠草の奥書に、反覆して説きし家言に曰く、「歌は理わるものにあらず、調ふるものなり」と。これ彼が調への説にして、即ち彼が歌論の中心をなすもの。この言は、まづ前半に於いて、世俗の説を破し、後半に於いて、彼の自説を述べしものなり。「理わるものにあらず」とは、彼に於いては、思ふに二つの義を含めり。一は、理義にあらずといふほどのこゝろなり。二は、和歌の感情を主とする性質を説けるものなり。

歌は理義に
あらず

第一に就きては、彼が、或は漢詩の「志を言ふ」を主とせるに對して、「大和歌は固より性情を述ぶるの外なく、思慮に渉るべきものならねば、其言はかなく、其心、幼なくして、いふべき義もなく、聞くべきの理ある事なけむ」古今正義

歌は工夫考
慮によらず

論總と言へる、又「かたぶきてその意を悟り、尋ねて其調を識るものにあらず、吟詠するすなはち、感ずるものにて、假にも聴まどふべきものにはあらずるなり」歌學提要の言などに徴して知るを得べし。

第二は、考慮又は工夫を否定するとの意にて、やがて技巧を排したるものなり。即ち彼の言によるに、

「是ばかりの事は、誰も思ひもし、いひもすれど、云ひたりとて何の甲斐かあらむと思ひ捨て、今一等上を求め、深きを探り、漸く歌の境を離れて、さて歌なりと思ひもし、いひもすれば、殆ど歌の本體を失ふものなり。……又今の世、我はと誇れる人の歌を見るに、大かた趣向と義理とを宗として、物する故に、枝をため、葉をすかしたる庭木の如く、自然の調、自然の姿を失ひたれば、是はと感ずるは更にて、聞きだに分き難きもまゝあるものなり。」同上

といひ用語に就いても、

「歌詞といふもの、更に有るものにあらず。只其御代々々の言葉をもて、誠實の思を述ぶるのみ。」同上

用語

實況實感

といへり。かくて彼は「たゞ實物實景に向ひて思ふまゝをすらく」と詠み出づる上を以て理想となし、實況にのぞみてあらはるゝ端的の感を以て和歌の最上の感とし、つひに、

「俊恵法師の歌の心は幼なかれといはれしは、いひ過ぎたる所あり。されば是によりて惑へる人少なからず。幼なかれとは下知する心ありて、かの似する方に落つめり。かれの詞を捨て見るべきなり。」同上

の言をなせり。

この二つは、所詮工夫技巧を排して、真心自然を説きしものなるが、彼をしてかくまで極端に大膽に論せしめしものは、實に彼に自己の發明と信せし積極的の主張ありつればなり。これ即ち調べの説とす。この點にこそ、彼の説の中心はあるなれ。

さらば彼が所謂調べとは何ぞやといふに、そは一わたりの意味にては、彼に於いてもまた従來一般の意味の如く「詞のつけがら」といふことになりしは明らかなり。

調べの説

彼が枕詞序などを以て「調べを」といふる爲の具なり歌學提要といひしは此こゝろなり。而して、彼が調べるといひて意味せしところは、實に又この詞のつけがらのとゝのひといふほどの心に外ならず。而して更に立入りては、うたはるゝ感情の種類強弱などに相應せる詞句の情趣との意、即ち想と言語との調和をいひしにて、例へば、

「調べと云ふものは、せはしきものにて、せはしきが調べのとゝのひたるなり。ゆるきものには、ゆるきが調べのとゝのへるなり。よりにて、物につき、よき調べに定まれる格なし」師説

の如く説きしが、おしなべてその説きし所を見、また彼自らの實際の作品につきて考へ來れば、まかまなほ、

「今少し調べごとにつき不申候様ありたく候。さら／＼と事もなく上品にうるはしく、人ならば尊貴の風俗あるやうになしたく候。さるを調べとゝのふと申し候。」同上

「其調べは、あら耳には餘程きゝ知り難きことにて、先哲も惱まれたる事

の由に候。されど大やうは、みやびやかに詠むことにて、みやびと云ふは、品よきにて、上品に賤しからず、いかなる高貴のみ前にて調べあげても、恥かしからず候やうに云ひくだすを、よく調ぶると申し候。^上

「まづ歌は、ことわりに興からず、調ぶるものに侍れば、姿第一なる事、勿論に候。調べは即ち姿なり。其姿は氣高く優美にして、聊かも荒々しき言葉を、用ゐず、雅韻のみものして、假にも凡卑の調に墮ちざらむやう、心がくべき旨、先哲の教に候へば、多端にわたらず、只一筋に有りたく候。こと少ければ、姿おのづから長閑にて、聞苦しからず。歌知らぬ人も、げにとうなづくばかりにあらまほしきを、古人も、歌は幼なかれと申され候。^上

調は優雅なるべし

歌の本質として見たる調

等の文にて明らかなる如く、うるはしく、「みやびやかに、又「安らげく」のびやかなる」を、寧ろ調べの本體として考へしこと、明らかなりといふべし。彼が古今集の優雅の調を理想とせしは、この故ならずんばあらず。以上は、彼の調の説の修辭的方面ともいふべきものなるが、彼は實にこの調べを以て、歌の本質となし、

誠實

人心の感動と自然の調

「只歌は、調べの名にして、調べと、のへば歌調べと、のはざれば、歌にてはあらず候。^上

となしぬ。さらば彼が斯くの如き説をなし、所以のものは、何處にか根據せると尋ねむか。これ即ち、調べを以て、天地人の根本義なる彼の所謂誠實の自然の發表なりとなす彼の根本の思想に基づくものなり。論じてこゝに入れば、彼の説はもとより明確なるを得ざれども、彼が調べの説の根本の實にこゝにありしことは、確實なり。彼の説く所に就いて考ふるに、彼は、誠實といふ語によりて、宋儒が理氣に比すべき、天地人の本體を考へしもの、如し。なほ、蘆庵が、同情説に於ける情の如し。天地人の活動は、この誠實が自發して發現するものなり。而してその發現には、自ら一種格調あり。この格調聲音にあらはれて、そこに調べはあり。

而して、人心の感動も、また實にこの誠實の發表に外ならず。歌は人心が事物に感じて、自らに洩らす嗟嘆の聲なるが故に、その歌にして、自然にして、人為に妨げらるゝものなくば、よく誠實の情を發現し、その發すると

こゝろ、美妙の調ありて、何物をも感せしむ。かくの如きは、思ふに、彼の考へし所の如し。今彼自らの言について之を伺はむに、彼が、
 「抑も調は、天地に根ざして、古今を貫き、四海にわたりにて、異類を統ぶるものなり。言語は、世々に移り、年々に流れ、かつ、貴賤と隔たり、都鄙とたがひて、定則なし。ざるを後人、詞につきて調をいふは、本末をとり違へたるものにて、大凡違はざる事少きは、うべならずや。」
歌學提要

と言ひしは、調の萬物に遍在せるを説けるなり。また、
 「誠實よりなれる歌は、頓て天地の調べにして、空吹く風の物につきて其聲をなすが如く、當る物として其調べを得ざる事なし。そは物にふれ事につきて、感動する即ち發する聲にして、感と調との間に、髮を容るの隙なく、一偏の眞心より出づれば、なり。かくおのづからなる調べは、少しも心を用ふべき事なきに、かへりて巧めるが如く、飾れるが如く、その奇なること、類ふべきものなきに至るは、天地の内に、この誠より眞精しきものなく、此誠より純美しきものなければなり。」
同上

といへるは、以て誠實自然及び調の相ともに活らく、妙用を説けるものと見るべし。

自然、調べ、誠實

「即ち、之によりて考へ來れば、自然といひ、調べといひ、誠實といふ、共に、これ彼が宇宙の根本義と認めしものにして、二にして三にして、二もと別種のものならず。彼が理わるものにあらずといひて、自然説眞情説を極端にまで説きて、調べの説を主張せしもの、實にこゝに根據を有せるなり。彼の説の矛盾も、無理も、この點より考ふれば、解し得べきなり。されば彼は、彼が所謂調べの、なほ全く人爲の工夫を離れて、このへ得ざるものあるを説き、彼の説を極端ならずやと疑ふものに對しては、常に不可説の境地、たい自然に習得すべきなりと説けり。彼の説、素よりこの點に於いて明瞭を缺く缺點ありといへども、彼の立場よりいへば、斯くの如く説き來るば、自然の數なりとす。

彼が説の要領は、以上の如し。彼の説は、素より自然説の極端に流れて、和歌の技術たが性質を忘れし點に於いて、大なる缺點あり。又その説精

景樹の説の批評

しからざる憾あり。かつその含めるところのそれ／＼の思想については、何らの獨創自發のところなく、調べてふ思想の如きも、已に眞淵のそを注意して説きしありきといへど、彼がその歌學説を調べの一眼目に總括し來りたる、その直截簡明の點は、實際上の教訓としては、極めて有功なるものありき。而して彼がこの思想を以て門人を教ふるや、丁寧反覆、委曲巧妙を盡くして、人をして不知不識肯かざるを得ざらしめたり。之に加ふるに、この歌論をたて、自ら唱道せしその歌風は、よく古今風の正雅を傳へ、清新一代を風靡したり。爲に彼が桂園派の流派は、大なる勢力となり、彼の歌論また廣く世に行はれぬ。玄かも、これを彼、殊にその流派の實際の詠歌につきて觀るに、所謂調の優美と想の自然とを崇ぶあまり、平凡の弊に陥れり。これ實に彼が歌論の一面を爲せる缺點の實際に現はれたる自然の結果ならずんばあらず。(なほ歌人としての彼に就いて、著者の評論は、載せて歌學論叢にあり。同書、香川泉樹を論ずる參照)

第八章 鈴屋桂園兩門下

鈴屋門と
桂園門と

宣長の古學と、桂園の歌風とは、其後の文壇を風靡し、その學統を汲みし歌人歌學者の間に於いては、大體いづれも師説を祖述せしが、もとより互に沒交渉なるを得ずして、或は他の説に對して異をたて、或は他の説を自説にとり入れ、多少相影響せり。

こゝに、鈴屋、桂園、兩門下に出でて、注意すべき著述ありし藤井高尙、平田篤胤、熊谷直好、八田知紀、木下幸文等に就いても、篤胤は、眞淵の古學本來の思想を究極して、他派に對して異をたて、高尙は、宣長の思想の根本に立脚しつゝ、桂園派の調の説を批評し、又とり入れたる。直好は、師説を繼承して、あくまで古今風を重んじたるに、知紀は、萬葉の古風を喜び、眞淵派の思想に觸れ、幸文は、宣長の物のあはれの説に對して、難じたり。なほ、以下細叙する所を見るべし。

鈴屋門下
藤井高尙

藤井高尙天保十一年二は、鈴屋門下にありて、すぐれたる一人なり。千

蔭春海の歌風の江戸を風靡せしに次いで、京都なる桂園派隆盛となりし時代に於いて、宣長の學統をひき、根本に於いて宣長の説をうけつゝ、更に特色ある自己の説を、その著三の考るべの一なる

歌の考るべ

歌の考るべ 一卷

に述べたり。これ彼が六十三歳の晩年文化十四年に著はせるもの、蘆庵がただこと歌の主張も一昔となりて、漸う桂園の調の説、世の注意をひきつゝ、おろし時代なり。

詠歌の目的

高尙の歌學説の根本は、歌は何の爲にやうありて詠むものぞといふことにおあり。彼は、この詠歌の目的をふことを中心として、その歌學説を考へたり。即ち、歌は物のあはれの情を歌ひて、人心を感せしめ、又その結果として、卑しき情を雅びかにし、人心を美しくするものなり。これ歌の目的なり。この點に於いては、その宣長の説を襲ひ來れること、明らかなり。而して彼は、此立場よりして、まづ蘆庵一派が、歌は詞を選ばず、つくるはず、思ふ心をたゞありに言ふをよしとなすたゞこと、歌の思想を、全然歌の本

蘆庵を難す

義にたがへるものとして、非難せり。次に、古風近世風の詠歌に對しては、「歌はたゞ一つふりなるを、……二つに言ひわけて、あるは古風を信じて詠み、あるは近世風おもしろしとて詠むなど、皆僻言ぞ」といひ、師宣長が歌を二様にわかち詠むに就いては、「これは學問の一術といふものにして、歌詠む心得にはあらず」と評せり。

以上を根本の考として、彼は更に細かく和歌の特殊論に論じ入り、和歌の要素を情詞及び調の三つに分ちて論じたり。第一に、情につきては、歌の情は、常の心とは異なるものぞ。何にまれ、常に思ふ心は、物の理りをもて自ら制する故に、深きには至らざるを、歌の情は、殊更にいたく深めておろかなる事をも言ふものにぞありける。」と説きて、物のあはれを旨とすといふ思想より、歌の情の特質を述べたり。第二に、詞につきては、歌の詞は、雅びて美しく、をかしきを選びとり、言ひ様續くべき様も、さやうにと深く心して、物する事ぞと説けり。これ又、人をしてあはれと感せしめむ爲なり。而して彼は、この情詞の二つを以て、歌に最も重んずべきものとしたり。

歌の情

歌詞

歌調

第三に、調につきては、「調とは、歌の姿餘情をこめていふ事にて言ひもて行けば、情詞の外ならねど」といひ、「歌の情あはれに、詞のをかしきは、女の心の美しく顔よきなり。調のわるきは、さる女のけはひのいやしげなるが如し」といひて、調を化粧にたとへたり。而してこの思想より、當時の景樹一派が調の説に對しては、「此頃は、之を歌の旨なりとやうにいひて、教ふる人もありとぞ。さやうにあらねど、げに歌は調もなほざりに思ふまじき事なり」といへり。要するに、高尚の説は、よく宣長が思想の眼目をとらへ來りて、和歌の本質を明らむること簡明單純なる自然説にも陥らず、當時の諸學者の説にも觸れたり。宣長の學統に於いては、最も注意すべきものといふべし。

なほ彼の隨筆に、松の落葉あり。その中にのせたる、「今様歌の説」、「古の心をとくべきやう」の文字また見るべし。

平田篤胤

眞淵宣長の學問の正系をうけて、古道の發揮に一身を獻げし、平田篤胤

歌道大意

天保十四年二月三日六八は、春庭内遠等に著るくなり來りし古道的傾向を、究極したり。彼の歌學説は、その著

歌道大意 一卷

その隨筆、

氣吹舎筆叢 二卷

の中に見ゆ。その歌の本義を、物のあはれにありとせるを初め、その説凡て宣長が説の祖述なり。まかも彼に於いて注意すべきは、その古道の目的のもとに、和歌の詠すべく學ぶべきことを、最も明らかに、極端に説きたる點にあり。この點よりして、彼は實に眞淵の學問の根本は古道にありて、彼が作歌も歌學もいづれも古道の爲にせられしなり。(宣長に於いて、然)とし、江戸派一派が、作歌を以て眞淵の本領とし、中世優雅の詞句を詠じて、自ら師が精髓を傳へたりとせるに反對せり。而して斯くの如きは、古道家たる篤胤が當然の態度にして、歌論に於けるかゝる傾向、また已に眞淵に否、近世古學復古のうちに存して、その後發達し來りしものなるこ

歌は古道の方便

江戸派を排す

宣長と彼

と、上述の如くなるが、その傾向が、宣長に於いては物のあはれの思想に從屬して存せしに、篤胤に至りては、専ら古道的の思想を主として、宣長より承けたる物のあはれの思想を從屬せしめて論じたり。即ち歌を詠じ、また歌を學びて物のあはれを知ることは、やがて「物のあはれ」を知ること深き古人の心を學ぶ所以にして、即ちこれ古道に入ることに外ならざるなり。

長野義言

なほ國學を以て井伊直弼萬延元年二五に知られ、後その帷幕に參せし長野義言文久二年二五に

歌の大意

歌の大意——二卷 弘化二年成

の著あり。彼は鈴屋の學風を慕ひ、語學に精しく、袖の鏡、末分櫛、初の栞等の語學書を刊行せるあり。後繁忙なる生涯の間にして、猶歌を嗜み、遺稿數種あり。歌の大意に就いて、その論せる所を見るに、「歌は心を表はす言語の文なり。詠むは行ふ道にして、聞く人感じ、あはれとめでて諧ふも、言

語の文によりて、心情の實も自ら見え顯はるゝが故なり。」と説き、歌學の根本は「歌はいかに心得て、いかなる様に詠むべきかを明らかにするにあり。」となし、「歌は常の俗言とは違ひ、理屈を離れて、事の實情を現はす道なれば、聞く人さもやと思ひ、あはれと感ずる一ふしは、必ず無くてあらぬものなり。されば自ら常に、物のあはれ、ことの實を辨まへて、是を心の主とし、さて故ある折事とある時、その情ふかく、詞まめやかに詠むやうとに、心がくべし。」とて、歌は物のあはれに感ずる心を述べて、人をして同じく感せしむる道なれば、専ら情を主とし、理を離れて詠むべきよしを説きたり。斯くの如く、その思想、宣長を承けたること明らかなるが、なほ高尙に負ふ所ありて、三のまゐるべを引き、詠歌によりて俗情の美しくせらるゝことを説ける一節あり。(以上の歌論を述べて、後、彼は、古今の歌を擧げて評釋せり。)

桂園門下

景樹門下には、歌人多かりしかど、特に記するに足る歌學説を述べし人なし。彼等は、その歌風に於いて、全然景樹を學べると共に、その歌學に於

熊谷直好

いても、大體、景樹が調べの説を傳へたり。中に、やゝ注意すべきものを、熊谷直好、八田知紀、及び木下幸文とす。

熊谷直好、文久二年二五は、十六歳にて景樹の門に入り、桂園門下の先輩として、その才、その學、師にも推重せられたり。神樂催馬樂を評釋せる梁塵後抄安政六年成は、彼が學問を伺ふべき書なり。彼の歌學の書には、景樹が著によりて記せる、

古今集正義序註追考 一卷 天保十三年(六十一歳)成

そを補へる、

古今集正義總論補註 一卷 天保十四年(六十二歳)成

この書につきて、知紀と争へる、

古今集正義總論補註論辨 一卷 弘化二年九月後成

等あり。

八田知紀

八田知紀、明治六年二五は、直好に比すれば後輩にして、景樹が晩年の高足なり。彼が天保元年十一月、三十二歳にて、景樹に入門せし時は、景樹は既

に六十三歳、而して直好は四十九歳なりき。彼の著には、

調の説 一卷 天保八年(三十九歳)成

歌よむ心ばへ 一篇 天保十二年(四十二歳)成

調の直路 一卷

古今正義總論補註論 一卷 弘化二年(四十七歳)成

千代の古道 一卷 弘化三年の序あり

他に、人に答へし書、二三あり。右のうち、古今正義總論補註論は、上記の直好の書に對する論なり。

これらの兩者の説を見るに、その根本とする所は、景樹が誠實といひ、調といひ自然といひし思想の繼承祖述にして、特に創見は無し。されどその古今集正義總論に關する論辨を中心として、兩者の説を比較し來る時は、その間に多少の差異あり。随つて、景樹が説に比して、多少の變化あり。今この點に就きてその要領を叙すべし。

人間の誠實なる性情の聲音に現はるゝところ、そこに自らに調べあり。

兩者の説